

HP Service Health Reporter

ソフトウェアバージョン: 9.40

Windows[®] オペレーティングシステムとLinuxオペレーティングシステム

設定ガイド

ドキュメントリリース日: 2015年1月

ソフトウェアリリース日: 2015年1月



ご注意

保証

HP製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載で追加保証を意図するものは一切ありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、HPはいかなる責任も負いません。

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

権利の制限

機密性のあるコンピューターソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、HPからの有効な使用許諾が必要です。商用コンピューターソフトウェア、コンピューターソフトウェアに関する文書類、および商用アイテムの技術データは、FAR 12.211および12.212の規定に従い、ベンダーの標準商用ライセンスに基づいて米国政府に使用許諾が付与されます。

著作権について

© Copyright 2015 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標

Adobe® は、Adobe Systems Incorporatedの商標です。

Microsoft® およびWindows® は、Microsoft Corporationの米国登録商標です。

UNIX® は、The Open Groupの登録商標です。

ドキュメントの更新情報

このマニュアルの表紙には、以下の識別番号が記載されています。

- ソフトウェアのバージョン番号は、ソフトウェアのバージョンを示します。
- ドキュメントリリース日は、ドキュメントが更新されるたびに変更されます。
- ソフトウェアリリース日は、このバージョンのソフトウェアのリリース期日を表します。

最新の更新のチェック、またはご使用のドキュメントが最新版かどうかのご確認には、次のサイトをご利用ください。

<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>

このサイトを使用するには、HP Passportに登録してサインインする必要があります。HP Passport IDを登録するには、次のURLを参照してください。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html> (英語サイト)

または、HP Passportのログインページの [New users - please register] リンクをクリックします。

適切な製品サポートサービスをお申し込みいただいたお客様は、更新版または最新版をご入手いただけます。詳細は、HPの営業担当にお問い合わせください。

サポート

次のHP SoftwareサポートオンラインWebサイトをご覧ください。 <http://www.hp.com/go/hpsupport>

このサイトでは、HPのお客様窓口のほか、HPソフトウェアが提供する製品、サービス、サポートに関する詳細情報をご覧いただけます。

HPソフトウェアのオンラインサポートでは、セルフソルブ機能を提供しています。お客様のビジネスを管理するのに必要な対話型の技術サポートツールに、素早く効率的にアクセスできます。HPソフトウェアサポートのWebサイトでは、次のようなことができます。

- 関心のあるナレッジドキュメントの検索
- サポートケースの登録とエンハンスメント要求のトラッキング
- ソフトウェアパッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HPサポート契約の検索
- 利用可能なサービスに関する情報の確認
- 他のソフトウェアカスタマーとの意見交換
- ソフトウェアトレーニングの検索と登録

一部を除き、サポートのご利用には、HP Passportユーザーとしてご登録の上、ログインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。HP Passport IDを登録するには、次のWebサイトにアクセスしてください。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html> (英語サイト)

アクセスレベルに関する詳細は、以下のWebサイトにアクセスしてください。

http://support.openview.hp.com/access_level.jsp

HP Software Solutions Now は、HPSWのソリューションと統合に関するポータルWebサイトです。このサイトでは、お客様のビジネスニーズを満たすHP製品ソリューションを検索したり、HP製品間の統合に関する詳細なリストやITILプロセスのリストを閲覧することができます。このWebサイトのURLは <http://h20230.www2.hp.com/sc/solutions/index.jsp> です。

オンラインヘルプの本PDFバージョン について

このドキュメントはオンラインヘルプのPDFバージョンです。このPDFファイルは、ヘルプ情報から複数のトピックを容易に印刷したり、PDF形式でオンラインヘルプを閲覧することができます。本内容は、本来Webブラウザでのオンラインヘルプとして表示するように作成されているため、一部のトピックが正しくフォーマットされない場合があります。このPDF版では、一部の対話型トピックが表示されない場合があります。そうしたトピックはオンラインヘルプ内から正常に印刷できます。

目次

第1部: SHRの設定	7
第1章: SHRによってサポートされるデプロイメントシナリオ	8
HP Operations Manager	8
Business Service Management/Operations Manager i	9
VMware vCenter	11
その他のデータのソース	12
第2章: BSM/OMiと連携させるためのSHRの設定	14
次のRTSMトポロジソースの設定: SHR	14
コンテンツパックのCI属性の有効化	19
第2章: HPOMと連携するためのSHRの設定	23
第3章: 主要な設定	33
タスク1:管理コンソールの起動	35
タスク2:データベース接続の設定	36
タスク3:データベーススキーマの作成	37
タスク4:管理データベースユーザーアカウントの作成	42
タスク5:リモートシステムにインストールされているコレクターの設定	44
タスク6:データソースの選択	45
BSMまたはOMiシナリオのデータソース	46
HPOMデプロイメントシナリオのデータソース	47
VMware vCenterのデータソース	48
タスク7:トポロジソースの設定	48
RTSMサービス定義ソースの設定	48
HPOMサービス定義ソースの設定	50
vCenterサービス定義の設定	52
タスク8:サマリー	53
第4章: データソースの設定	54
管理およびプロファイルデータベースの設定	54
HP OMiデータソースの設定	58
HP Operations Managerデータソースの設定	59
HP Operations Agentデータソースの設定	60
ネットワークデータソースの設定 (汎用データベースの使用)	60
VMware vCenterデータソースの設定	62
SiteScopeデータソースの設定	63
第5章: コンテンツパックのインストール	66
開始する前に	66
データソースのチェック	66
コンテンツパックコンポーネントの選択	67

コンテンツパックコンポーネントのインストール	68
第II部: ライセンス取得	71
第6章: SHRのライセンス取得	72
ライセンス使用权 (LTU)	72
永久的なライセンスキーの取得	74
永久的なライセンスキーのインストール	75
SAP BusinessObjectsライセンスの再アクティブ化	76
第III部: Windows 2012環境への移行	78
第7章: 並列移行	79
第IV部: 追加の設定	84
第8章: SHR用のセキュアな接続の設定 (HTTPS)	85
キーストアファイルの作成	85
セキュアな接続の設定 (HTTPS)	85
SHRの管理コンソールの場合	86
SHRのInfoViewコンソールの場合	87
第9章: SHR用のクライアント認証証明書	90
認証と承認	90
証明書に基づいた認証の前提条件	90
ユーザー名抽出方法の設定	93
SHR管理コンソールの設定	93
SAP BusinessObjects InfoViewの設定	97
第10章: データベースのバックアップとリカバリ	101
WindowsでのSHRデータベースのバックアップの作成	102
Sybase IQデータベースの場合	102
SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合	113
管理データベーステーブルの場合	119
LinuxでのSHRデータベースのバックアップの作成	123
Sybase IQデータベースの場合	123
SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合	126
管理データベーステーブルの場合	127
SHRデータベースの復元	128
WindowsでのSHRの復元	128
Sybase IQデータベースの場合	128
SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合	131
管理データベーステーブルの場合	135
LinuxでのSHRの復元	136
Sybase IQデータベースの場合	136
SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合	138
管理データベーステーブルの場合	146

第V部: 参考文献	148
付録A: SHRのSiteScopeモニター	149
付録B: Xcelsiusのインストール	154
ハードウェアおよびソフトウェアの要件	154
Xcelsiusのインストール(オプション)	154
ドキュメントに関するフィードバックの送信	155

第1部: SHRの設定

本項では、環境に応じたレポートを生成するための、SHRでサポートされるさまざまなデプロイメントシナリオに関する情報を提供します。

Service Health Reporter (SHR) は、クロスドメインの、履歴に基づいたインフラストラクチャパフォーマンスレポートソリューションです。トポロジ情報を活用して、基盤となるインフラストラクチャ稼働状態、パフォーマンス、および可用性がビジネスサービスやビジネスアプリケーションに長期的にどのような影響を与えるかを示します。SHRは、管理対象ノードからパフォーマンスデータを収集する製品で使用されるものと同じトポロジサービスを使用して、実行時にインフラストラクチャ要素とビジネスサービスの関係を管理します。

Service Health Reporterは、さまざまなデータソースからデータを収集して処理し、処理済みのデータを使用してレポートを生成します。Service Health Reporterは、パフォーマンスデータを格納するためのSybase IQデータベース、レポートを作成するためのSAP BusinessObjects、管理データを格納するためのPostgreSQLデータベースといったコンポーネントを使用します。SHRのコレクターコンポーネントは、RTSM、HPOM、BSMプロファイルデータベース、BSM管理データベース、Operations Manager i (OMi)、HP SiteScope、NNM iSPI Performance for MetricsおよびNetwork Performance Server (NPS) を介したHP Network Node Manager i (NNMi)、HP Operations Agentからデータを取得します。

Service Health Reporterのすべてのコンポーネントを単一のシステムにインストールできます。単一のシステムでService Health Reporterのすべてのコンポーネントをサポートできない場合は、データコレクター、SAP BusinessObjects、Sybase IQコンポーネントを別々のシステムにインストールできます。データソースが大規模な領域にわたって分散している場合、Service Health Reporterコレクターを異なる複数のシステムにデプロイできます。ネットワーク負荷を軽減し、データソースへの接続性を高めることができます。

トポロジモデルまたはビューは、ビジネスサービスをIT要素に論理的にマッピングして関連付けます。SHRを使用すると、トポロジサービスを定義し、トポロジの一部になっているノードからインフラストラクチャデータを収集できます。この方法では、トポロジ情報のすべての変更が実行時にレポートに自動的に反映されます。

SHRは、次のトポロジソースをサポートします。

- BSM/OMi
- HP Operations Manager (HPOM)
- VMware vCenter

SHRは一度にいずれか1つのみのトポロジソースに接続できます。

第1章: SHRによってサポートされるデプロイメントシナリオ

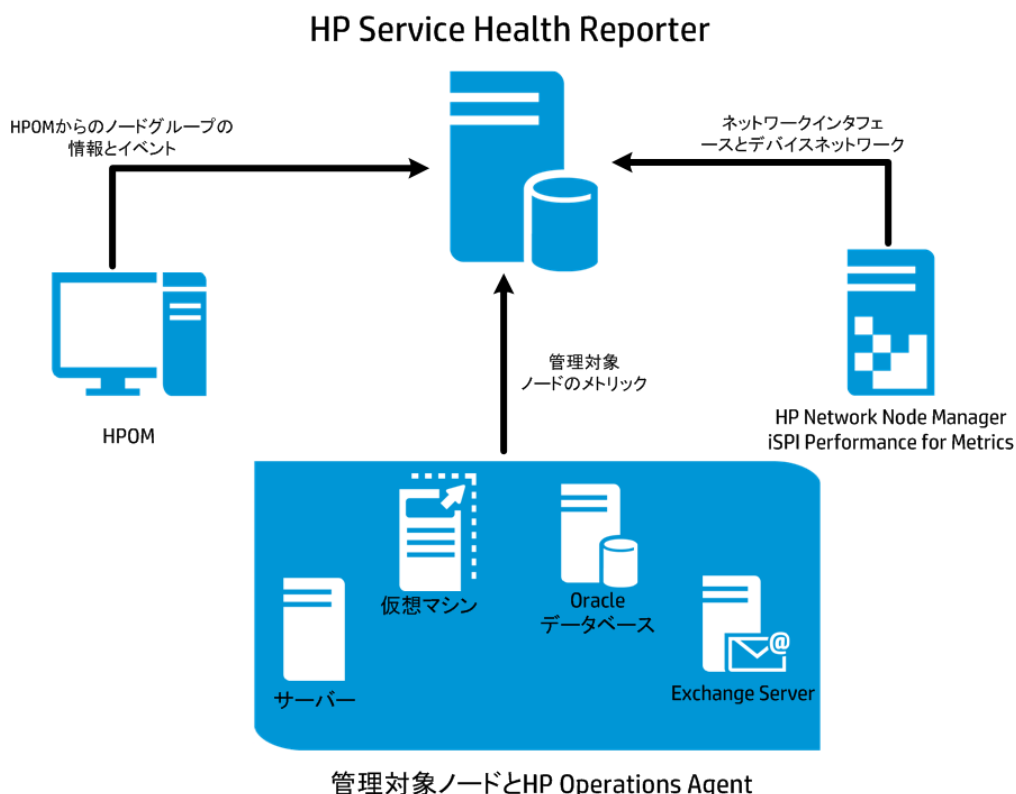
SHRによってサポートされるデプロイメントシナリオは次のとおりです。

- BSM/OMiのデプロイメント
- HP Operations Managerのデプロイメント
- VMware vCenterのデプロイメント
- その他のデプロイメント

HP Operations Manager

このデプロイメントでは、トポロジ情報は、HPOM内に定義された管理対象ノードのグループであり、操作を監視するために論理的に組み合わせられます。これらの論理的なノードグループは、HPOMユーザーによって、エンタープライズ内の特定の組織またはエンティティとしてノードを分類するために作成されます。たとえば、Exchange Serversという名前のグループをHPOM内に作成し、レポートまたは監視を目的として、固有のExchange ServerノードとActive Directoryノードをまとめることができます。SHRは、HPOMのノードグループをそのトポロジ計算のために使用します。

SHRではこの環境のHPOMからのみトポロジ情報が収集されますが、VMware vCenterをデータソースとして使用してレポートを作成できます。

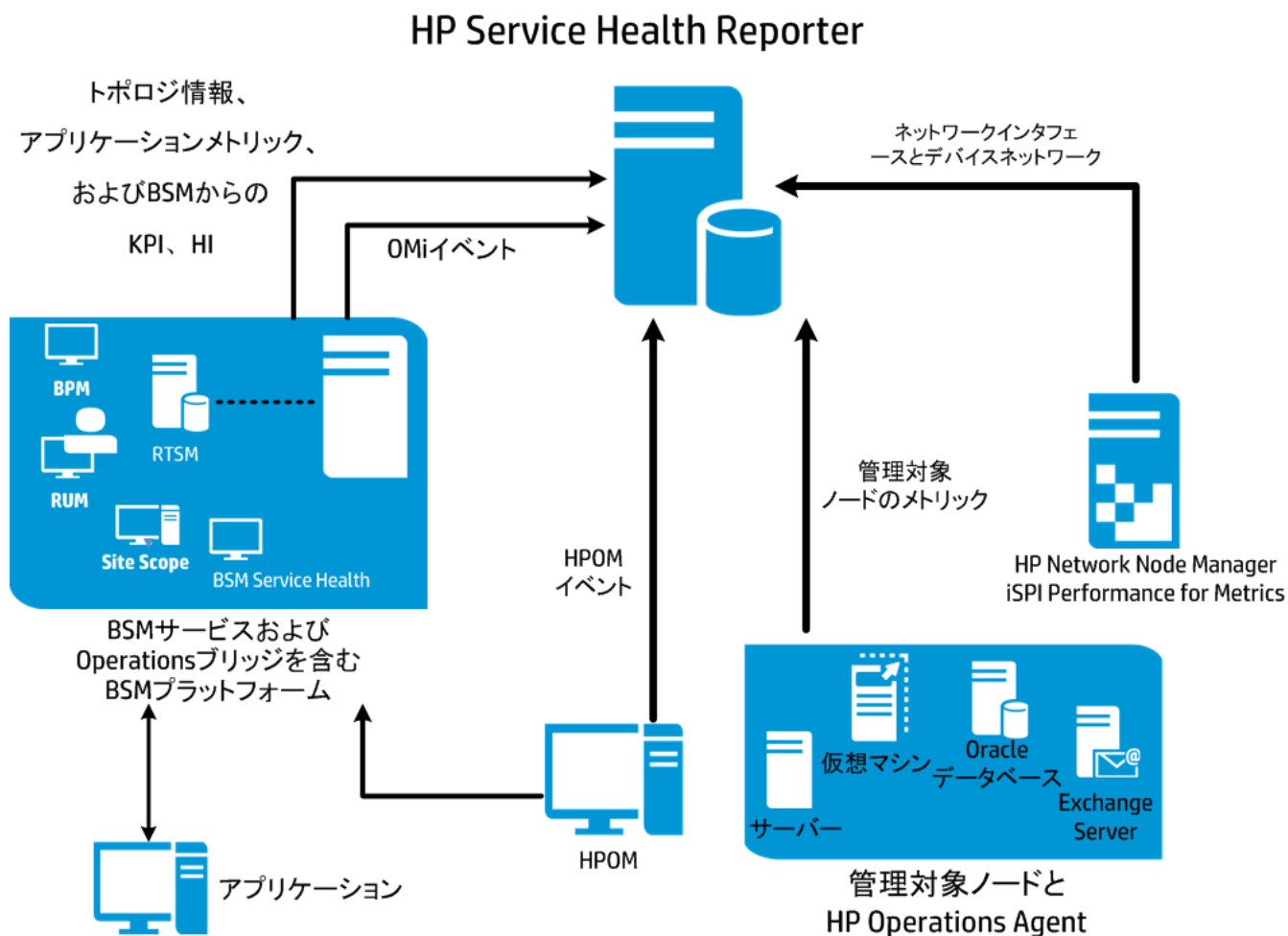


Business Service Management/Operations Manager i

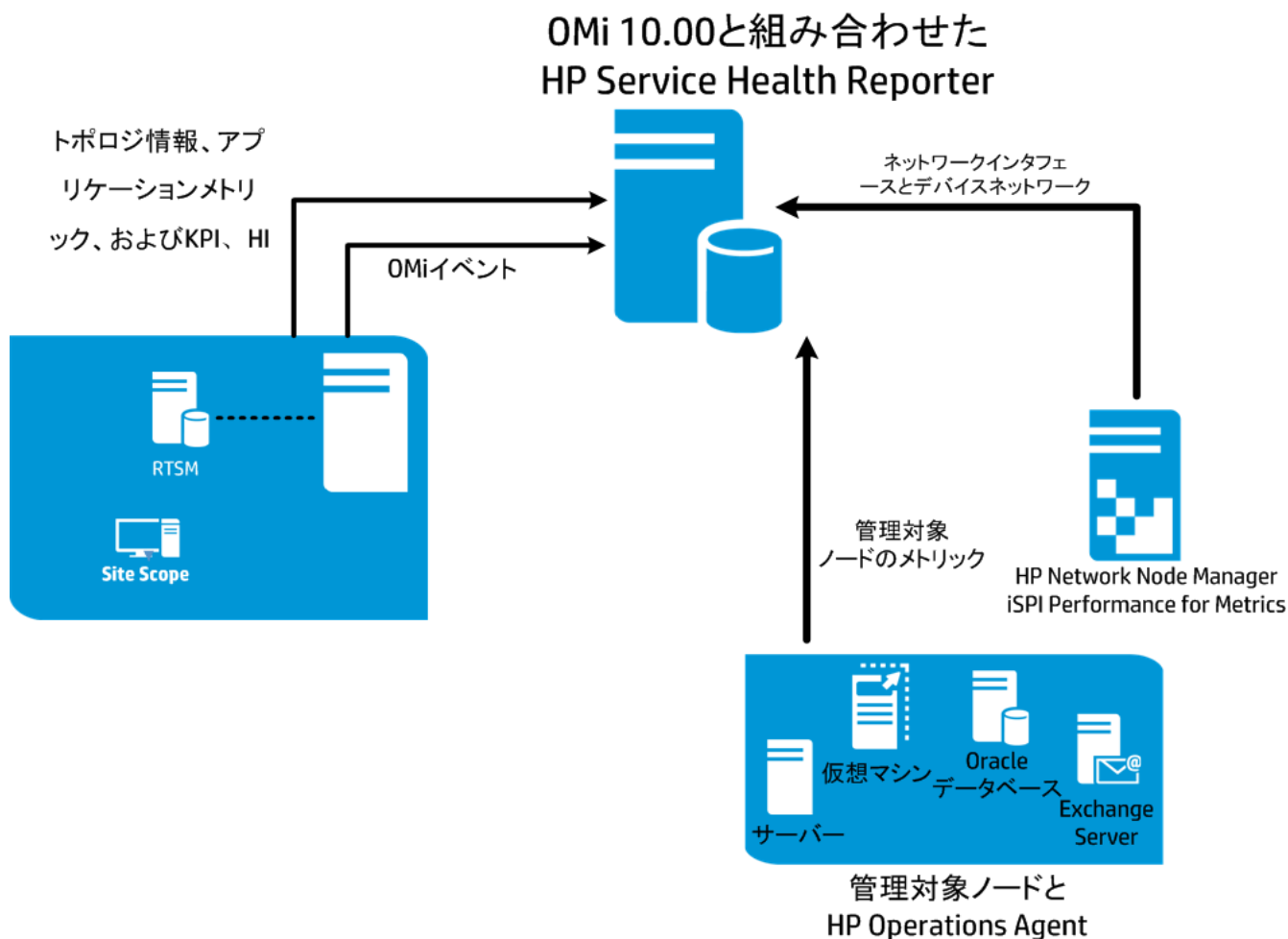
このデプロイメントでは、Run-time Service Model (RTSM) がトポロジ情報のソースです。SHRは、OMiからトポロジ情報を検出して同期化します。基盤となるHPOMサーバーを備えたBSM環境では、この同期手法により、複数のHPOMシステムから検出されたトポロジデータを受け取り、変更が検出されるとすぐにRTSM内の構成アイテム (CI) およびCIの関係を更新します。ただし、HPOM D-MoM動的トポロジ同期化の手法を使用して、RTSM内のトポロジ情報を検出して同期することもできます。OMi 10.00を備えた環境では、SHRはRTSMを使用して、OMiが設定されているHP Operations AgentまたはHP SiteScopeシステムからトポロジ情報およびメトリックを取得します。

さらに、NPSをSHRと連携するように設定して、NNMiによって収集されたデータを使用してレポートを作成できます。

次の図では、HP Operations Agent、HPOM、NNM iSPI Performance for Metricsからのデータの流れ、および基盤となるHPOMサーバーを備えたBSM環境のRTSMからのトポロジ情報を示します。



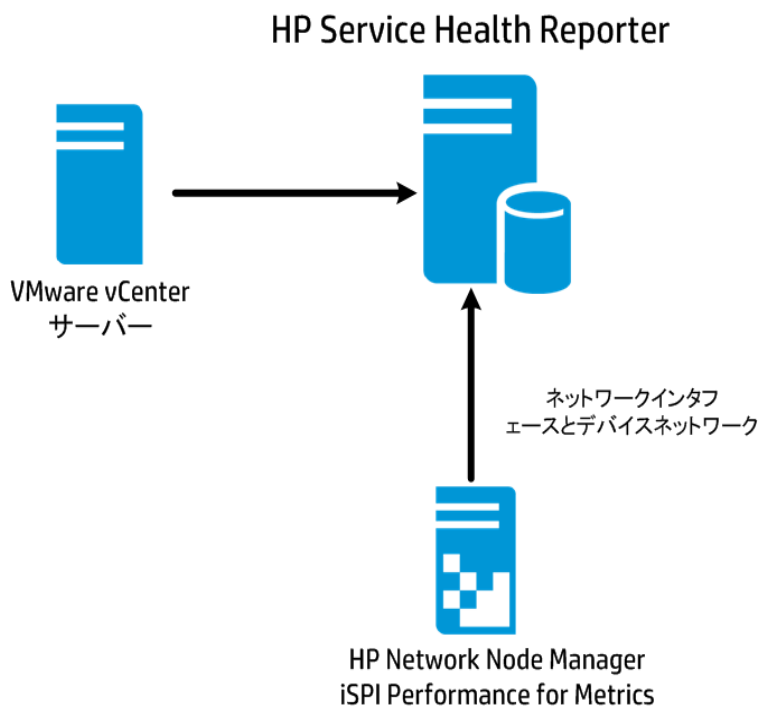
次の図では、HP Operations Agent、HPOM、NNM iSPI Performance for Metricsからのデータの流れ、およびOMi 10.00環境のRTSMからのトポロジ情報を示します。



VMware vCenter

VMware vCenterは、エンタープライズのビジネスに不可欠なシステムの仮想インフラストラクチャの管理を行う柔軟な中央プラットフォームを提供する分散型サーバー/クライアントソフトウェアソリューションです。VMware vCenterは、パフォーマンスとイベントを一元的に監視し、仮想環境の視認性のレベルを拡張します。このようにして、IT管理者が環境を制御するのに役立ちます。

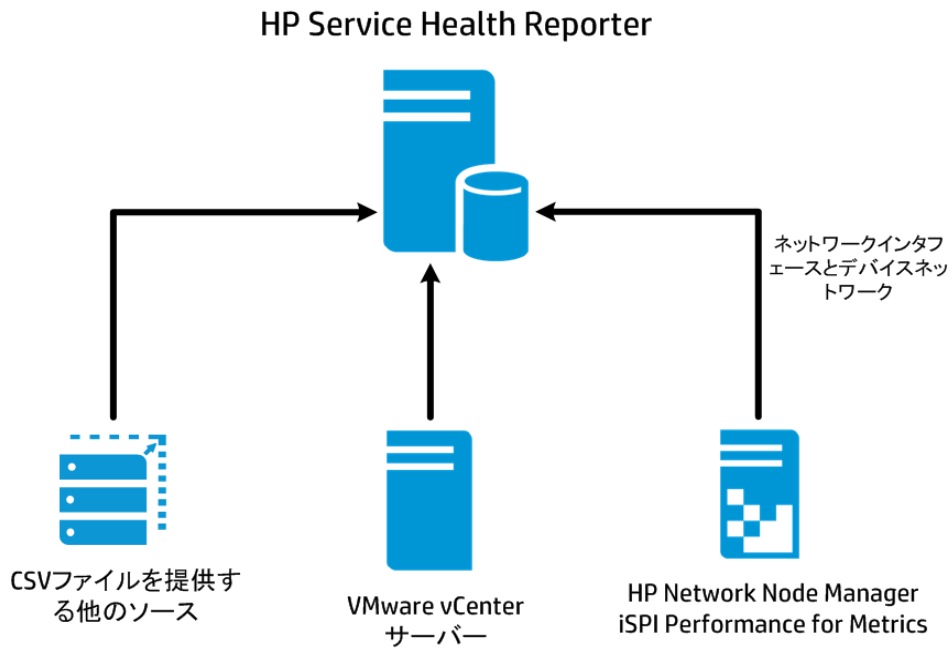
VMware vCenterのデプロイメントシナリオでは、VMware vCenterサーバーが、SHRのトポロジ情報のソースになります。



その他のデータのソース

基本的なデプロイメントシナリオとは別に、次のソースから独自にデータを収集できます。

- NNMiのデプロイメント
- 汎用データベースのデプロイメント
- CSVを使用した他のアプリケーションのデプロイメント



第2章: BSM/OMiと連携させるためのSHRの設定

BSMまたはOMiインストールと連携するようにSHRを設定する場合は、次の項目を確認する必要があります。

- BSM/OMiが正常にインストールされ、設定されていること
- OMiおよび管理パックの監視自動化コンポーネントを使用してシステムおよびアプリケーションを監視している場合は、必要な管理パックポリシーがデプロイされていること
- 基盤となるHPOMサーバーおよびスマートプラグイン (SPI) を使用してシステムおよびアプリケーションを監視している場合は、必要なSPIポリシーがデプロイされていること
- 必要なOMiビューがデプロイされていること (「次のRTSMトポロジソースの設定: SHR」(14ページ)を参照)

次のRTSMトポロジソースの設定: SHR

RTSMはSHRのトポロジ情報のソースです。トポロジ情報には、RTSMにおいてモデル化されて検出されるすべてのCIが含まれます。ノードリソース情報は、HP Operations AgentおよびHP SiteScopeから直接取得されます。

注: ノードリソースは、HP Operations AgentおよびHP SiteScopeのローカルディメンションです。

管理パックの前提条件

OMi10データソースからデータを収集する次のSHRコンテンツパックのレポートを表示するには、対応する管理パックがインストールされている必要があります。

- Microsoft Active Directory
- Microsoft Exchange
- Microsoft SQL Server
- Oracle
- Oracle WebLogic
- IBM WebSphere

これらの管理パックのインストールは、Service HealthおよびOMiのSHRレポートを表示する場合にも必須です。

SHRでRTSMトポロジソースを設定するには、次のタスクを実行する必要があります。

タスク1: トポロジビューのデプロイメント

HP BSM環境では、RTSMを使用してCIが検出され、トポロジビューが作成されます。ドメイン固有のデータを収集するようにSHRを設定するには、まずコンテンツパックごとにそのようなトポロジビューをデプロイする必要があります。

そのトポロジビューには、コンテンツパックが関連データを収集するのに使用する個々のCI属性が備えられています。ただし、このトポロジビューは、コンテンツパックごとに異なる可能性があります。

たとえば、Exchange Serverコンテンツパックでは、Exchange Server、メールボックスサーバー、メールボックスおよびパブリックフォルダストアなどを一覧表示するトポロジビューが必要になることがあります。ただし、システム管理コンテンツパックでは、すべてのビジネスアプリケーション、ビジネスサービス、およびインフラストラクチャ内のCPU、メモリー、ディスクなどのシステムリソースを一覧表示する別のトポロジビューが必要になる可能性があります。これらのビューに基づいて、各コンテンツパックのCI属性はそれぞれ異なる可能性があります。

HP BSMサーバーでのコンテンツパック用のトポロジモデルビューをデプロイするには、次の手順を実行します。

1. 管理者としてHP BSMホストシステムにログオンします。
2. HP BSMホストシステムからリモートアクセスを介して、SHRがインストールされているホストシステムに管理者としてログオンします。

%PMDB_Home%\packages (Windowsの場合) または \$PMDB_HOME/packages (Linuxの場合) に移動し、次のトポロジビューをコピーします。

コンテンツパック	ビュー名	場所
BPM (合成トランザクションモニタリング)	EUM_BSMR.zip	<p>Windowsの場合</p> <p>%PMDB_HOME%\packages\EndUserManagement\ETL_BPM.ap\source\cmdb_views</p> <p>Linuxの場合</p> <p>\$PMDB_HOME/packages\EndUserManagement\ETL_BPM.ap\source\cmdb_views</p>
Real User Transaction Monitoring	EUM_BSMR.zip	<p>Windowsの場合</p> <p>%PMDB_HOME%\packages\EndUserManagement\ETL_RUM.ap\source\cmdb_views</p> <p>Linuxの場合</p> <p>\$PMDB_HOME/packages\EndUserManagement\ETL_RUM.ap\source\cmdb_views</p>
ネットワーク	SHR_Network_	<p>Windowsの場合</p>

コンテンツパック	ビュー名	場所
	Views.zip	%PMDB_HOME%\packages\Network\ETL_Network_NPS.ap\source\cmdb_views Linuxの場合 \$PMDB_HOME\packages\Network\ETL_Network_NPS.ap\source\cmdb_views
システム管理	SM_BSM9_Views.zip	Windowsの場合 %PMDB_HOME%\packages\SystemManagement\ETL_SystemManagement_PA.ap\source\cmdb_views Linuxの場合 \$PMDB_HOME\packages\SystemManagement\ETL_SystemManagement_PA.ap\source\cmdb_views
Oracle	SHR_DBOracle_Views.zip	Windowsの場合 %PMDB_HOME%\Packages\DatabaseOracle\ETL_DBOracle_DBSPI.ap\source\cmdb_views\SHR_DBOracle_Views.zip Linuxの場合 \$PMDB_HOME\Packages\DatabaseOracle\ETL_DBOracle_DBSPI.ap\source\cmdb_views\SHR_DBOracle_Views.zip
Oracle WebLogic Server	J2EEApplication.zip	Windowsの場合 %PMDB_HOME%\packages\ApplicationServer\ETL_AppSrvrWLS_WLSSPI.ap\source\cmdb_views Linuxの場合 \$PMDB_HOME\packages\ApplicationServer\ETL_AppSrvrWLS_WLSSPI.ap\source\cmdb_views
IBM WebSphere Application Server	J2EEApplication.zip	Windowsの場合 %PMDB_HOME%\packages\ApplicationServer\ETL_AppSrvrWBS_WBSSPI.ap\source\cmdb_views Linuxの場合 \$PMDB_HOME\packages\ApplicationServer\ETL_AppSrvrWBS_WBSSPI.ap\source\cmdb_views

コンテンツパック	ビュー名	場所
Microsoft SQL Server	SHR_DBMSSQL_Views.zip	<p>Windowsの場合</p> <p>%PMDB_HOME%\packages\DatabaseMSSQL\ETL_DBMSSQL_DBSPI.ap\source\cmdb_views</p> <p>Linuxの場合</p> <p>\$PMDB_HOME\packages\DatabaseMSSQL\ETL_DBMSSQL_DBSPI.ap\source\cmdb_views</p>
Microsoft Exchange Server	SHR_Exchange_Business_View.zip	<p>Windowsの場合</p> <p>%PMDB_HOME%\packages\ExchangeServer\ETL_Exchange_Server2007.ap\source\cmdb_views</p> <p>Linuxの場合</p> <p>\$PMDB_HOME\packages\ExchangeServer\ETL_Exchange_Server2007.ap\source\cmdb_views</p>
Microsoft Active Directory	SHR_AD_Business_View.zip	<p>Windowsの場合</p> <p>%PMDB_HOME%\packages\ActiveDirectory\ETL_AD_ADSPi.ap\source\cmdb_views</p> <p>Linuxの場合</p> <p>\$PMDB_HOME\packages\ActiveDirectory\ETL_AD_ADSPi.ap\source\cmdb_views</p>

たとえば、システム管理zipファイルをコピーするには、%pmdb_home%\packages\System_Management\System_Management.ap\CMDB_View\SM_BSM9_Views.zipに移動し、SM_BSM9_Views.zipファイルをHP BSMホストシステムにコピーします。

3. Webブラウザで、以下のURLを入力します。

http://<サーバー名>.<ドメイン名>/HPBSM

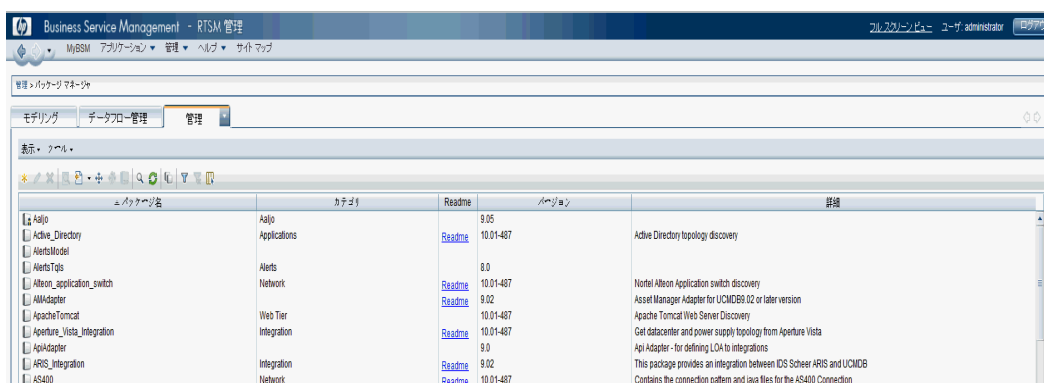
この場合、<サーバー名>は、HP BSMサーバーの名前、<ドメイン名>は、ユーザーネットワーク設定どおりのユーザーのドメインの名前です。

[Business Service Managementのログイン] ページが開きます。

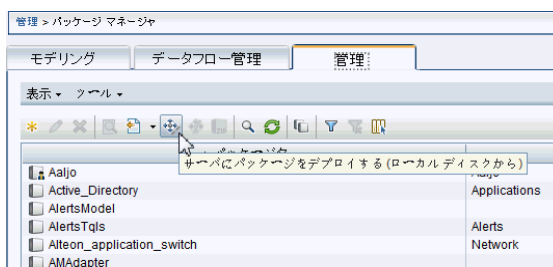
4. ログイン名とパスワードを入力し、[ログイン] をクリックします。[Business Service Management - サイトマップ] が開きます。
5. [管理] -> [RTSM管理] をクリックします。[RTSM管理] ページが開きます。



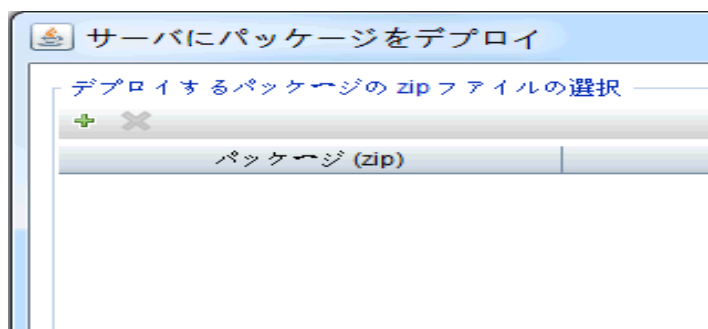
6. **[管理]** -> **[パッケージマネージャー]** をクリックします。**[パッケージマネージャー]** ページが開きます。



7. **[サーバーにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)]** アイコンをクリックします。**[サーバーにパッケージをデプロイ]** ダイアログボックスが開きます。



8. **[追加]** アイコンをクリックします。



[サーバにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)] ダイアログボックスが開きます。

9. コンテンツパックzipファイルの場所に移動し、目的のファイルを選択してから、**[開く]**をクリックします。

[サーバにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)] ダイアログボックスの [デプロイするリソースを選択] の下で、デプロイするTQLビューおよびODBビューを表示および選択することができます。すべてのファイルを選択したことを確認します。

10. **[デプロイ]**をクリックし、コンテンツパックビューをデプロイします。

コンテンツパックのCI属性の有効化

注: OMi 10.00を使用する場合でも本項の内容に従ってください。OMi 10.00環境では、(次の設定手順において) BSMサーバーの代わりに、OMiサーバーの詳細を使用します。

どのコンテンツパックビューにも、そのコンテンツパックに固有のCI属性のリストが備えられています。データ収集に必要なCI属性は、デプロイ後の各コンテンツパックビューにおいて自動的に有効になります。

ビジネスニーズに関連した追加情報を収集するための追加のCI属性を有効にするには、次の手順を実行します。

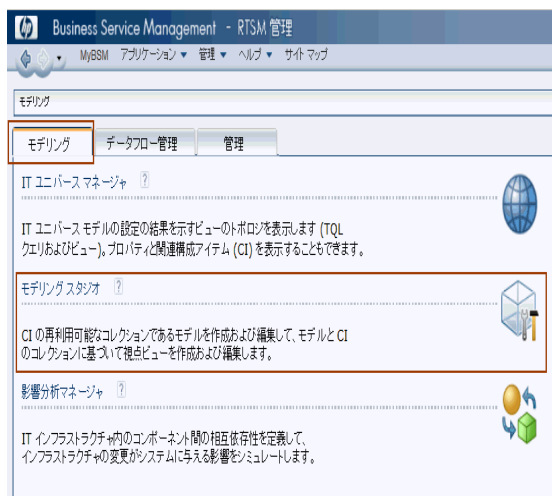
1. Webブラウザで、以下のURLを入力します。

`http://<サーバー名>.<ドメイン名>/HPBSM`

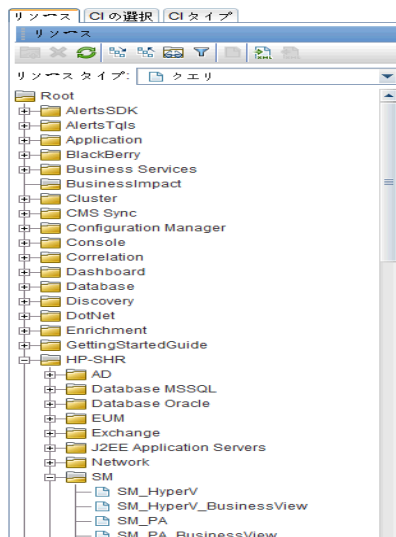
ここでの <サーバー名> は、HP BSMサーバーの名前、<ドメイン名> は、ユーザーネットワーク設定どおりのユーザーのドメインの名前です。

[Business Service Managementのログイン] ページが開きます。

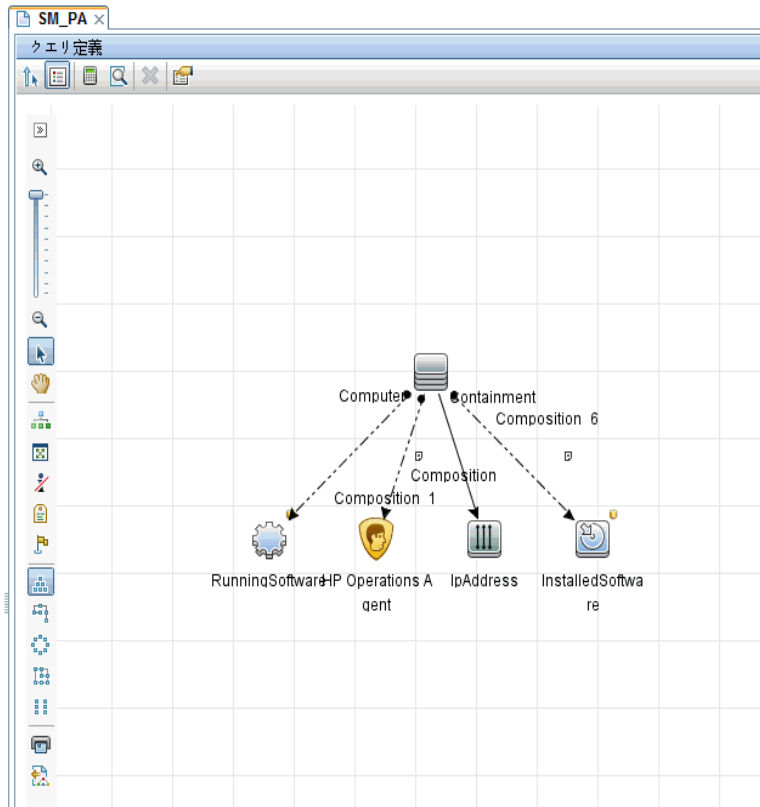
2. ログイン名とパスワードを入力し、**[ログイン]**をクリックします。[ビジネスサービス管理 - サイトマップ]が開きます。
3. **[管理]** -> **[RTSM管理]** をクリックします。[RTSM管理] ページが開きます。
4. **[モデリング]** -> **[モデリング スタジオ]** をクリックします。[モデリング スタジオ] ページが開きます。



5. [リソース] ペインで、[HP-SHR] を展開し、コンテンツパックのフォルダーを展開して、トポロジビューをダブルクリックして開きます。

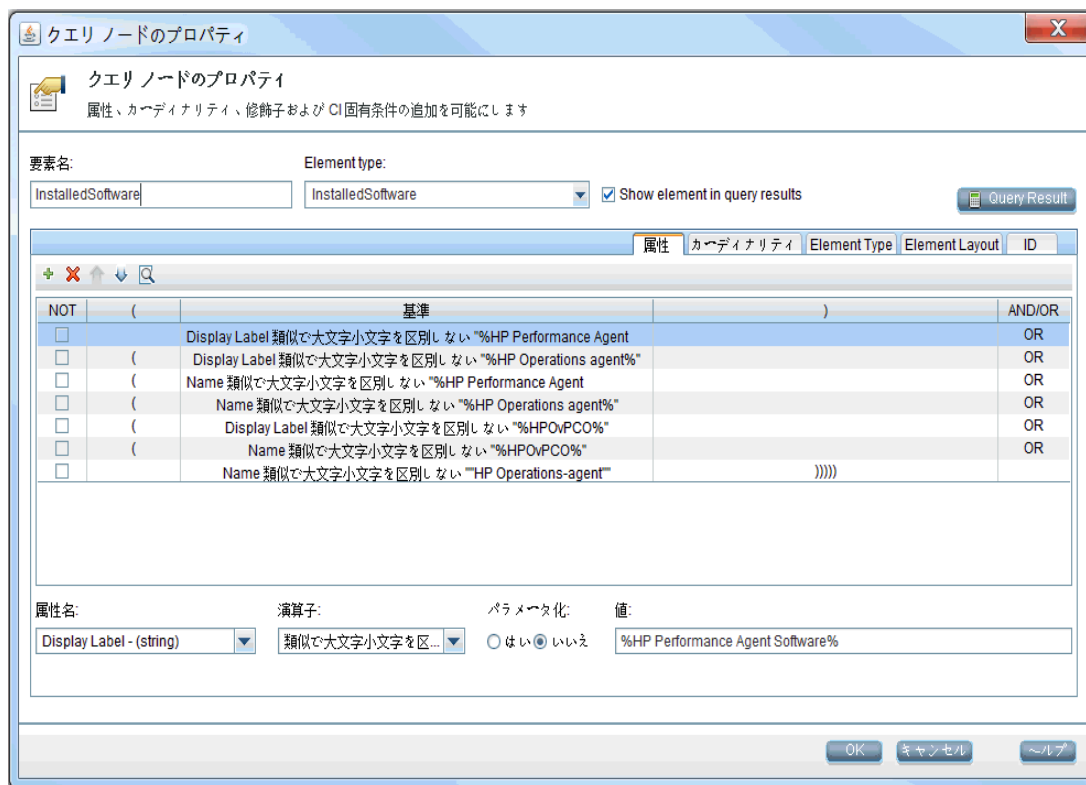


6. トポロジペインで、トポロジ図内の任意のノードを右クリックしてから [クエリノードのプロパティ] をクリックして、選択したノードのCI属性のリストを表示します。



[クエリ ノードプロパティ] ダイアログボックスが開きます。

7. **[属性]** をクリックします。有効化する属性を選択してから **[OK]** をクリックします。



SHRに対して選択したタイプのデプロイメントシナリオに基づいて、コンテンツパックのデプロイが正常に完了しました。

SHRとの統合のためのSiteScopeの設定

HP SiteScopeは、サーバー、オペレーティングシステム、ネットワークデバイス、ネットワークサービス、アプリケーション、アプリケーションコンポーネントなどの分散ITインフラストラクチャの可用性とパフォーマンスを確保するよう設計されたエージェント不要の監視ソリューションです。

SHRがSiteScopeから物理ノードのデータを収集するには、最初にSiteScopeでモニターを作成する必要があります。モニターは、エンタープライズビジネスシステムで使用されている各種のシステムとアプリケーションに自動的に接続して問い合わせを行うツールです。このモニターは、環境内にあるさまざまなITコンポーネントに関するデータを収集し、CPU使用率、メモリー使用率など、SHRが使用する特定のメトリックにマップされます。モニターを作成したら、SiteScopeがHP Operations Agent/BSMプロファイルデータベースでデータのログを記録して、エージェントから必要なデータをSHRが収集できるようにする必要があります。このタスクは、SiteScopeを環境内にインストールした場合にのみ実行してください。そうでない場合は、次のタスクに進みます。

SiteScopeに作成するモニター (カウンターおよび測定を含む) のリストについては、[「SHRのSiteScopeモニター」 \(149ページ\)](#)を参照してください。

SiteScopeにモニターを作成する方法の詳細については、『*SiteScopeの使用*』および『*Monitor Reference*』ガイドを参照してください。このドキュメントは、以下のURLに用意されています。

<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>

SiteScopeモニターによって収集されたトポロジデータをBSMに転送するには、SiteScopeとBSM間の統合を有効にします。BSMとのSiteScopeの統合の詳細は、『*SiteScopeの使用*』ガイドの「*Business Service Management (BSM) との連携*」を参照してください。

SiteScopeをSHRに統合するには、次の手順を実行します。

1. SHRがインストールされているホストシステムに管理者としてログオンします。
2. SiteScopeアドレスをWebブラウザに入力することにより、SiteScopeにアクセスします。デフォルトアドレスは次のとおりです。http://<SiteScopeホスト名>:<ポート番号>/SiteScope
3. データのログ記録のためにSiteScopeをHP Operations Agentに統合できるようにします。詳細については、『*SiteScopeの使用*』ガイドの「*HP Operations Agentを使用したOperations ManagerとBSMでの作業*」を参照してください。
4. モニター数と、HP Operations Agentの統合システムにデータを取り込む頻度を設定します。デフォルトのSiteScope設定で数千のモニターの実行は可能ですが、SiteScope-HPOMのメトリックの統合において保存できるモニターの最大数、メトリック、およびモニタータイプの計画を立てるには、サイズ設定が重要です。詳細については、『*SiteScopeの使用*』ガイドの「*SiteScope-Operations Manager測定値統合のサイズ設定の推奨事項*」を参照してください。

サービス定義でリモートコレクターを設定した場合は、コンテンツパックをインストールした後にコレクターシステムでコレクターサービスを再起動します。

Windowsでサービスを手動で再起動するには、HP_PMDB_Platform_Collectionを右クリックし、**[再開]**をクリックします。

Linuxでサービスを手動で再起動する場合は、/etc/init.dディレクトリに移動し、次のコマンドを実行します。

```
service HP_PMDB_Platform_Collection --full-restart
```

第2章: HPOMと連携するためのSHRの設定

HPOMインストールと連携するようにSHRを設定する場合は、次の項目を確認する必要があります。

- HPOMが正常にインストールされ、設定されていること
- 必要なSPIポリシーがデプロイされていること
- 必要なOMiビューがデプロイされていること (「[次のRTSMトポロジソースの設定: SHR](#)」(14ページ)を参照)

SHRがドメイン内にインストールされている場合のSHRサービスの設定

SHRがドメインの一部であるシステムにインストールされている場合や管理者権限 (例: DOMAIN\Administrator) を持つローカルユーザーまたはドメインユーザーとしてそのようなシステムにログインしている場合、*HP PMDB Platform Administrator*および*HP PMDB Platform Collection*サービ

を開始します。HPOMサービス定義ソース接続を設定する前に、ドメインのサービスを設定する必要があります。

タスク1: ドメインのHP PMDB Platform Administratorサービスの設定

1. 設定を行うには、次の手順を実行します。
2. [スタート]->[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが開きます。
3. [名前]フィールドにservices.mscと入力し、[ENTER]キーを押します。[サービス]ウィンドウが開きます。
4. 右側のペインで、HP_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、[停止]をクリックします。
5. HP_PMDB_Platform_Administrator を右クリックし、[プロパティ]をクリックします。[SHRのプロパティ]ダイアログボックスが開きます。
6. [ログオン]タブで[アカウント]を選択します。
7. フィールドにDOMAIN\Administratorと入力します(ここで、管理者は管理者権限を持つローカルユーザーです)。
8. ユーザーパスワードを[パスワード]フィールドに入力します。
9. パスワードを[パスワードの確認入力]フィールドに再度入力します。
10. [適用]をクリックし、[OK]をクリックします。
11. 右側のペインで、HP_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、[開始]をクリックします。

タスク2: ドメインのHP PMDB Platform Collectionサービスの設定

次の手順を実行します。

1. [スタート]->[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが開きます。
2. [名前]フィールドにservices.mscと入力し、[ENTER]キーを押します。[サービス]ウィンドウが開きます。
3. 右のペインで、HP_PMDB_Platform_Collection Serviceを右クリックし、[停止]をクリックします。
4. HP_PMDB_Platform_Collection_Serviceを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。[SHR Collection Serviceのプロパティ]ダイアログボックスが開きます。
5. [ログオン]タブで[アカウント]を選択します。
6. フィールドにDOMAIN\Administratorと入力します(ここで、管理者は管理者権限を持つローカルユーザーです)。
7. ユーザーパスワードを[パスワード]フィールドに入力します。
8. パスワードを[パスワードの確認入力]フィールドに再度入力します。
9. [適用]をクリックし、[OK]をクリックします。
10. 右のペインで、HP_PMDB_Platform_Collection Serviceを右クリックし、[開始]をクリックします。

上記の手順が必須なのは、製品がドメイン内にインストールされている場合のみです。

設定手順を実行し終わったら、HPOMサービス定義接続の設定に進みます。

HPOMデータベースサーバーでのデータベースユーザーアカウントの作成

この作業の実行方法は、HPOM環境でMicrosoft SQL Serverがどのように設定されているかと、HPOMデータベースサーバーと通信するためにSHRをどのように設定できるかによって異なります。選択できるシナリオには次の2つがあります。

- **シナリオ1:**HPOM for Windows 8.x/9.xが1つのシステムにインストールされ、Microsoft SQL Server 2005またはMicrosoft SQL Server 2008は同一システムまたはリモートシステムにインストールされます。別のシステムにインストールされているSHRは、Windows認証またはSQL Server認証 (混合モード認証) を介してSQL Serverに接続するように設定できます。SQL Serverに定義されている認証方法をSHRで使用して、HPOMデータベース接続を設定できます。
- **シナリオ2:**HPOM for Windows 8.xは、デフォルトで組み込まれているMicrosoft SQL Server 2005 Express Editionを使用します。同様に、HPOM for Windows 9.xも、デフォルトで組み込まれているMicrosoft SQL Server 2008 Express Editionを使用します。このシナリオにおける認証モードは、Windows NT認証です。ただし、その場合、SQL ServerとSHRの間のリモート接続は可能ではありません。したがって、このシナリオで混合モード認証が可能になるよう、SHR用のユーザーアカウントを作成する必要があります。

そのユーザーアカウントを作成する前に、まず混合モード認証を使用可能にする必要があります。その手順については、次のURLを参照してください。

<http://support.microsoft.com>

認証目的でユーザー名およびパスワードを作成するには、次の手順を実行します。Microsoft SQL Server 2008を使用する場合、手順は、SQL Server 2005で実行される次のような手順に似通っています。

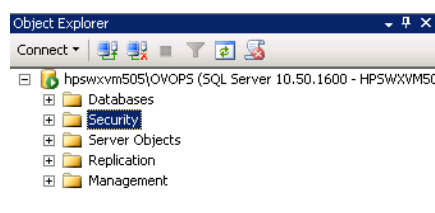
1. ユーザー名とパスワードを作成します。
 - a. 組み込みのMicrosoft SQL Server 2005を使ってHPOMシステムにログオンします。
 - b. **[スタート]** -> **[プログラム]** -> **[Microsoft SQL Server 2005]** -> **[SQL Server Management Studio]** をクリックします。[Microsoft SQL Server Management Studio] ウィンドウが開きます。

注: SQL Server Management Studioがシステムにインストールされていない場合、以下のURLにアクセスしてMicrosoftのWebサイトの関連セクションからダウンロードできます。<http://www.microsoft.com>

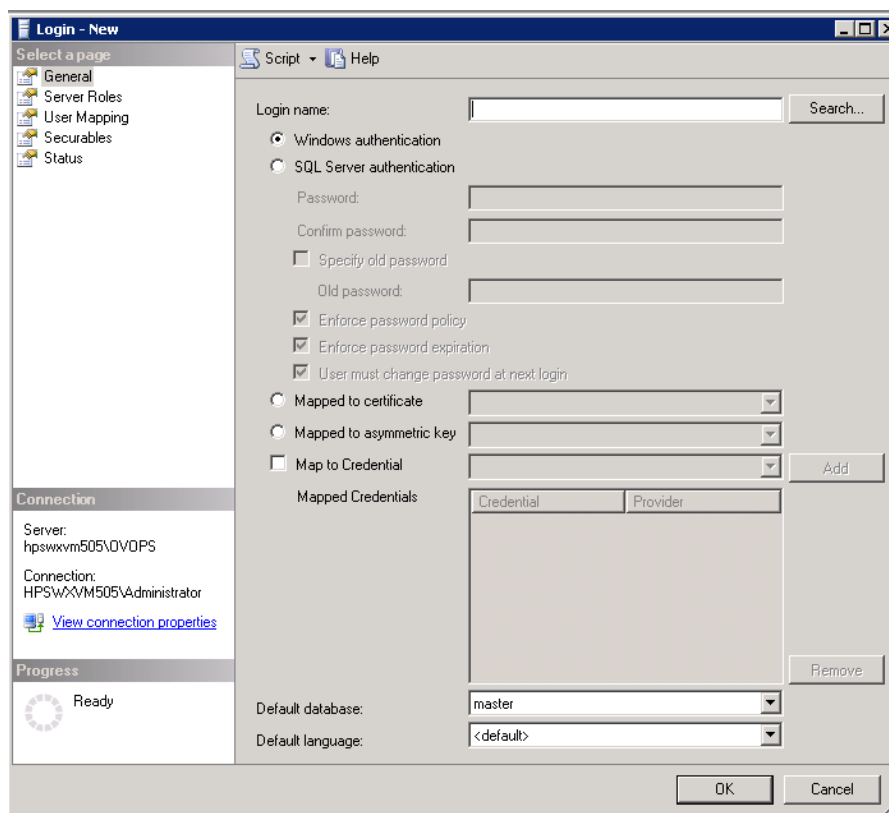
- c. [サーバーへの接続] ダイアログボックスで、[認証] リストから **[Windows 認証]** を選択してから、**[接続]** をクリックします。



- d. [オブジェクト エクスプローラ] ペインで、[セキュリティ] を展開します。

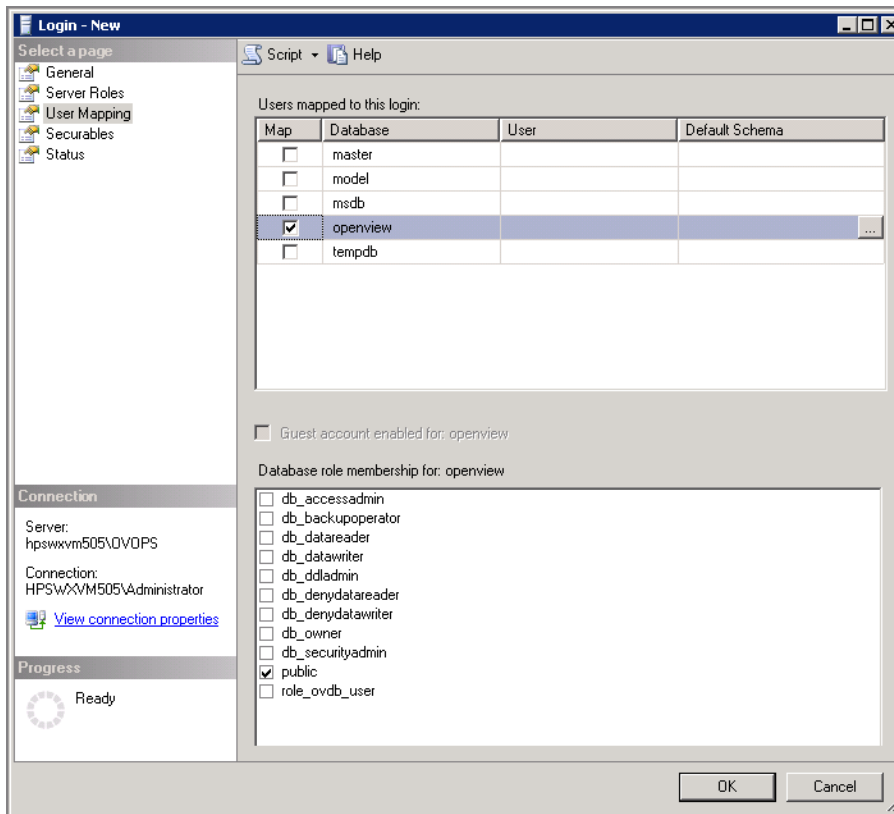


- e. [ログイン] を右クリックし、[新しいログイン] をクリックします。[ログイン - 新規作成] ダイアログボックスが開きます。



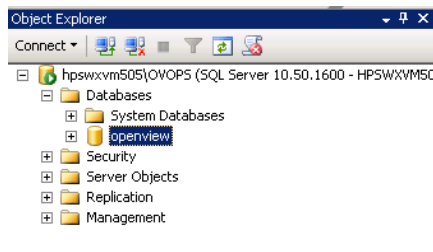
- f. [ログイン名] フィールドにユーザー名を入力します。必要なその他の詳細を指定します。

- g. [SQL Server 認証] ラジオボタンを選択します。
- h. [パスワード] フィールドにパスワードを入力します。
- i. [パスワードの確認入力] フィールドにパスワードをもう一度入力します。パスワードの入力義務ルールを無効にして、シンプルなパスワードを作成することができます。
- j. [ユーザーマッピング] をクリックします。
- k. [このログインにマップされたユーザー] の下で、[openview] チェックボックスを選択します。

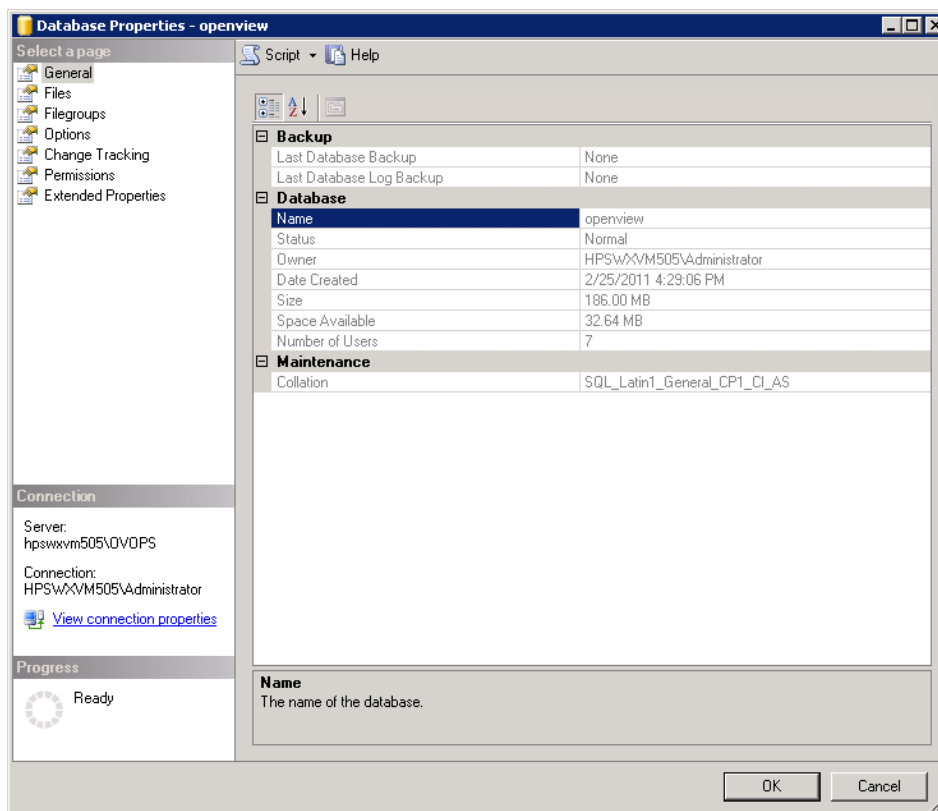


[OK] をクリックし、ユーザー名とパスワードを作成します。

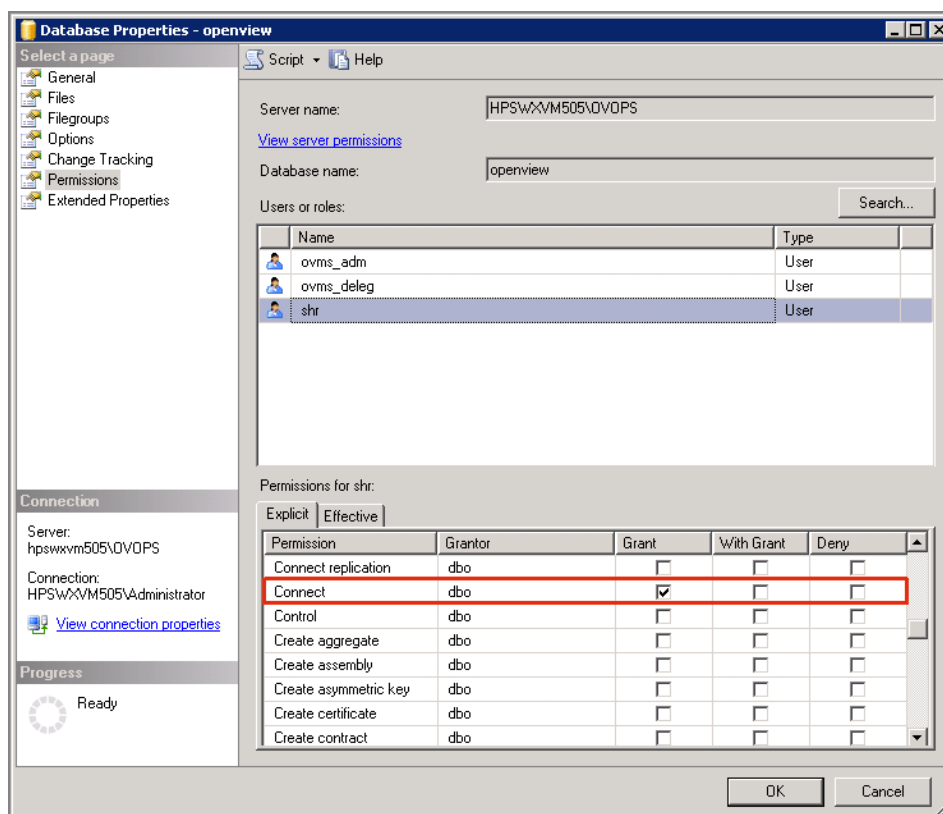
2. データベースユーザーは、少なくともCONNECT権限およびSELECT権限を持っていないければなりません。新たに作成したユーザーアカウントに対してCONNECT権限およびSELECT権限を有効にするには、以下の手順を実行します。
 - a. [オブジェクトエクスプローラ] ペインで、[データベース] を展開します。



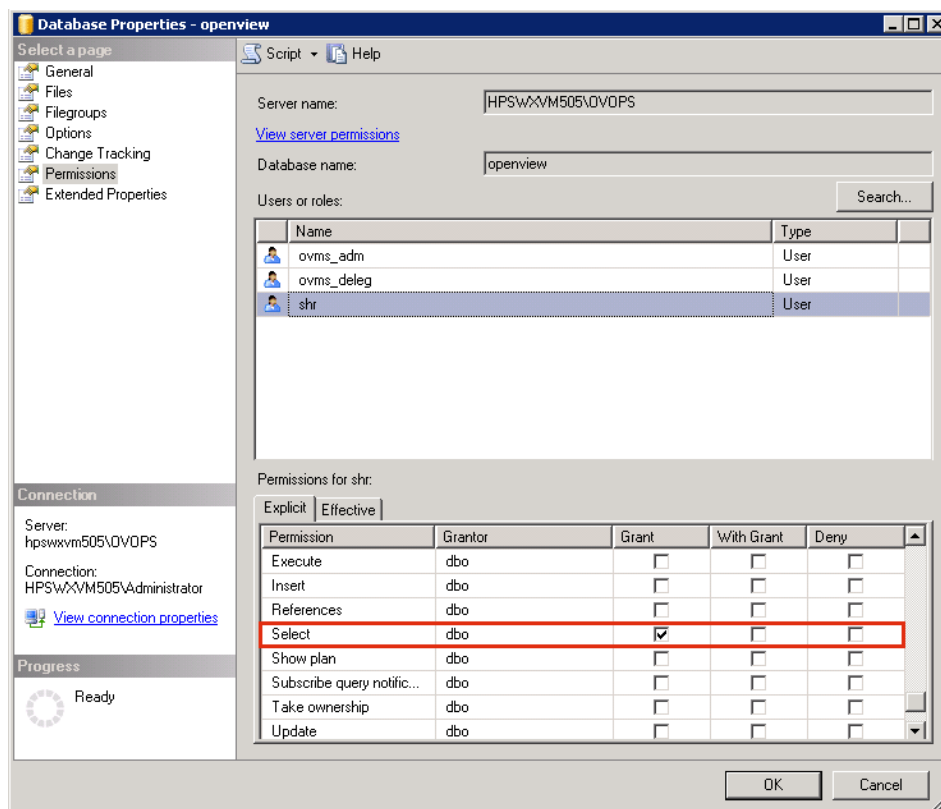
- b. **[openview]** を右クリックしてから、**[プロパティ]** をクリックします。[データベースのプロパティ - openview] ダイアログボックスが開きます。



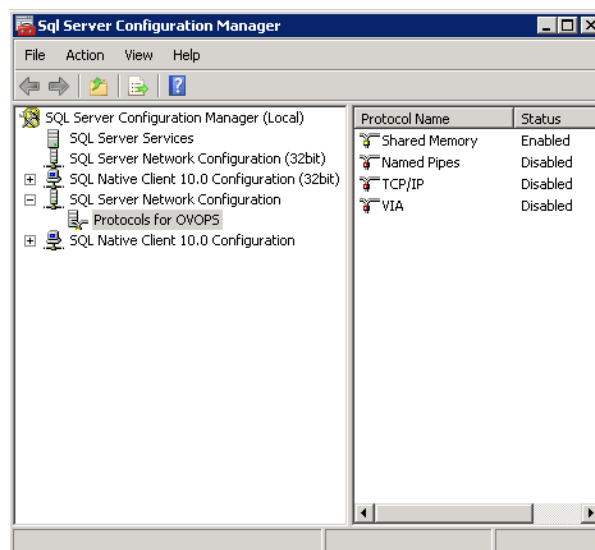
- c. [ページの選択] ペインで、**[権限]** をクリックします。
- d. [ユーザーまたはロール] の下で、新たに作成したユーザーアカウントをクリックします。
- e. [明示的な権限] の下で、CONNECT権限にスクロールダウンしてから、その権限に対する**[許可]** チェックボックスを選択します。



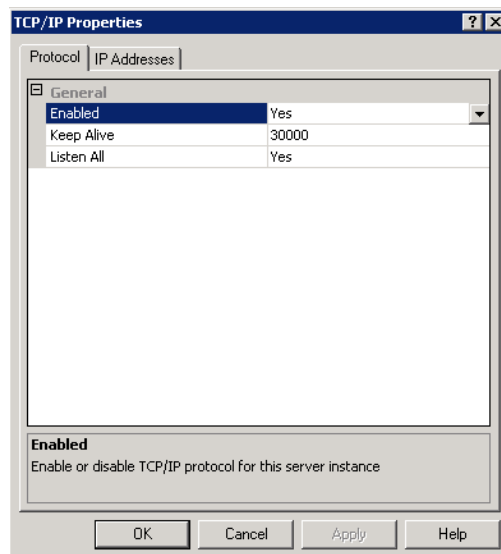
- f. SELECT権限にスクロールダウンし、その権限に対する [許可] チェックボックスを選択します。



- g. [OK] をクリックします。
- 3. 次のように、HPOMサーバーのポート番号をチェックします。
 - a. [スタート] -> [プログラム] -> [Microsoft SQL Server 2005] -> [構成ツール] -> [SQL Server構成マネージャ] をクリックします。[SQL Server 構成マネージャ] ウィンドウが開きます。
 - b. [SQL Server ネットワークの構成] を展開して [OVOPSのプロトコル] を選択します。インスタンス名を変更した場合、該当するインスタンス名を選択します。

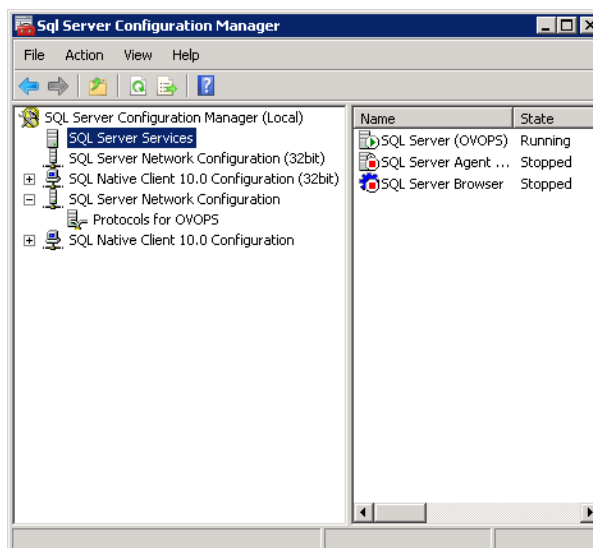


- c. 右側のペインで、**[TCP/IP]** を右クリックしてから **[有効化]** をクリックします。
- d. **[TCP/IP]** をもう一度右クリックし、**[プロパティ]** をクリックします。**[TCP/IPのプロパティ]** ダイアログボックスが開きます。



[IPアドレス] タブの **[IPALL]** の下のポート番号を書き留めます。

4. HPOMデータベースサーバーを再起動します。
 - a. **[SQL Server構成マネージャ]** ウィンドウで、**[SQL Server のサービス]** をクリックします。



- b. 右側のペインで、**[SQL Server (OVOPS)]** を右クリックしてから **[再起動]** をクリックします。
- 管理コンソールでHPOMデータソース接続を設定するときに、新たに作成したユーザー名、パスワードおよび検出したインスタンス名とポート番号を使用できます。

注: コマンドプロンプトユーティリティ `osql` を使用して、この手順を実行できます。詳細について

では、次のURLのMicrosoftのWebサイトにアクセスしてください。

<http://support.microsoft.com>

HPOMサーバーのポート番号のチェック

OracleがHPOMにおけるデータベースタイプの場合、以下の手順を実行して、ポート番号をチェックしてください。

1. Oracleサーバーにログオンします。
2. \$ORACLE_HOME/network/adminフォルダーまたは%ORACLE_HOME%\NET80\Adminフォルダーに移動します。
3. listener.oraファイルを開きます。HPOMサーバーのポート番号はこのファイルに一覧表示されています。

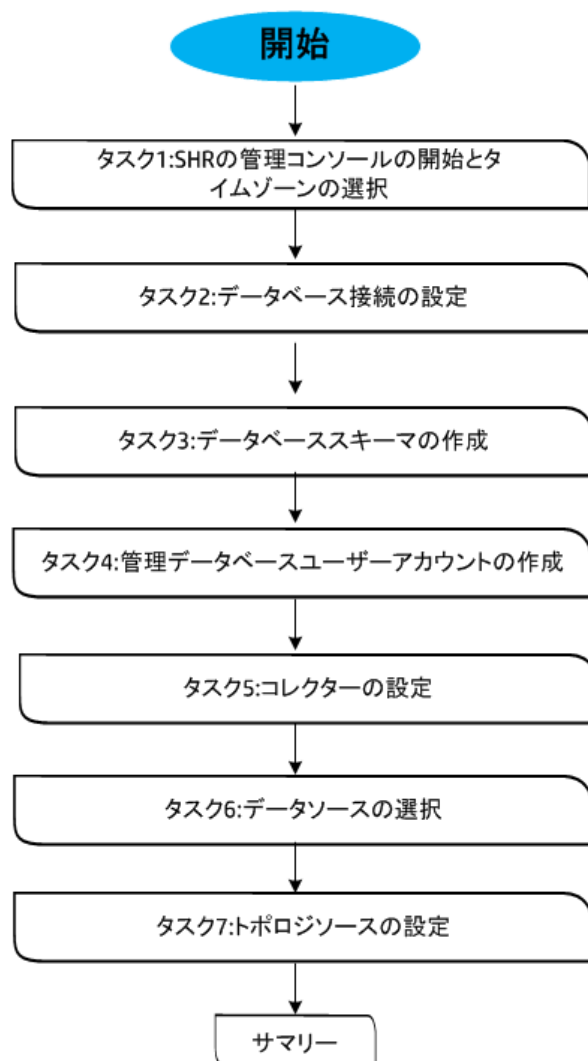
第3章: 主要な設定

本項には3つのサブセクションが含まれており、各サブセクションでは主要な設定を完了させるための詳細手順を説明します。SHRインストール後に管理コンソールを起動すると、設定ウィザードが開きます。このウィザードでは、SHRデータベース、コレクター、トポロジソースを設定するためのガイドが表示されます。設定タスクの実行時には、ローカルコレクターのみを設定し、後で[コレクターの設定]ページを使用して設定するように選択できます。設定ウィザードのタスクが完了すると、[デプロイメントマネージャー]ページが開きます。残りのパッケージは、[保留中の設定]ページを使用して設定またはインストールできます。

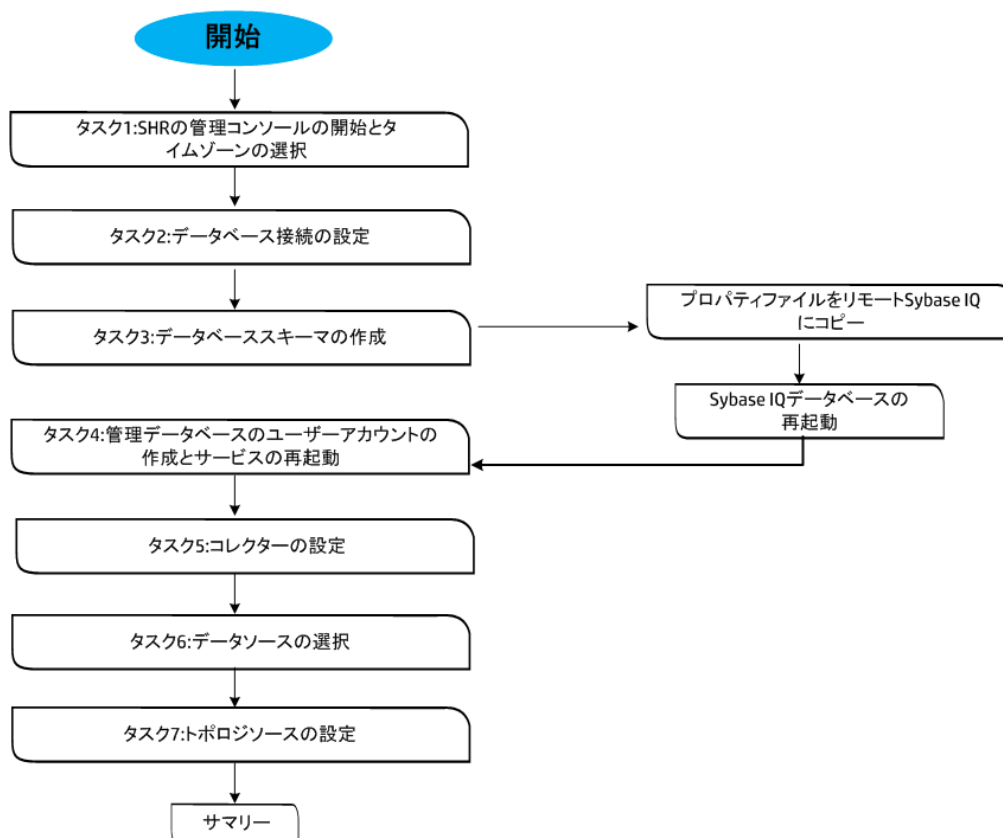
現時点で設定ウィザードを使用してデータソースを設定しない場合は、後で管理コンソールの[コレクターの設定]ページを使用して設定できます。

SHRをインストールまたはアップグレードした直後(デプロイメントマネージャーを使用してコンテンツパックをインストールする前)に、本章で説明しているすべてのインストール後の設定タスクを実行する必要があります。

以下のフローチャートには、SHR (同一のシステム上にSHRサーバーとSybase IQデータベースが共存している) のインストール後の設定タスクの概要が示されています。



以下のフローチャートには、リモートSybase IQデータベースを使用するSHRのインストール後の設定作業の概要が示されています。



タスク1:管理コンソールの起動

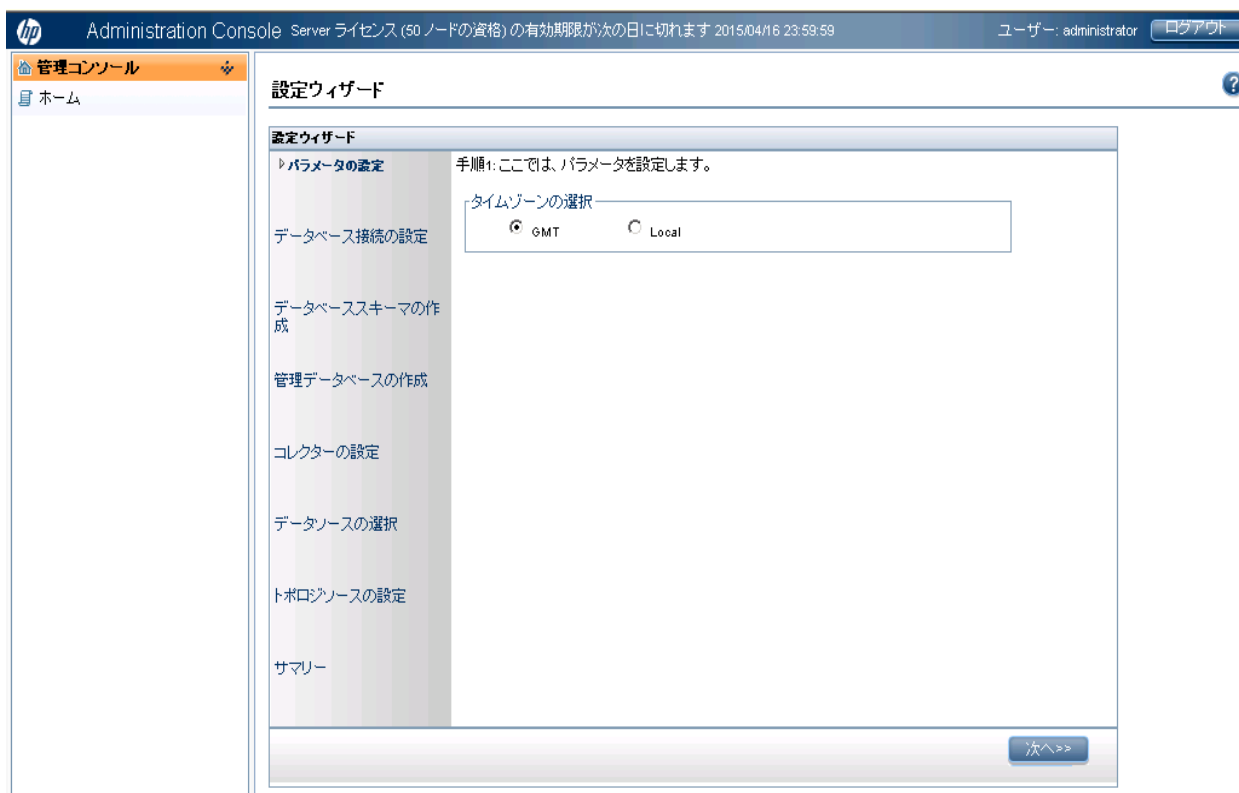
1. 次のURLを使用して、Webブラウザで管理コンソールを起動します。

`http://<SHR_Server_FQDN>:21411`

2. [ログイン名]フィールドに**administrator**と入力し、[ログイン]をクリックして続行します。ホームページが開きます。

注: ほかのユーザーアカウントを使用して管理コンソールにアクセスする場合は、そのユーザーアカウントが管理者権限を持っていることを確認してください。

次のSHR設定ウィザードは、インストール後の設定作業を完了していない場合にのみ表示されます。このウィザードは、セッション状態の維持をサポートします。これにより以前に中断された設定セッションを再開して続行することができます。



3. [パラメータの設定] ページで、SHRを動作させるタイムゾーン (GMTまたはローカル) を選択します。

HP Service Health Reporterのタイムゾーンの選択で、次の手順のいずれかを実行します。

- SHRをGMT時間で動作させる場合は、[GMT] を選択します。
- SHRをローカルシステム時間で動作させる場合は、[Local] を選択します。

注: ここで選択したタイムゾーンがSHRシステムとレポートに適用されます。ただし、収集やワークフローストリームなどのプロセスの実行時情報は、この選択に関係なく常にローカル時間に基づきます。

4. [次へ] をクリックします。[データベース接続の設定] ページが開きます。

タスク2: データベース接続の設定

[データベース接続の設定] ページで、SHRのデータベースの作成場所となるデータベースサーバーの詳細を指定します。

データベース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1. SHR をリモートSybase IQとともにインストールする場合は、[データベース接続の設定] ページで、[リモートデータベース] を選択します。リモートSybase IQとともにインストールしない場合は、次のステップに進みます。

2. [データベース接続パラメータの入力] で、次の値を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	Sybase IQデータベースサーバーが実行されているホストの名前またはIPアドレス。
ポート	データベースサーバーを照会するためのポート番号。デフォルトポートは21424です。
サーバー名	Sybase IQサーバーの名前。Sybase IQサーバー名がサブセット全体で固有であることを確認します。 このフィールドに表示されるサーバー名は情報提供のみを目的としています。サーバー名はどんな場合でも変更しないようにする必要があります。

3. [データベースユーザー (DBA権限) とパスワードの入力] で、次の値を入力します。

フィールド	説明
ユーザー名	Sybase IQデータベースユーザーの名前。ユーザーは、DBAの権限を持っていなければなりません。デフォルトのユーザー名はdbaです。
パスワード	データベースユーザーのパスワード。デフォルトのパスワードはsqlです。 インストール後の設定作業を続ける前にデフォルトのパスワードを変更することをお勧めします。パスワードを変更する方法については、次のURLから入手できるSAP Sybase IQのドキュメントを参照してください。 http://infocenter.sybase.com

4. [PMDBデータベースユーザーのパスワードの入力] で、次の値を入力します。

フィールド	説明
管理パスワード	PMDBデータベース管理者のパスワード。
管理パスワードの確認	確認のために同じパスワードを再入力します。

5. [次へ] をクリックします。[データベーススキーマの作成] ページが開きます。

タスク3: データベーススキーマの作成

[データベーススキーマの作成] ページで、データベースのデプロイメントサイズ(つまりSHRがデータを収集する元になるノードの数)を指定します。ユーザーの選択に応じて、推奨されるデータベースサイズがSHRによって計算されて表示されます。

Sybase IQデータベースがSHRに埋め込まれている場合は、「[共存するSybaseのデータベーススキーマの作成](#)」の説明にあるタスクを実行します。

Sybase IQデータベースがリモートの場所にある場合は、「[リモートSybaseのデータベーススキーマの作成](#)」の説明にあるタスクを実行します。

共存するSybaseのデータベーススキーマの作成

SHRサーバーにインストールされているSybase IQデータベースのデータベーススキーマを作成するには、次の手順を実行します。

1. [デプロイメントサイズの選択]の下で、要件を基にして次のいずれかのデータボリュームを選択します。

フィールド	説明
小ボリューム	このオプションを選択すると、SHRが500未満のノードからのデータ収集をサポートできるようになります。
中ボリューム	このオプションを選択すると、SHRが500～5000のノードからのデータ収集をサポートできるようになります。
大ボリューム	このオプションを選択すると、SHRが5000～20000のノードからのデータ収集をサポートできるようになります。

2. [推奨IQ設定]で、次の値を入力します。

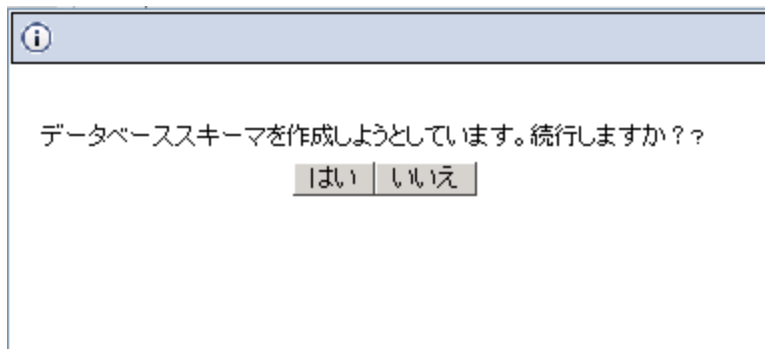
フィールド	説明
IQメインキャッシュ (MB)	Sybase IQメインストアのメインバッファークッシュの推奨サイズ。この値はデフォルトで設定されます。
IQ一時キャッシュ (MB)	Sybase IQ一時ストアの一時バッファサイズの推奨サイズ。この値はデフォルトで設定されます。
IQ DB領域サイズ (MB)	メインデータベースファイルを格納するIQ_System_Main DBSpaceの推奨サイズ。このサイズは変更可能です。
IQ一時DB領域サイズ (MB)	一時データベースファイルを格納するIQ_System_Temp DBSpaceの推奨サイズ。このサイズは変更可能です。

3. [データベースファイルの場所]フィールドに、データベースファイルが保存される場所を入力します。

たとえば、Windowsの場合はC:\HP-SHR\Sybase\db、Linuxの場合は/opt/HP/BSM/Sybase/dbと入力します。

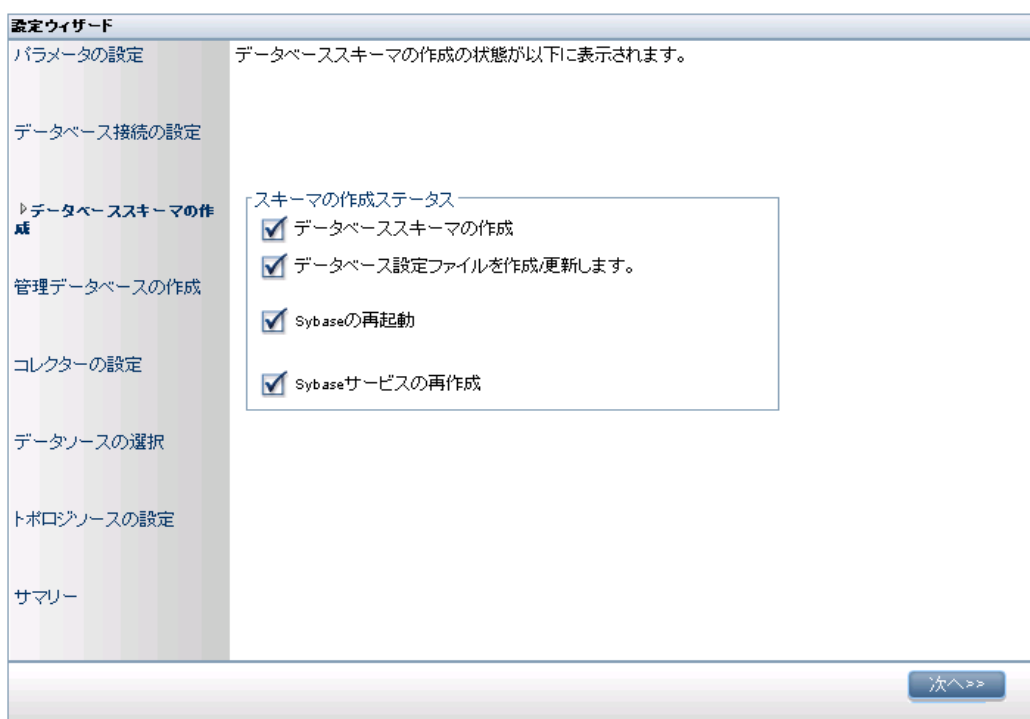
注意: 選択したSHRデータ収集ボリュームをサポートするための十分なシステムリソースがあることを確認してください。選択したボリュームのリソース要件の詳細については、*HP Service Health Reporter* サポート一覧表を参照してください。

- a. **[次へ]** をクリックします。確認のダイアログボックスが開きます。



- b. **[はい]** をクリックします。データベース接続とスキーマの作成が正常に実行された場合は、確認ページが表示され、スキーマの作成ステータスが表示されます。

設定ウィザード



- c. **[次へ]** をクリックして続行します。
d. データベース接続とスキーマの作成が失敗した場合は、**[前へ]** ボタンをクリックして指定した値を確認します。

リモートSybaseのデータベーススキーマの作成

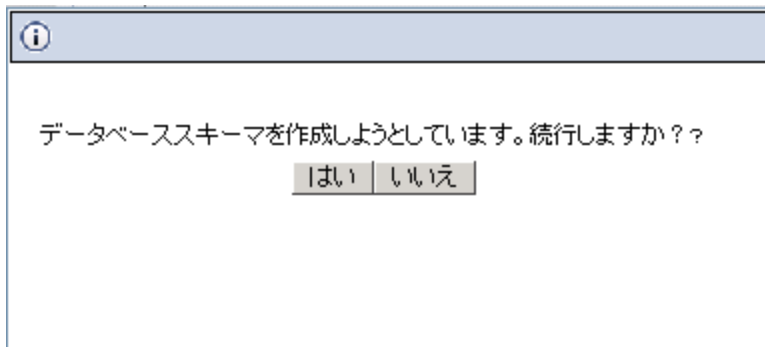
SHRをリモートSybase IQとともにインストールする場合は、次の手順を実行します。

1. 「共存するSybaseのデータベーススキーマの作成」(38ページ)の説明にある手順1と2を実行します。

2. [データベースファイルの場所] フィールドに、データベースファイルが保存される場所を入力します。たとえば、Windowsの場合はC:\HP-SHR\Sybase\db、Linuxの場合は/opt/HP/BSM/Sybase/dbと入力します。[データベースファイルの場所] フィールドにパスを入力する前にデータベースフォルダーを作成します。

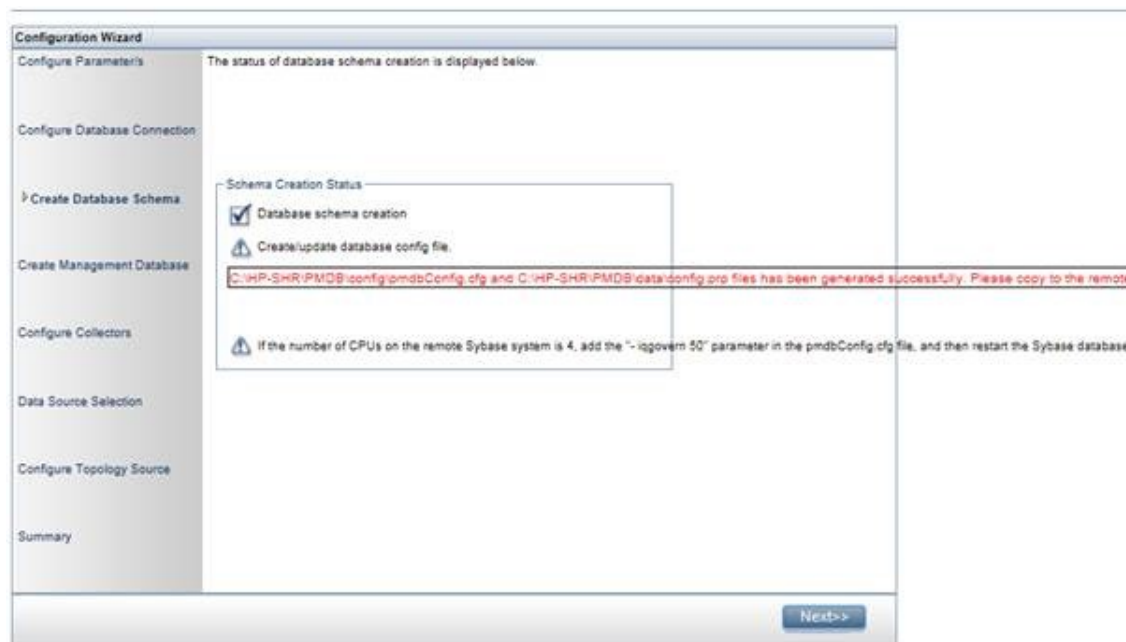
注意: 選択したSHRデータ収集ボリュームをサポートするための十分なシステムリソースがあることを確認してください。選択したボリュームのリソース要件の詳細については、*HP Service Health Reporter* サポート一覧表を参照してください。

3. [次へ] をクリックします。確認のダイアログボックスが開きます。



リモートデータベースホストマシン上のデータベースフォルダーの存在を確認します。

4. [はい] をクリックします。データベース接続とスキーマの作成が正常に実行された場合は、確認ページが表示され、スキーマの作成ステータスが表示されます。



新しく作成したpmdbConfig.cfgファイルおよびconfig.prpファイルをリモートシステム上の対応フォルダーにコピーし、データベースを再起動します。ファイルをリモートシステムにコピーするには、設定ウィザードの指示に従います。

注: SHRおよびSAP BusinessObjectsがWindowsオペレーティングシステムにインストールされ、SAP Sybase IQがLinuxオペレーティングシステムにインストールされている場合は、Sybaseデータベーススキーマの作成後にSybase IQシステムでコマンドラインコンソールから次のコマンドを実行します。

- dos2unix \$PMDB_HOME/data/config.prp
- dos2unix \$IQDIR15/scripts/pmdbConfig.cfg

5. 4基以下のCPUを搭載するシステムの場合のみ、次の手順を実行します。

- a. Sybaseがインストールされているシステムにログオンします。
- b. テキストエディターで次のファイルを開きます。

Windowsの場合:

```
%PMDB_HOME%\config\pmdbConfig.cfg
```

Linuxの場合:

```
$PMDB_HOME/config/pmdbConfig.cfg
```

- c. ファイルの最後に次の行を追加します。

```
-iqgovern 50
```

- d. HP_PMDB_Platform_Sybaseサービスを再起動します。

6. [次へ] をクリックして続行します。

注: データベース接続とスキーマの作成が失敗した場合は、[前へ] ボタンをクリックして指定した値を確認します。

リモートSybaseデータベーススキーマの作成の検証

Sybaseデータベーススキーマを正常に作成した後に次の事項を検証する必要があります。

- Sybase IQデータベースが作成されたかどうかを確認します。
データベースフォルダー ([データベースファイルの場所] フィールドに入力したフォルダー) で次のファイルが利用可能であるかどうかを検証します。
 - pmdb.db
 - pmdb.iq
 - pmdb.iqmsg
 - pmdb.iqtmp
 - pmdb.lmp
 - pmdb.log
 - pmdb_user_main01.iq

- Sybase IQデータベースが実行中であるかどうかを確認します。
 - Windows:IQSRV15.exeが[タスク マネージャ]の[プロセス]タブに表示されていることを確認します。
 - Linux:ps -ef|grep iqsrv15コマンドを実行し、<プロセスID>が返されるかどうかを検証します。
- Sybase IQサーバーへの接続を確認します。
 - Windows:
 - SHRシステムで、[スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
 - [開く] フィールドにdbisqlと入力し、[ENTER] キーを押します。Interactive SQLプログラムの[接続] ダイアログボックスが開きます。
 - 次を入力します。
 - [ユーザーID] フィールドにpmdb_adminと入力します。
 - [パスワード] フィールドに、インストール後のSybase IQデータベース作成中に入力したパスワードを入力します。
 - [アクション] で、ドロップダウンから[このコンピュータで実行中のデータベースに接続する]を選択します。
 - [サーバー名] フィールドに、SHR SybaseIQデータベースのインストール先のサーバーの名前を入力します。

ヒント: このサーバー名はpmdbConfig.cfgファイルで見つけることができます。そのファイルを開きます。サーバー名は-nで始まるテキストです。

- Linux:次のコマンドを実行します。

```
dbisql -nogui -c "uid=dba;pwd=sql;dbn=utility_db;eng=<サーバー名>;commlinks=tcip(host=<ホスト名>;port=21424)"
```

例

```
dbisql -nogui -c "uid=dba;pwd=sql;dbn=utility_db;eng=abc;commlinks=tcip  
(host=abc.com;port=21424)"
```

タスク4:管理データベースユーザーアカウントの作成

管理データベースとは、データプロセスジョブストリームのステータス、変更されたテーブルのステータス、データソース情報などの実行時データを保存するために、SHRによって使用されるオンライントランザクション処理 (OLTP) ストアを意味します。

[管理データベースの作成] ページで、管理データベースのユーザーの詳細を指定します。

管理データベースのユーザーアカウントを作成するには、次の手順を実行します。

1. [管理データベースユーザー (DBA権限) とパスワードの入力] で、次の値を入力します。

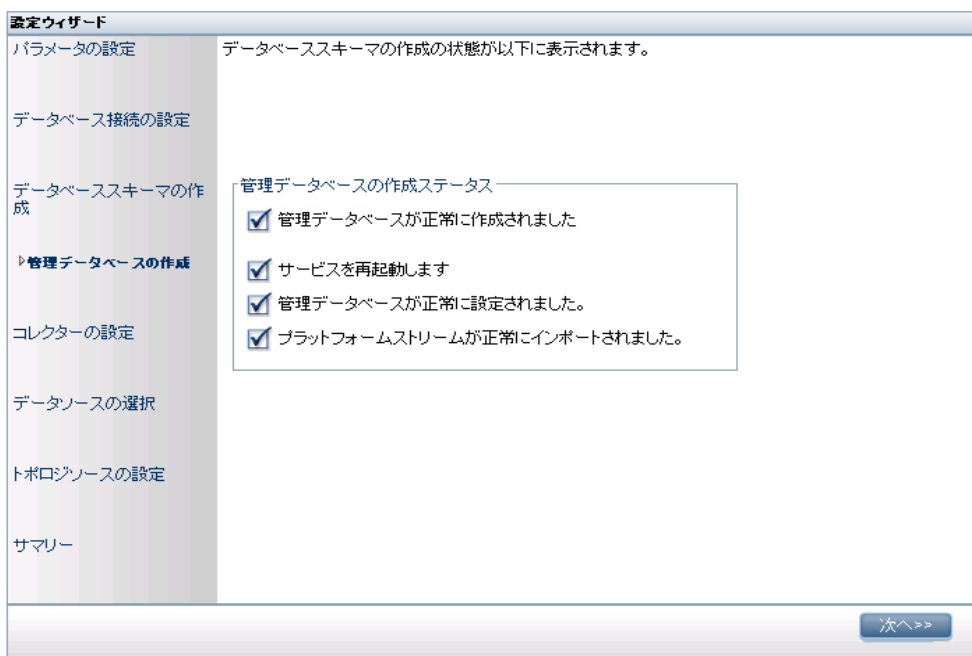
フィールド	説明
ユーザー名	PostgreSQLデータベース管理者の名前。デフォルト値は <i>postgres</i> です。
パスワード	PostgreSQLデータベース管理者のパスワード。デフォルト値は <i>PMDB92_admin@hp</i> です。

2. 管理データベースユーザーのパスワードを変更する場合は、[SHR管理データベースのユーザー情報の入力] で、次の値を入力します。

フィールド	説明
ユーザー名	管理データベースユーザーの名前。デフォルト値は <i>pmdb_admin</i> です。
新しいパスワード	管理データベースユーザーのパスワード。
新しいパスワードの確認	確認のために同じパスワードを再入力します。

3. [次へ] をクリックします。[管理データベースの作成ステータス] ページが表示されます。
4. データベース接続の一環として完了したタスクおよび管理データベースの詳細を確認し、[次へ] をクリックします。[コレクターの設定] ページが開きます。

設定ウィザード



タスク5: リモートシステムにインストールされているコレクターの設定

コレクターの設定に進む前に、リモートシステムで次のコマンドを実行する必要があります。

Windowsの場合:

```
"perl %PMDB_HOME%\bin\scripts\configurePoller.pl <SHRシステムの完全修飾ホスト名>"
```

Linuxの場合:

```
"perl $PMDB_HOME/bin/scripts/configurePoller.pl <SHRシステムの完全修飾ホスト名>"
```

注: 上記のコマンドを実行することにより、SHRシステムとコレクターシステムの間で証明書が交換されます。この交換により、SHRとコレクターの間の通信チャンネルが設定されます。コレクターの1つのインスタンスでは、1つのみのSHRのインスタンスを使用するように設定できます。1つのコレクターで複数のSHRインスタンスを使用する設定はサポートされていません。

[コレクターの設定] ページでは、新規コレクターの作成、既存のコレクターの削除、既存のコレクターへのアプリケーションの接続を行うことができます。

1. [コレクターの設定] ページで、**[新規作成]** をクリックします。
[設定パラメーター] セクションが表示されます。次の値を入力します。

フィールド	説明
名前	リモートシステムにインストールされているコレクターの表示名。この名前にはスペースまたは特殊文字を含めることができません。
ホスト名	コレクターホスト名
HTTP/HTTPS	任意の接続プロトコルに応じて選択します。

2. **[OK]** をクリックして、コレクターの作成を完了し、**[保存]** をクリックします。
3. **[接続テスト]** をクリックし、接続の状態を確認します。

状態レポートに「テスト接続に失敗しました」と表示された場合は、次の手順を実行します。

- a. コレクターシステムにログオンします。
- b. HP_PMDB_Platform_Collectionが開始されていることを確認します。
サービスが開始されていない場合は、手動でサービスを開始します。
- c. サービスを手動で開始するには、次の手順を実行します。

Windowsの場合:

- [サービス] ウィンドウで、HP_PMDB_Platform_Collectionサービスを右クリックし、**[開始]** をクリックします。

Linuxの場合:

- /etc/init.dディレクトリに移動し、次のコマンドを実行します。

```
service HP_PMDB_Platform_Collection start
```

タスク6: データソースの選択

[データソースの選択] ページで、選択したデータソースおよびそのほかのオプションのデプロイメントシナリオを指定します。次の表に、各デプロイメントシナリオで監視できる領域を示します。

デプロイメントシナリオ	監視の領域
BSM 9.2x	<ul style="list-style-type: none"> • System Monitoring • Virtual Environment Performance • Network Performance • Operations EventおよびKPI • HP End User Monitoring • Enterprise Application Performance
OMi 10	<ul style="list-style-type: none"> • System Monitoring • Virtual Environment Performance

デプロイメントシナリオ	監視の領域
	<ul style="list-style-type: none"> • Network Performance • Operations EventおよびKPI • Enterprise Application Performance
HPOM	<ul style="list-style-type: none"> • System Monitoring • Virtual Environment Performance • Network Performance • Operations Event • Enterprise Application Performance
VMware vCenterのみ	<ul style="list-style-type: none"> • Virtual Environment Performance • Network Performance
その他	Network Performance

BSMまたはOMiシナリオのデータソース

次のデータコレクターをSHRで設定する必要があります。

- プロファイルデータベースおよび管理データベースの履歴合成トランザクションモニタリング (BPM) データおよびリアルユーザーモニタリング (RUM) データを収集するデータベースコレクター。プロファイルデータベース、管理データベース、HPOMデータベース、およびHP OMiデータベースなどのデータソースのデータベースからイベント、メッセージ、可用性、およびパフォーマンスの主要パフォーマンス指標 (KPI) も収集します。
- システムパフォーマンスメトリックと、アプリケーション、データベース、およびシステムリソースに関連したデータを収集するHP Operations Agentコレクター。データは、管理対象ノードにインストールされているHP Operations Agentによって収集されます。

次の手順を実行します。

1. [デプロイメントシナリオ] で [BSM/OMi] をクリックします。
2. [BSM/OMiのバージョン] で、アプリケーションのバージョンを選択します。
3. [システムのパフォーマンス] で、システムについての必要なデータソースを選択します。
 - a. システムのパフォーマンスにSiteScopeを選択すると、[SiteScopeメトリックチャネル] セクションが表示されます。
 - b. SiteScopeのメトリックチャネルとしてプロファイルデータベースまたはダイレクトAPIのいずれかを選択する必要があります。

注: OMi 10.xでシステムまたは仮想環境パフォーマンスを監視するためにSiteScopeを使用する場合、SiteScopeのメトリックチャネルはダイレクトAPIを介します。

4. (任意): [仮想環境のパフォーマンス] で、仮想環境のデータソースを選択します。データソースの

テクノロジーを選択します。

データソース	テクノロジーの選択
HP Operations Agent	VMware IBM LPAR Microsoft Hyper-V Solaris Zones
SiteScope	VMware 注: 仮想環境パフォーマンスについては、メトリックチャネルも選択する必要があります。OMi 10.xの場合は、ダイレクトAPIを介してのみSiteScopeのデータを収集できません。
VMware vCenter	VMware

5. (任意): 環境でNNMiおよびNNMi SPI Performanceを利用できる場合は、[ネットワークパフォーマンス]で**[BSM/OMiと統合されたNNMi]**を選択します。
6. [操作イベントおよびKPI]で、必要なイベントのデータソースを選択します。
7. [HP End User Monitoring]で、BSMによって監視されるコンポーネントのデータソースを選択します。

注: デプロイメントがOMi 10.x用である場合、このパラメータは無効です。

8. [Enterprise Application Performance]で、OMiによって監視される管理パックのデータソースを選択します。
9. 必要な管理パックを選択すると、[テクノロジーの選択]セクションが開きます。[管理パック]チェックボックスにチェックマークを付けます。

注: [Microsoft Exchange Server管理パック]を選択すると、[MS Exchange Serverのバージョンの選択]セクションが開きます。Exchange Serverのバージョンも選択する必要があります。

10. [保存]をクリックします。すべての選択内容のサマリーが表示されます。
11. [次へ]をクリックします。[トポロジソースの設定]ページが開きます。

HPOMデプロイメントシナリオのデータソース

次の手順を実行します。

1. [デプロイメントシナリオ]で**[HPOM]**をクリックします。
2. [システムのパフォーマンス]で、**[HP Operations Agent]**を選択します。
3. (任意): **[仮想環境のパフォーマンス]**で、仮想環境のデータソースを選択します。

4. (任意): 環境でNNMiおよびNNMi SPI Performanceを利用できる場合は、[ネットワークパフォーマンス]で[BSM/OMiと統合されたNNMi]を選択します。
5. [操作イベント]で、イベントに[HPOMイベント]を選択します。
6. [Enterprise Application Performance]で、OMiによって監視されるスマートプラグイン (SPI) のデータソースを選択します。

注: [Microsoft Exchange Server]を選択すると、[MS Exchange Serverのバージョンの選択]セクションが開きます。Exchange Serverのバージョンを選択する必要があります。

7. [保存]をクリックします。すべての選択内容のサマリーが表示されます。
8. [次へ]をクリックします。[トポロジソースの設定]ページが開きます。

VMware vCenterのデータソース

データを収集するには、次の手順を実行します。

1. [デプロイメントシナリオ]で、[VMware vCenterのみ]をクリックします。
2. [仮想環境のパフォーマンス]で、[VMware]を選択します。
3. (任意): 環境でNNMiおよびNNMi SPI Performanceを利用できる場合は、[ネットワークパフォーマンス]で[ネットワークパフォーマンス]を選択します。
4. [保存]をクリックします。「正常に保存しました」というメッセージが表示されます。
5. [次へ]をクリックします。[トポロジソースの設定]ページが開きます。

タスク7: トポロジソースの設定

データ収集に向けSHRを設定する前に、トポロジソースを設定する必要があります。トポロジソースの設定作業は、次のカテゴリに編成されます。

- BSM Service and Operations BridgeまたはApplication Performance Management環境にSHRをデプロイした場合は、[「RTSMサービス定義ソースの設定」\(48ページ\)](#)を参照してください。
- HPOM環境にSHRをデプロイした場合は、[「HPOMサービス定義ソースの設定」\(50ページ\)](#)を参照してください。
- VMware vCenter環境にSHRをデプロイした場合は、[「vCenterサービス定義の設定」\(52ページ\)](#)を参照してください。

注: 特定のトポロジソース (RTSM、HPOMまたはVMware vCenter) をいったん設定すると、後で変更することはできません。

RTSMサービス定義ソースの設定

[トポロジソースの設定]ページで、次の操作を実行します。

1. [サービス定義ソース] で、[RTSM] をクリックします。
2. [新規作成] をクリックします。[接続パラメータ] セクションが表示されます。
3. [接続パラメータ] で、次の詳細を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	BSMまたはOMiサーバーのIPアドレスまたはFQDN。HP BSMインストールが分散している場合は、ゲートウェイサーバーの名前をこのフィールドに入力します。
ポート	RTSM Webサービスに照会するためのポート番号。デフォルトのポート番号は80です。 ポート番号が変更されている場合、BSM管理者に詳細を問い合わせてください。
ユーザー名	RTSM Webサービスユーザーの名前。デフォルトのユーザー名はadminです。
パスワード	RTSM Webサービスユーザーのパスワード。デフォルトのパスワードはadminです。
収集ステーション	コレクターをリモートシステムにインストールした場合は、ローカルコレクターまたはリモートコレクターのいずれかを選択できます。 このサービス定義ソースを使用してリモートコレクターを設定するには、ドロップダウンリストから利用可能なリモートシステムのいずれかを選択します。 デフォルトによりSHRシステムにインストールされているコレクターを使用するには、ローカルを選択します。

4. [OK] をクリックします。
5. [保存] をクリックして、指定した情報を保存します。
6. [テスト接続] をクリックします。
7. メッセージボックスで、[はい] をクリックします。「正常に保存しました」というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
手順2~7を実行して、追加のHPOMデータソースを設定できます。
HPOMサービス定義ソースの設定に関する詳細については、『HP Service Health Reporter 管理者用オンラインヘルプ』の「エンタープライズトポロジの管理」のトピックを参照してください。
8. [次へ] をクリックして続行します。[サマリー] ページが開きます。
9. [終了] をクリックして、インストール後の設定タスクを完了します。[デプロイメントマネージャ] ページが開きます。

HPOMサービス定義ソースの設定

[トポロジソースの設定] ページで、次の操作を実行します。

1. [サービス定義ソース] で、[HP OM] をクリックします。
2. [新規作成] をクリックします。[接続パラメータ] セクションが表示されます。
3. [接続パラメータ] で、次の詳細を入力します。

注意: 認証にデータベースの方法を使用してHPOMデータベースサーバーに接続している場合は、「openview」データベースのSELECT権限とCONNECT権限を持つユーザーの詳細をここで指定する必要があります。

フィールド	説明
データソースのタイプ	環境で設定されているHPOMのタイプを選択します。オプションには次のものがあります。 HPOM for Windows Unix向けHPOM HPOM for Linux HPOM for Solaris
データベースタイプ	選択するデータソースタイプに応じて、データベースタイプが自動的に選択されます。HPOM for Windowsデータソースタイプの場合、データベースタイプはMSSQLです。HPOM for Unix、HPOM for Linux、HPOM for Solarisの場合、データベースタイプはOracleです。
ホスト名	BSMまたはOMiサーバーのIPアドレスまたはFQDN。HP BSMインストールが分散している場合は、ゲートウェイサーバーの名前をこのフィールドに入力します。
データベースインスタンス	データソース内のデータベースインスタンスのシステム識別子(SID)。デフォルトのデータベースインスタンスはOVOPSです。MSSQLがデフォルト(名前未設定)のデータベースインスタンスを使用するように設定されている場合は、このフィールドを空白のままにしておきます。
ポート	HPOMデータベースサーバーに照会するためのポート番号。OVOPSなどの、データベースインスタンスのポート番号をチェックするには、「 HPOMサーバーのポート番号のチェック 」(32ページ)を参照してください。
Windows認証	HPOMデータベースにアクセスするためのWindows認証を有効

フィールド	説明
	にするためのオプション。ユーザーは、データベースをホスティングしているWindowsシステムのアクセス資格情報と同じ情報を使用してHPOMにアクセスすることができます。このオプションは、データソースタイプとしてHPOM for Windowsが選択された場合にのみ表示されます。
ユーザー名	HPOMデータベースユーザーの名前。HPOM for Windowsデータソースタイプの場合に、[Windows認証] オプションを選択すると、このフィールドは無効になって空になります。
パスワード	HPOMデータベースユーザーのパスワード。HPOM for Windowsデータソースタイプの場合に、[Windows認証] オプションを選択すると、このフィールドは無効になって空になります。
収集ステーション	コレクターをリモートシステムにインストールした場合は、ローカルコレクターまたはリモートコレクターのいずれかを選択できます。 このサービス定義ソースを使用してリモートコレクターを設定するには、ドロップダウンリストから利用可能なリモートシステムのいずれかを選択します。 デフォルトによりSHRシステムにインストールされているコレクターを使用するには、ローカルを選択します。

4. [OK] をクリックします。
5. [保存] をクリックして、指定した情報を保存します。
6. [テスト接続] をクリックします。
7. メッセージボックスで、[はい] をクリックします。「正常に保存しました」というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

手順2~7を実行して、追加のHPOMデータソースを設定できます。

HPOMサービス定義ソースの設定に関する詳細については、『*HP Service Health Reporter 管理者用オンラインヘルプ*』の「エンタープライズトポロジの管理」のトピックを参照してください。

注: 非ドメインホストからデータを収集するには、HPOM管理者がそのホストに対して適切なDNS解決を行うことにより、ドメインにインストールされているSHRからそのホストに到達できるようにする必要があります。

8. [次へ] をクリックして続行します。[サマリー] ページが開きます。
9. [終了] をクリックして、インストール後の設定タスクを完了します。[デプロイメントマネージャ] ページが開きます。

vCenterサービス定義の設定

[トポロジソースの設定] ページで、次の操作を実行します。

1. [サービス定義ソース] で、[VMware vCenter] をクリックします。
2. [新規作成] をクリックします。[接続パラメータ] セクションが表示されます。
3. [接続パラメータ] で、次の詳細を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	vCenterサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ユーザー名	vCenter Webサービスユーザーの名前。デフォルトのユーザー名は、administration@vsphere.localです。
パスワード	vCenter Webサービスユーザーのパスワード。
収集ステーション	コレクターをリモートシステムにインストールした場合は、ローカルコレクターまたはリモートコレクターのいずれかを選択できます。 このサービス定義ソースを使用してリモートコレクターを設定するには、ドロップダウンリストから利用可能なリモートシステムのいずれかを選択します。 デフォルトによりSHRシステムにインストールされているコレクターを使用するには、ローカルを選択します。

4. [OK] をクリックします。
5. [保存] をクリックして、指定した情報を保存します。
6. [テスト接続] をクリックします。
7. メッセージボックスで、[はい] をクリックします。「正常に保存しました」というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
手順2~7を実行して、追加のvCenterデータソースを設定できます。
8. [次へ] をクリックして続行します。[サマリー] ページが開きます。
9. [終了] をクリックして、インストール後の設定タスクを完了します。[デプロイメントマネージャ] ページが開きます。

サービス定義でリモートコレクターを設定した場合は、コンテンツパックをインストールした後にコレクターシステムでコレクターサービスを再起動します。

サービスを手動で再起動するには、次の手順を実行します。

Windowsの場合:

- [サービス] ウィンドウで、HP_PMDB_Platform_Collectionサービスを右クリックし、[再開] をクリックします。

Linuxの場合:

- /etc/init.dディレクトリに移動し、次のコマンドを実行します。

```
service HP_PMDB_Platform_Collection --full-restart
```

タスク8: サマリー

[サマリー] ページには、選択したすべての項目のサマリーが表示されます。

第4章: データソースの設定

コンテンツパックをインストールする前に、データソースへの接続をSHRで設定する必要があります。

管理およびプロファイルデータベースの設定

HP BSMのデプロイメントでは、すべてのデータを1つのデータで保管しきれない場合にスケーリングの目的で複数のプロファイルデータベースを設定する場合があります。複数のプロファイルデータベースで重要なデータと重要でないデータを保管しなければならない場合があります。環境内にデプロイされているさまざまなプロファイルデータベースに関する情報は、管理データベースに保管されます。

複数のプロファイルデータベース接続を設定するには、[BSM/OMi] ページで管理データベースも設定する必要があります。

新規管理データベースを設定するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[収集設定] > [BSM/OMi] > [管理データベース]** をクリックします。
2. **[新規作成]** をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。
3. [接続パラメータ] ダイアログボックスに次の値を入力します。

フィールド	説明
データソース	データソース (BSM または OMi) を選択します。
ホスト名	管理データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
ポート	管理データベースサーバーに照会するためのポート番号。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle、MSSQLまたはPostgreSQLのいずれかです。
Windows認証	データベースタイプとしてMSSQLを選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベースインスタンス	管理データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。

フィールド	説明
	注: データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、HP Business Service Management 管理者にお問い合わせください。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとしてMSSQLを選択した場合にのみ表示されます。
Oracle RACのデータベース	このオプションは、データベースタイプとしてOracleを選択した場合にのみ表示されます。
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合にのみ表示されます。
ユーザー名	管理データベースユーザーの名前。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。 注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	管理データベースユーザーのパスワード。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。 注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。

4. [OK] をクリックします。
5. **[接続テスト]** をクリックし、接続をテストします。
6. **[保存]** をクリックして、このページで行った変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが情報メッセージペインに表示されます。

新規プロファイルデータベースを設定するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[収集設定] > [BSM/OMi] > [プロファイルデータベース]** をクリックします。
2. **[新規作成]** をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。
3. [接続パラメータ] ダイアログボックスに次の値を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	プロファイルデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
ポート	プロファイルデータベースサーバーに照会するためのポート番号。

フィールド	説明
	[Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
データベースタイプ	プロファイルデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle、MSSQLまたはPostgreSQLのいずれかです。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。SiteScopeからのみデータを収集する場合は、管理データベースを選択する必要はありません。
ドメイン	<p>データ収集を有効にするドメインを選択します。</p> <p>注:データ収集を有効にする元となるドメインを選択する必要があります。インストール後の設定時にトポロジ設定をスキップして、コンテンツパックをインストールした場合は、ここに戻り、データ収集を有効にするドメインを次のドメインから選択する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • HP Operations Manager • OMi • RUM • BPM • サービス状況
データベースインスタンス	<p>プロファイルデータベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。</p> <p>[Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。</p> <p>注:データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、HP Business Service Management管理者にお問い合わせください。</p>
Windows認証	データベースタイプとしてMSSQLを選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとしてMSSQLを選択した場合にのみ表示されます。
Oracle RACのデータベース	このオプションは、データベースタイプとしてOracleを選択した場合にのみ表示されます。
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 [Oracle RACのデータベース]

フィールド	説明
	を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合にのみ表示されます。
ユーザー名	プロファイルデータベースユーザーの名前。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。 注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	プロファイルデータベースユーザーのパスワード。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。 注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

4. [OK] をクリックします。
5. **[接続テスト]** をクリックし、接続をテストします。
6. **[保存]** をクリックして、このページで行った変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが情報メッセージペインに表示されます。

新たに作成した管理データベース接続を保存した後、SHR (ローカルコレクターまたはリモートコレクター) では、プロファイルデータベース情報が管理データベースのデータソースから取り出され、ページの**[プロファイルデータベース]** セクションの下に既存のすべてのプロファイルデータベースのデータソースがリストされます。

プロファイルデータベースのデータソースに対するデータ収集はデフォルトで有効になっています。さらに、収集の頻度は1時間ごとにスケジュールされています。

リモートコレクターの場合、ページの**[プロファイルデータベース]** セクションにある**[データベースタイプ]** ドロップダウンボックスから収集ステーションが選択されている必要があります。

プロファイルデータベースのデータソース接続の設定については、『*Service Health Reporter 管理者用オンラインヘルプ*』を参照してください。

サービス状況CIに対するKPIデータ収集の有効化

KPIは、CIのパフォーマンスと可用性の詳細インジケータです。ビジネスサービス、ビジネスアプリケーション、ビジネスプロセス、およびホストなどの特定の論理サービス状況CIに属するKPIデータ

は、デフォルトではプロファイルデータベースにログ記録されます。SHRはそのデータをレポート用にデータベースから収集します。

ただし、その他のCIタイプのKPIデータは、プロファイルデータベースに自動的にログ記録されません。そのようなCIタイプのKPIデータをログ記録するには、HP BSMにおいてCIを設定する必要があります。詳細については、『*HP Business Service Management - サービス状況の使用*』ガイドの「永続データおよび履歴データ」の項を参照してください。このガイドは、*Application Performance Management (BAC)*製品として、次のURLに用意されています。

<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>

HP OMiデータソースの設定

HP OMiコンテンツパックをインストールする場合、データ収集用のHP OMiデータベース接続を設定する必要があります。

新規のHP OMiデータソース接続を作成する場合は、その前に、管理データベース用のデータソース接続が[管理DB/プロファイルDB]ページに存在することを確認してください。このデータ接続は、管理データベースに保管されるHP OMi用の割り当て済みユーザー/グループの情報を取り出すのに必要です。

環境内に1つ以上のOMiセットアップがある場合は、トポロジソースとして設定されたHP BSM RTSMに属するOMiデータソースを設定する必要があります。

HP OMiデータソース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[Collection Configuration] > [BSM/OMi] > [OMi]** をクリックします。
2. **[新規作成]** をクリックし、新規HP OMiデータソース接続を作成します。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。
3. **[接続パラメータ]** ダイアログボックスで、次の値を指定または入力します。

ホスト名	HP OMiデータベースサーバーのアドレス (IPまたはFQDN)。
ポート	HP OMiデータベースサーバーに照会するためのポート番号。
データベースインスタンス	HP OMiデータベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。MSSQLがデフォルト (名前未設定) のデータベースインスタンスを使用するように設定されている場合は、このフィールドを空白のままにしておきます。 データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細は、HP OMiデータベース管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	HP OMiデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、OracleまたはMSSQLのいずれかです。
Windows認証	データベースタイプとしてMSSQLを選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまりユーザー

	は、データベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとしてMSSQLを選択した場合のみ表示されます。
ユーザー名	HP OMiデータベースユーザーの名前。[Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になって空になります。
パスワード	HP OMiデータベースユーザーのパスワード。[Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になって空になります。
収集ステーション	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

4. [OK] をクリックします。

注: 作成できるHP OMiデータソース接続は1つのみです。接続が作成された後、デフォルトでは [新規作成] ボタンは無効になります。正しい値を入力したことを確認してください。

5. [接続テスト] をクリックし、接続をテストします。
6. [保存] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。
7. 1つ以上のホストのHP OMiデータ収集スケジュールを変更するには、[頻度のスケジュール] 列で、[時間] ボックスに1~24時間の収集時間を指定します。
8. [保存] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

HP Operations Managerデータソースの設定

HP Operations Manager (HPOM) コンテンツパックのインストールし、HPOM用のトポロジソース接続を [サービス定義] ページで作成すると、同じデータソース接続が [HP Operations Manager] ページに表示されます。新規のデータソース接続を作成する必要はありません。既存の接続をテストし、それを保存できます。

ただし、[サービス定義] ページでデータソース接続を更新しても、[Operations Manager] ページの接続の詳細は更新されません。

データベース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[収集設定] -> [HP Operations Manager] をクリックします。[HP Operations Manager] ページが開きます。
2. ホスト名の横のチェックボックスを選択してから、[接続テスト] をクリックして接続をテストします。

3. **[保存]** をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。
追加のHPOMデータソースを設定するには、**[新規作成]** ボタンをクリックします。特定のデータソース接続を変更するには、**[設定]** をクリックします。
4. 1つ以上のホストのHPOMデータ収集スケジュールを変更するには、**[頻度のスケジュール]** 列で、**[時間]** ボックスに1~24時間の収集時間を指定します。
5. **[保存]** をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

HP Operations Agentデータソースの設定

RTSMデプロイメントシナリオではトポロジ情報の収集時にHP Performance Agentがインストールされているすべてのノードがデフォルトにより自動的に検出されるため、HP Performance Agentの新規データソース接続を作成する必要はありません。これらのデータソースまたはノードは、管理コンソールの [HP Operations agentデータソース] ページにリストされます。

HP Performance Agentデータソースのリストを表示するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[収集設定]** > **[HP Operations Agent]** をクリックします。[HP Operations Agentデータソース] ページが開きます。
2. HP Operations agentデータソースの詳細を表示するには、[HP Operations Agentデータソースのサマリー] テーブル内のビュー名または番号をクリックします。[HP Operations Agentデータソースの詳細] テーブルが表示されます。
3. 1つ以上のホストのデータ収集スケジュールを変更するには、**[ポーリング頻度のスケジュール]** 列の **[時間]** ボックスに1~24時間のポーリング時間を指定します。
4. **[保存]** をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

HP Operations Agentデータベースのデータソース接続の設定については、『*Service Health Reporter 管理者用オンラインヘルプ*』を参照してください。

ネットワークデータソースの設定 (汎用データベースの使用)

Networkコンテンツパックをインストールしたら、NNMiからネットワーク関連のデータを収集するようにSHR (ローカルデータコレクター) またはリモートコレクターを設定する必要があります。NNMiは、ネットワークパフォーマンスデータのリポジトリとしてNPSを使用します。管理コンソールの [汎用データベース] ページを使用して、NPSから必要なデータを収集するようにSHRを設定します。このページでは、データベースシステムとしてSybase、Oracle、またはSQL Serverを使用する汎用データベースへの接続を設定することもできます。

NPSデータソース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[収集設定]** > **[汎用データベース]** をクリックします。[汎用データベース] ページが開きます。
2. **[新規作成]** をクリックし、NPSデータソース接続を作成します。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。
3. **[接続パラメータ]** ダイアログボックスで、次の値を指定または入力します。

ホスト名	NPSデータベースサーバーのアドレス (IPまたはFQDN)。
ポート	NPSデータベースサーバーを照合するためのポート番号。
タイムゾーン	データベースインスタンスが設定されるタイムゾーン。
データベースタイプ	NPSデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ドメイン	選択されたデータベースタイプからSHRがデータを収集するドメインを選択します。
URL	データベースインスタンスのURL。
ユーザー名	NPSデータベースユーザーの名前。
パスワード	NPSデータベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

[ドメイン] は、NetworkPerf_ETL_PerfISPI9.10またはNetworkPerf_ETL_PerfISPI9.20コンテンツパックをインストールした後にのみ表示されます。コンテンツパックのバージョンは、現在の環境にインストールされている**HP Network Node Manager iSPI Performance for Metricsソフトウェア**のバージョンに依存します。

4. [OK] をクリックします。
5. **[接続テスト]** をクリックし、接続をテストします。
6. **[保存]** をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました]メッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
7. 1つ以上のホストのデータ収集スケジュールを変更するには、**[頻度のスケジュール]** 列で、**[時間]** ボックスに1~24時間の収集時間を指定します。
8. **[保存]** をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました]メッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

新たに作成したすべてのデータソース接続に対するデータ収集は、デフォルトでは有効になります。ネットワークデータソース接続の設定については、『*Service Health Reporter 管理者用オンラインヘルプ*』を参照してください。

VMware vCenterデータソースの設定

VMware vCenterをデータ収集ソースとして設定し、HPOMデプロイメントシナリオで仮想化メトリックを収集できます。

次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[収集設定]** -> **[VMware vCenter]** をクリックします。[VMware vCenterデータソース] ページが開きます。
2. **[新規作成]** をクリックし、接続をテストします。**[接続パラメータ]** ダイアログボックスが開きます。
3. **[接続パラメータ]** ダイアログボックスで、次の値を入力します。

ホスト名	VMware vCenterデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ユーザー名	VMware vCenterデータベースユーザーの名前。
パスワード	VMware vCenterデータベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

注: 作成するそれぞれのVMware vCenter接続に対して、[109ページの手順2](#)を実行すると、追加のVMware vCenterデータソースを設定できます。

4. 1つ以上のホストのVMware vCenterデータ収集スケジュールを変更するには、**[頻度のスケジュール]** 列で、**[分]** ボックスに5 ~ 60分の収集時間を指定します。
5. **[保存]** をクリックして変更を保存します。**[正常に保存しました]** メッセージが**[情報]** メッセージパネルに表示されます。
6. VMware vCenterサーバーで、ユーザーに次の権限を付与します。
 - **[データストア]** 権限を**[データストアの参照]** に設定します。
 - **[データストア]** 権限を**[低レベルのファイル操作]** に設定します。
 - **[セッション]** 権限を**[セッションの確認]** に設定します。
7. VMware vCenterサーバーで、統計値レベルを設定します。
 - a. vSphere Clientで、**[管理]** -> **[vCenter Server設定]** をクリックします。
 - b. **[vCenter Server設定]** ウィンドウで、**[統計情報]** をクリックします。**[統計間隔]** ページに、vCenter Server統計値が保存されるまでの時間間隔、統計値が保存される期間、および統計値レベルが表示されます。

- c. **[編集]** をクリックします。
- d. **[統計間隔の編集]** ウィンドウで、ドロップダウンリストから **[統計間隔]** を選択します。**[統計間隔の編集]** ウィンドウに、選択した統計値レベルで収集される統計値のタイプが表示されます。最小統計値レベルを「2」に設定する必要があります。

SiteScopeデータソースの設定

SiteScopeページを使用して、環境内の複数のSiteScopeモニターからデータを収集する、SiteScopeデータソースを設定できます。このページを使用すると、データ収集を有効化または無効化したり、要件に応じてデータ収集接続を追加または削除することができます。設定ウィザードで、メトリックのチャンネルとしてプロファイルデータベースを選択する場合、SiteScopeデータソースのコレクターを作成する必要があります。

新規SiteScopeデータソース接続を作成するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[収集設定]** > **[SiteScope]** をクリックします。[SiteScope] ページが開きます。
2. **[新規作成]** をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。
3. [接続パラメータ] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
接続設定	
ホスト名	SiteScopeサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ポート	SiteScopeサーバーを照会するためのポート番号。
SSLを使用	(任意)選択した場合、SiteScopeサーバーがSecure Sockets Layer (SSL) での通信をサポートするように有効化する必要があります。
ユーザー名	現在のSiteScopeユーザーの名前。
パスワード	SiteScopeユーザーのパスワード。
Init文字列	SiteScopeサーバーへの接続を確立するために使用される共有キー。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
一般的なデータ統合の設定: これらの設定はSiteScopeサーバーとSHRサーバーとの間の汎用データ統合を作成します。接続が正常に確立すると、SiteScopeサーバーはデータをSHRサーバーにプッシュします。 また、レポート対象となるSiteScopeモニターに手動で適用しなくてはならないタグをSHRで作成する必要があります。タグの適用の詳細については、SiteScopeのマニュアルを参照してください。	

フィールド	説明
統合名	統合の名前を入力します。 注: 後で変更することはできません。
エンコーディング	SHRとSiteScopeとの間の通信で使用するエンコーディングのタイプ。
SSLを使用	(任意)選択した場合、SiteScopeサーバーがSecure Sockets Layer (SSL) での通信をサポートするように有効化する必要があります。
レポート間隔 (秒)	SiteScopeがデータをSHRにプッシュする頻度。これは設定可能なパラメーターです。
要求のタイムアウト (秒)	接続がタイムアウトになるまでに待機する時間。ゼロ (0) の値にするとタイムアウト期間が無限になります。これは設定可能なパラメーターです。
接続タイムアウト (秒)	接続が再確立されるまでのタイムアウト。ゼロ (0) の値にするとタイムアウトは適用されません。これは設定可能なパラメーターです。
再試行回数	SHRとの接続エラーの発生中にSiteScopeサーバーが試みる再試行の回数。
要求時に認証	(任意)選択した場合、Webサーバーのユーザー名とパスワードを使用して認証が実行されます。
認証ユーザー名	SHRがBasic認証を使用するよう設定されている場合、サーバーにアクセスするためのユーザー名を指定します。
認証パスワード	SHRがBasic認証を使用するよう設定されている場合、サーバーにアクセスするためのパスワードを指定します。
プロキシアドレス	SiteScope上でプロキシが有効な場合、プロキシアドレスを入力します。
プロキシユーザー名	プロキシサーバーのユーザー名を入力します。
プロキシパスワード	プロキシサーバーのパスワードを入力します。
タグの作成	選択すると、SiteScopeサーバーから手動で適用する必要がある、SiteScopeモニター用のタグを作成します。
タグ名	タグのユーザー定義名。

4. [OK] をクリックします。
 5. [保存] をクリックします。
- [正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

新しく作成したSiteScopeデータソース接続に対するデータ収集はデフォルトで有効になっています。また、収集の頻度は15分ごとにスケジュール設定されています。

第5章: コンテンツパックのインストール

必要なコンテンツパックをインストールするため、SHRには管理コンソールを介してデプロイメントマネージャーユーティリティが提供されています。このWebベースのインターフェースでは、ドメイン、データを収集するデータソースアプリケーション、およびデータ収集用にインストールする特定のコンテンツパックコンポーネントに基づいてコンテンツパックが配置されるため、インストールプロセスが簡略化されます。

注: SHRを最新のバージョンにアップグレードするときにコンテンツパックを更新する前に、HP PMDB Platform Timerサービスを停止します。コンテンツパックの更新が失敗すると、前回の状態にロールバックされます。

出荷時に提供されているレポートのカスタマイズはサポートされていません。このレポートはコンテンツパックの更新後にデフォルトのレポートによって上書きされます。

コンテンツパックのユニバースの変更によるレポートの作成もサポートされていません。そのようなレポートはコンテンツパックの更新後に正常に機能しません。

開始する前に

コンテンツパックのインストールを開始する前に、次の事項を確認してください。

- インストール後の設定およびデータソースの選択が完了している。
- データ収集の設定が完了している。

データソースのチェック

SHRでは、コンテンツパックをインストールする前にデータソースの可用性および整合性を確認できます。

1. 次のページを起動します。

`http://<SHR Server FQDN>:<port>/BSMRApp/dscheck.jsf`

2. RTSMに関連するデータソースを確認するには、**[RTSM]** をクリックします。

[表示] をクリックして、結果を表示します。結果には、不足している必須CIタイプおよび属性のリストが表示されます。

3. HP Operations Agentのデータソースを確認するには、**[PA]** をクリックします。

[表示] をクリックして、結果を表示します。結果には、ノードのステータスサマリーおよび不足しているポリシーが表示されます。

コンテンツパックコンポーネントの選択

コンテンツパックは、1つのデータマート(さまざまなソースから収集されたデータのリポジトリ)です。これは、システムのパフォーマンス、仮想環境のパフォーマンスなどの特定のドメインに関係しており、分析、コンテンツプレゼンテーション、使いやすさの点から見て、特定のグループの知識を持つユーザー固有の要求を満たしています。たとえば、システムのパフォーマンスコンテンツでは、現在のITインフラストラクチャにあるシステムの可用性とパフォーマンスに関連するデータが提供されます。コンテンツパックには、1つのリレーショナルデータモデル(特定のドメインに対して収集されるデータの種類を定義)、および収集したデータを表示するレポートセットも含まれています。

コンテンツパックは次の層またはコンポーネントによって構成されます。

- **ドメインコンポーネント:**ドメインまたはコアドメインコンポーネントは、特定のコンテンツパックのデータモデルを定義します。これには、リレーショナルスキーマを生成するためのルールが含まれています。また、データベースへとデータを処理するためのデータ処理ルール(標準の事前集計ルールのセットを含む)も含まれています。ドメインコンポーネントには、1つまたは複数のレポートコンテンツパックコンポーネントで活用可能な、一般的に使用するディメンションとキューブを含めることができます。ドメインコンテンツパックコンポーネントは、設定済みのトポロジソースまたはデータの収集元であるデータソースに依存しません。
- **ETL(抽出、変換と読込)コンポーネント:**ETLコンテンツパックコンポーネントは、収集ポリシーと、変換ルール、調整ルール、およびステージングルールを定義します。また、データ処理ステップの実行順序を定義するデータ処理ルールも提供します。
- ETLコンテンツパックコンポーネントは、データソース依存型です。そのため、特定のドメインについて、各データソースアプリケーションは異なるETLコンテンツパックコンポーネントを持ちます。たとえば、HP Operations Agentからシステムパフォーマンスデータを収集する場合、SysPerf_ETL_PerformanceAgentコンポーネントをインストールする必要があります。HP SiteScopeからシステムパフォーマンスデータを収集する場合、SysPerf_ETL_SiS (CODA にログ記録されたソースデータ) またはSysPerf_ETL_SiS_DB (BSM プロファイルデータベースにログ記録されたソースデータ) のいずれかをインストールする必要があります。
- 単一のデータソースアプリケーションは、複数のETLコンポーネントを持つことができます。たとえば、Performance Agentでサポートされる仮想技術(Oracle Solaris Zones、VMware、IBM LPAR、Microsoft HyperVなど)ごとにETLコンポーネントを1つ持つことが可能です。ETLコンポーネントは、1つまたは複数のドメインコンポーネントに依存できます。また、同じドメインコンポーネントにデータをフィードする複数のETLコンポーネントを持つこともできます。
- **レポートコンポーネント:**レポートコンテンツパックコンポーネントは、アプリケーション固有の集計ルール、ビジネスビュー、SAP BOBJユニバース、および特定のドメインに対するレポートを定義します。レポートコンポーネントは、1つまたは複数のドメインコンポーネントに依存できます。また、このコンポーネントには、1つ以上のドメインコンポーネントで定義されるデータモデルを拡張する柔軟性も備えられています。

インストール可能なコンテンツパックコンポーネントのリストは、インストール後の設定段階で設定したトポロジソースに応じて異なります。トポロジソースが設定されると、デプロイメントマネージャは、コンテンツパックコンポーネントのリストをフィルタリングし、サポートされるデプロイメ

ントシナリオにインストール可能なコンポーネントのみを表示します。たとえば、RTSMがトポロジソースとして設定されると、デプロイメントマネージャは、SaOBおよびAPMのデプロイメントシナリオにインストール可能なコンポーネントのみを表示します。

各コンテンツパックとそれらによって提供されるレポートの詳細については、『*Service Health Reporter* ユーザーオンラインヘルプ』を参照してください。

コンテンツパックコンポーネントのインストール

コンテンツパックコンポーネントをインストールするには、デプロイメントマネージャユーティリティを使用します。

コンテンツパックをインストールするには、次の手順を実行します。

1. Webブラウザで管理コンソールを起動します。
 - a. 次のURLにアクセスします。
http://<SHR_Server_FQDN>:21411
 - b. [ログイン名] フィールドに *administrator* と入力し、[ログイン] をクリックして続行します。ホームページが開きます。

注: ほかのユーザーアカウントを使用して管理コンソールにアクセスする場合は、そのユーザーアカウントが管理者権限を持っていることを確認してください。

2. 左側のペインで [管理] をクリックし、[デプロイメントマネージャ] をクリックします。[デプロイメントマネージャ] ページが開きます。

デプロイメントマネージャには、サポートされるデプロイメントシナリオにインストール可能なコンテンツパックコンポーネントが表示されます。デフォルトでは、デプロイメントシナリオに固有のすべてのコンテンツパックコンポーネントがインストール用に選択されます。選択肢を変更するには、選択しているコンテンツ、データソースアプリケーション、またはコンテンツパックコンポーネントをリストからクリアします。各デプロイメントシナリオに固有のコンテンツを次の表に示します。

コンテンツパックのリスト

コンテンツ	BSM/OMi	HP Operations Manager	Application Performance Management	VMware vCenter
標準設定	✓	✓	✓	✓
Cross-Domain Operations Events	✓			

コンテンツ	BSM/OMi	HP Operations Manager	Application Performance Management	VMware vCenter
Health and Key Performance Indicators	✓		✓	
IBM WebSphere Application Server	✓	✓		
Microsoft Active Directory	✓	✓		
Microsoft Exchange Server	✓	✓		
Microsoft SQL Server	✓	✓		
MSAppCore	✓	✓		
Network Performance ^a	✓	✓		
Operations Events	✓	✓		
Oracle	✓	✓		
Oracle WebLogic Server	✓	✓		
Real User Transaction Monitoring	✓		✓	
合成トランザクション監視	✓		✓	
システムパフォーマンス	✓	✓		✓
Virtual	✓	✓		✓

^aNetwork Mode Manager i (NNMi) が BSM と統合されていない場合は、SHRのRTSMデプロイメントの NetworkPerf_ETL_PerfiSPI9.20_NonRTSM ETLコンテンツを使用する必要があります。

コンテンツ	BSM/OMi	HP Operations Manager	Application Performance Management	VMware vCenter
Environment Performance				

3. [インストール/アップグレード] をクリックします。

デプロイメントマネージャは、選択したコンテンツパックコンポーネントのインストールを開始します。

[ステータス] 列にインストールの進行状況が表示されます。[デプロイメントマネージャ] ページは自動的に更新され、最新のステータスが表示されます。

インストールが完了すると、各コンテンツパックコンポーネントの[ステータス] 列に「インストールに成功しました」と表示されます。

注: 実行中のワークフローストリームがある場合、デプロイメントマネージャーに次のメッセージが表示されます。

すべての必要なサービスが停止していますが、まだいくつかのジョブがアクティブな状態です。時間を置いて再試行してください。

このメッセージが表示された場合は、すべてのワークフローストリームが完了するまで待機します。

コンテンツパックをインストールした後で、SHRデータベーステーブルの列で監視されたオブジェクトの詳細なマッピングを表示するには、次の手順を実行します。

1. SHRサーバーの次のディレクトリに移動します。

Windowsの場合: %PMDB_HOME%\bin

Linuxの場合: \$PMDB_HOME/bin

2. 次のコマンドを実行します。

shr_utility -flow -l <場所>

この場合、<場所>は、SHRシステム上のローカルディレクトリです。

このコマンドにより、<場所>に異なる.xlsファイル(各コンテンツパックにつき1つ) が作成されます。各.xlsファイルには、特定のコンテンツパックについて、SHRデータベーステーブルの列で監視されるオブジェクトのマッピングの概要が示されます。

第II部: ライセンス取得

第6章: SHRのライセンス取得

デフォルトでは、SHRには60日間有効な自動的にオンになる一時的なライセンスが含まれています。60日間経過した後も継続してSHRを使用するには、永久的なライセンスをインストールする必要があります。

SHRライセンスには、次のものが含まれています。

• HP Service Health Reporterソフトウェア

このライセンスには、データ収集フレームワーク、SAP BusinessObjects Enterprise、収集したメトリックを保存および処理するための高パフォーマンスなパフォーマンス管理データベース、追加設定なしのコンテンツパックが含まれています。さらに、最大50ノードのメトリックを収集して報告するためのエンタイトルメントも含まれています。

• 50ノードの追加拡張パック

データ収集およびレポートのエンタイトルメントを追加し、環境に合わせてソリューションを拡張することができます。

SHRは、ライセンス取得のために、HPライセンスマネージャーのライセンスパッケージと統合されます。HPライセンスマネージャーは、SHRのライセンスフレームワーク、および一時的または永久的なライセンスのインストール機能を提供します。

永久的なライセンスを取得するには、HPライセンスマネージャーを使用するか、HP eaware Webサイトを使用してHP Password Centerから直接ライセンスを取得します。

ライセンス使用权 (LTU)

表1に、SHRで利用できるすべてのLTUを示します。

表1:^aライセンス使用权

ライセンス使用权	在庫商品識別番号 (SKU: Stock-keeping Unit)	説明
HP Service Health Reporter Standard Edition 50 Service Health Nodesソフトウェア電子ライセンス使用权	TD905AAE	このライセンス使用权には次のコンテンツパックが含まれます。 <ul style="list-style-type: none">• Systems/Virtualization Managementコンテンツパック• SPIコンテンツパック

^aノードとは、実際または仮想のコンピューターシステム、またはネットワーク上のデバイス(たとえばプリンター、ルーターまたはブリッジ)を指します。

表1: イセンス使用权 (続き)

ライセンス使用权	在庫商品識別番号 (SKU: Stock-keeping Unit)	説明
		<ul style="list-style-type: none"> イベントコンテンツパック (OM、OMi) BSM EUMおよびネットワークコンテンツパックはこのライセンス使用权では使用できません。
HP Service Health Reporter Advanced 50 Service Health Nodesソフトウェア電子ライセンス使用权	TJ756AAE	このライセンス使用权は、SHRの出荷時に含まれるすべてのコンテンツパックのエンタイトルメントをユーザーに付与します。
HP Service Health Reporter Upgrade from Standard to Advanced 50 Service Health Nodesソフトウェア電子ライセンス使用权	TD906AAE	このアップグレードライセンス使用权は、SHRをStandard EditionからAdvanced Editionにアップグレードするための資格をユーザーに付与します。
HP Service Health Reporter add 50 Nodes for Standard or Advanced Service Health Nodesソフトウェア電子ライセンス使用权	TJ757AAE	SHR用に50個の追加ノードのエンタイトルメントを追加するアドオンパックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Core for Migrationソフトウェア電子ライセンス使用权	TJ773AAE	HP Service Health Reporter Advanced Coreライセンス使用权 (50ノード) に移行するためのPerformance Insightユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Migration 250 Service Healthソフトウェア電子ライセンス使用权	TJ774AAE	HP Service Health Reporter Advancedライセンス使用权 (250ノード) に移行するためのPerformance Insightユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced	TJ775AAE	HP Service Health Reporter Advancedライセンス使用权

表1:ノードとは、実際または仮想のコンピューターシステム、またはネットワーク上のデバイス(たとえばプリンタ、ルーターまたはブリッジ)を指します。ライセンス使用权(続き)

ライセンス使用权	在庫商品識別番号 (SKU: Stock-keeping Unit)	説明
Migration 1000 Service Health ソフトウェア電子ライセンス使用权		(1000ノード) に移行するためのPerformance Insightユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Migration 5000 Service Health ソフトウェア電子ライセンス使用权	TJ776AAE	HP Service Health Reporter Advancedライセンス使用权(5000ノード) に移行するためのPerformance Insightユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Migration Unlimited Service Healthソフトウェア電子ライセンス使用权	TJ777AAE	HP Service Health Reporter Advanced Core電子ライセンス(ノード数無制限) に移行するためのPerformance Insightユーザー向けの移行パックです。

永久的なライセンスキーの取得

永続的なライセンスキーを取得するには、次の手順を実行します。

1. 次のURLを使用してSHR管理コンソールを開きます。
<http://<サーバー名>:21411>
 ここで、<サーバー名>は、SHRがインストールされているシステムの完全修飾ドメイン名です。
2. **[管理]** > **[ライセンス取得]** をクリックします。[HPライセンスキー配布サービス] ページが開きます。
3. [ようこそ] の下にある **[新規ライセンスの生成]** をクリックします。
4. 自分のユーザーIDとパスワードを使用して、HPパスポートにログオンします。アカウントを持っていない場合は、操作を続ける前にアカウントを作成する必要があります。[注文番号] ページが開きます。
5. [注文番号] フィールドに注文番号を入力し、**[次へ]** をクリックします。[製品の選択] ページが開きます。
6. **[PERM]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。[ライセンスの取得] ページが開きます。
7. [ライセンス所有者の検索または作成] を選択し、[ライセンス所有者の電子メールアドレス] フィールドに電子メールアドレスを入力します。
8. SHRホストシステムのIPアドレスを入力し、**[次へ]** をクリックします。[ライセンス所有者の作

成] ページが開きます。

注: 高可用性クラスター環境でSHRを設定している場合、SHRホストシステムの論理IPアドレスを指定する必要があります。高可用性の設定の詳細については、『*HP Service Health Reporter高可用性ガイド*』を参照してください。

9. 次のライセンス所有者情報を入力します。

フィールド	説明
ライセンス所有者 (エンドユーザー) 情報の作成	ライセンス所有者の名前、電話番号、および電子メールアドレス。
会社の電子メールアドレスドメイン	ライセンス所有者の会社のドメイン名。
メールアドレス	ライセンス所有者のメールアドレス。
ライセンス所有者のプライバシーポリシー (オプション)	ライセンス所有者のプライバシーポリシーのオプションの設定。

10. [次へ] をクリックして続行します。[トランザクション要約] ページが開きます。
11. 要約を確認し、[次へ] をクリックして続行します。[ライセンス証明書] ページが開きます。
12. ライセンス証明書の情報を確認し、ライセンスをシステムに保存して、[ライセンス証明書] ページを閉じます。

永久的なライセンスキーのインストール

永続的なライセンスをインストールするには、次の手順を実行します。

Windowsの場合

1. 管理者としてSHRシステムにログオンします。
2. [スタート] > [プログラム] > [HP Software] > [Service Health Reporter] > [License Manager] をクリックします。[ライセンスキーの取得/インストール] ウィンドウが開きます。
3. [ファイルからのライセンス キーのインストール/復元] をクリックします。[ファイルからのライセンスキーのインストール/復元] ページが開きます。
4. 保存されたライセンス証明書の場所を参照し、[ファイル内容の表示] をクリックして、[PERM] を選択し、[インストール] をクリックします。

Linuxの場合

1. ルートとしてSHRシステムにログオンします。

注: Xクライアントアプリケーションを使用してLinuxシステムにリモートで接続する場合は、BROADCASTモードを使用しないでください。さらに、LinuxシステムでDISPLAY環境変数を正しく設定していることを確認してください。

2. (「[ライセンス証明書の情報を確認し、ライセンスをシステムに保存して、\[ライセンス証明書\] ページを閉じます。](#)」(75ページ)で保存した) ライセンスファイルの名前は、.(ドット)文字で始まります。(.) (ドット)文字を削除して、このファイルの名前を変更する必要があります。
3. 次のコマンドを実行します。

```
$PMDB_HOME/bin/LicenseManager.sh
```


[ライセンスキーの取得/インストール] ウィンドウが開きます。
4. **[ファイルからのライセンス キーのインストール/復元]** をクリックします。[ファイルからのライセンス キーのインストール/復元] ページが開きます。
5. 保存されたライセンス証明書の場所を参照し、**[ファイル内容の表示]** をクリックして、**[PERM]** を選択し、**[インストール]** をクリックします。

SAP BusinessObjectsライセンスの再アクティブ化

SAP BusinessObjectsライセンスは、SHRライセンスの有効性に依存します。SHRライセンスが期限切れになった場合、SAP BusinessObjectsライセンスキーが自動的に無効になり、すべてのSAP BusinessObjectsサーバーが無効になります。SHRライセンスを更新した後で管理コンソールにアクセスすると、SHRが自動的にSAP BusinessObjectsライセンスキーを再びアクティブにします。ただし、SAP BusinessObjectsサーバーは無効な状態のままになっています。SAP BusinessObjectsを機能させるには、次の手順を実行して、サーバーを手動で有効にする必要があります。

Windowsの場合

1. 管理者としてSHRシステムにログオンします。
2. **[スタート] > [プログラム] > [BusinessObjects XI 3.1] > [BusinessObjects Enterprise] > [Central Configuration Manager]** をクリックします。[Central Configuration Manager] ウィンドウが開きます。
3. [表示名] 列で、**[サーバーインテリジェンスエージェント (HOMLO1GEATON)]** を選択します。
4. メインツールバーで、[サーバーの管理] アイコンをクリックします。[ログオン] ダイアログボックスが開きます。
5. [システム] リストで、SAP BusinessObjectsがインストールされているシステムを選択します。
6. [ユーザー名] と [パスワード] フィールドに、SAP BusinessObjectsサーバーのユーザー資格情報を入力します。
デフォルトのユーザー名は、Administratorです。[パスワード] フィールドは空白のままにします。
7. **[接続]** をクリックします。[サーバーの管理] ウィンドウが開きます。
8. **[更新]** アイコンをクリックして、サーバーリストを更新します。

9. **[すべて選択]**をクリックして、リストされているすべてのサーバーを選択し、**[有効]**アイコンをクリックして、サーバーを再起動します。
10. **[閉じる]**をクリックして、ウィンドウを閉じます。
11. 開いているすべてのウィンドウを閉じます。
12. 次のURLを使用して**中央管理コンソール**にログオンします。

`http://<SHRシステムのFQDN>:8080/CmcApp`

ここで、<SHRシステムのFQDN>は、SHRシステムの完全修飾ドメイン名です。

13. 管理者としてログオンします。



14. **[サーバー]**をクリックします。

15. それぞれのサーバーを右クリックし、**[サーバーの有効化]**をクリックします。

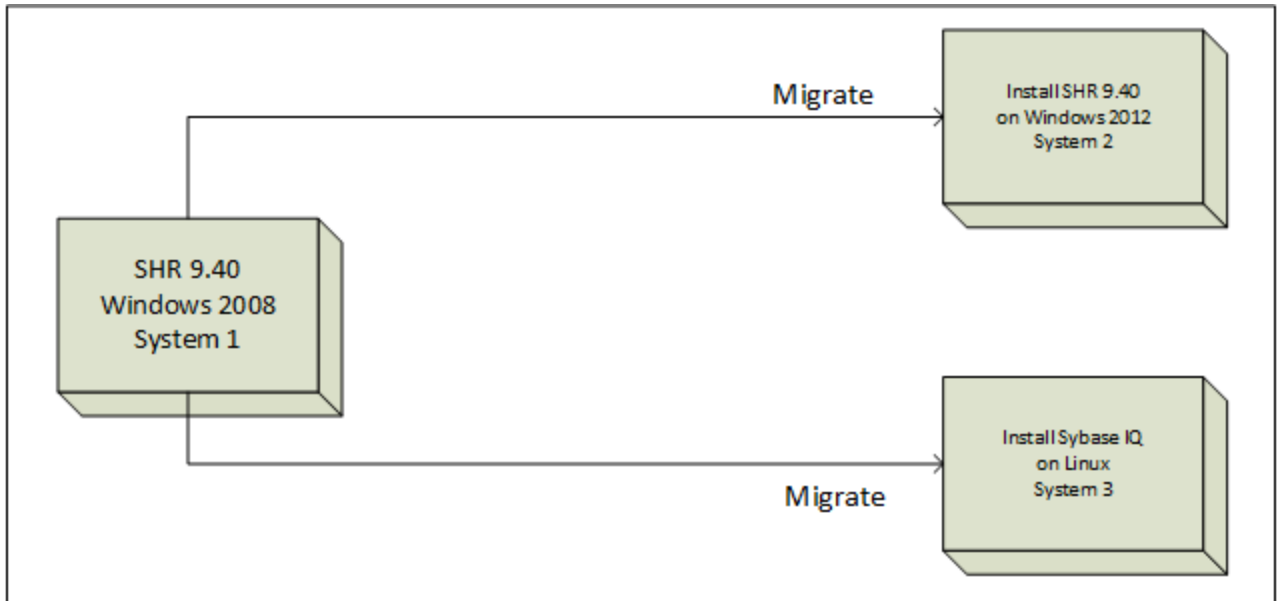
それでもSAP BusinessObjectsサーバーが有効にならない場合は、HP_PMDB_Platform_IMサービスを再起動します。

第III部: Windows 2012環境への移行

SHR 9.40をWindows 2012にインストールできますが、Windows 2012ではSHRデータベースがサポートされません。SHRサーバーおよびSAP BusinessObjectsをWindows 2012にインストールし、Sybase IQデータベースをLinuxシステムにインストールすることができます。本項では、Windows 2008上のSHR 9.40インストールをWindows 2012環境 (Sybase IQデータベースはLinuxシステムに別途インストール) に移行する手順を説明します。

第7章: 並列移行

この手順を実行することで、Windows 2008 環境のSHR 9.40をWindows 2012環境に移行できます。



移行の前提条件

SHRの移行に進む前に、以下のタスクが完了していることを確認してください。

1. システム1で、SHRメディアに含まれるインストーラプログラムを使用し、最新バージョンにアップグレードします。

注: SHRセットアップの完全なバックアップを行うことで、アップグレードの失敗によるデータの紛失を防ぎます。

詳細については、「[データベースのバックアップとリカバリ](#)」を参照してください。

2. システム2で、SHRの最新バージョンをインストールします。
3. Linuxオペレーティングシステムが動作するシステム3で、Sybase IQ (SHR 9.40メディアにバンドル化されている) をインストールします。
4. システム2でインストール後の設定手順を実行します。設定時に指定するパスワードは、システム1の旧インストールのパスワードと同じです。

現時点では、データソースとトポロジソースは設定しないでください。

5. システム1で、次の手順を実行してすべてのSHRサービスを停止します。
 - a. SHRシステムにログオンします。
 - b. [サービス] ウィンドウを開きます
 - c. 以下のサービスを停止します。

- HP_PMDB_Platform_Administrator
 - HP_PMDB_Platform_Collection
 - HP_PMDB_Platform_DB_Logger
 - HP_PMDB_Platform_Timer
 - HP_PMDB_Platform_IM
 - HP_PMDB_Platform_Message_Broker
 - HP_PMDB_Platform_PostgreSQL
 - HP_PMDB_Platform_Sybase (カスタムインストールでは、Sybase IQサーバーをアップグレードする前にこのサービスを停止します)
 - Sybase IQ Agent 15.4 Service (カスタムインストールでは、Sybase IQサーバーをアップグレードする前にこのサービスを停止します)
 - Business Objects Webserverサービス (カスタムインストールでは、SAP BusinessObjectsサーバーをアップグレードする前にこのサービスを停止します)
6. Windowsのタスクマネージャを起動し、[プロセス]タブに移動します。
- *abcloadNrun*プロセスが実行中である場合は、完了するまで待機します。
7. 次のコマンドを実行して、必要なすべてのサービスおよびプロセスが停止しているかどうかを確認します。
- ```
%PMDB_HOME%\DR\SHRServiceCheck.bat
```
8. Sybase IQサービスを開始します。
9. 完全なSHRセットアップのバックアップを作成します。その手順については、「[データベースのバックアップとリカバリ](#)」を参照してください。
10. PostgreSQLサービスが実行中であることを確認します。次のコマンドを実行し、管理データベースのバックアップを作成します。
- ```
Windows:%PMDB_HOME%\..\JRE64/bin/java -cp %PMDB_HOME%\lib\utils.jar  
com.hp.bto.bsmr.common.util.PostgresUpgrade PRE_DB_UPGRADE postgres 21425 <バックアップ  
の場所> dwabc %PMDB_HOME%
```
11. 次の手順を実行して、Sybase IQのバックアップをシステム3で復元します。
- a. Sybase IQのバックアップをシステム3にコピーします。
%PMDB_HOME%\config\pmdbConfig.cfgファイルをシステム1からシステム3の%PMDB_HOME%\configフォルダーにコピーします。
 - b. %PMDB_HOME%\config\pmdbConfig.cfg内のサーバー名をリモートIQシステムの短縮名に変更します。
 - c. システム3でSybase IQサーバーを停止します。
 - d. 既存のSybase DBファイルを別の場所に移動します。
 - e. 次のコマンドを実行して、システム3でSybase IQサーバーを開始します。

```
start_iq @/opt/HP/BSM/PMDB/config/pmdbConfig.cfg
```


- f. デフォルトのutility_dbパスワードを使用して、システム2からシステム3のリモートSybase IQサーバーに接続し、次の手順でデータベースを復元します。

例:

```
restore DATABASE '<システム3上のSybase DBファイルの場所>' from '<システム3上のSybase IQ  
バックアップファイルの絶対パスを含むファイル名>' /pmdb.db  
RENAME IQ_SYSTEM_MAIN TO '<システム3上のSybase DBファイルの場所>/SHRDB/pmdb.iq'  
RENAME IQ_SYSTEM_TEMP TO '<システム3上のSybase DBファイルの場所>/SHRDB/pmdb.iqtmp'  
RENAME IQ_SYSTEM_MSG TO '<システム3上のSybase DBファイルの場所  
>/SHRDB/pmdb1.iqmsg'  
RENAME pmdb_user_main TO '<システム3上のSybase DBファイルの場所>/SHRDB/pmdb_user_  
main.iq'
```

12. システム2でSAP BusinessObjectsサーバーのバックアップを復元します。「[データベースのバックアップとリカバリ](#)」を参照してください。

注: SHRシステム1のホスト名 (短縮名) をBOレポジトリユーザーIDとして使用します。

13. 次の手順を実行して、管理データベースのバックアップをシステム2で復元します。
- すべてのSHRサービスを停止します。すべてのSHRプロセスが完了するまで待機します。
 - 次のコマンドを実行して、必要なすべてのサービスおよびプロセスが停止しているかどうかを確認します。

```
%PMDB_HOME%\DR\SHRServiceCheck.bat
```
 - PostgreSQLサービスを起動します。
 - 次のコマンドを実行して、管理データベースを復元します。
 - Windows:%PMDB_HOME%\../JRE64/bin /java -cp %PMDB_HOME%/lib/log4j-1.2.15.jar:%PMDB_HOME%/lib/utis.jar com.hp.bto.bsmr.common.util.PostgresUpgrade POST_DB_UPGRADE postgres 21425 <バックアップの場所> dwabc %PMDB_HOME%

14. 次の設定ファイルを復元します。

- collection.properties
- 存在する場合は、downtimeおよびgroup.xml
- serverおよびweb.xml

注: 復元手順の実行後に次のファイルでシステム1のホスト名をシステム2に更新し、BOサービスを再起動します。

```
%PMDB_HOME%/ BOWebServer/webapps/InfoViewApp/WEB-INF/web.xml  
%PMDB_HOME%/ /BOWebServer/webapps/CmcApp/WEB-INF/web.xml
```

- 存在する場合は、キーストアを再作成します。

15. dbisqlを使用して、次のコマンドを実行します。

- DELETE FROM IM_PM_OS_INFO_FILDETAIL WHERE OS_INFO_ID IN (SELECT IM_PM_OS_INFO_ID FROM IM_PM_OS_INFO WHERE upper (HOSTNAME) = UPPER('<システム1の短縮ホスト名>'))
- DELETE FROM IM_PM_OS_INFO WHERE upper (HOSTNAME) = UPPER('<システム1の短縮ホスト名>'))
- DELETE FROM IM_PM_APPS_INFO WHERE upper(HOSTNAME) = UPPER('<システム1の短縮ホスト名>')

16. データのギャップを修正する場合は、次に示す収集の初回履歴値を使用してconfig.prpファイルを編集します。

- dbcollector.initHistory = 48
- collector.initHistory = 48

pgAdminを使用して、次のクエリーを実行します。

```
Truncate dwabc.PA_LAST_POLL;
```

```
Truncate dwabc.DB_LAST_POLL;
```

この手順を実行する場合は、必要なデータがレポートで利用可能になったら、値を元の値に戻して、収集サービスを再起動します。

次の手順を実行して、収集データソースを同期化します。

1. pgAdminを使用して、次のクエリーを実行します。

```
UPDATE dwabc.remote_poller SET datasource_status=0
```

2. 「管理者コンソール」 ([管理者] > [コレクターの設定] ページ) を使用して、収集データソースを同期化します。

注: 移行の実行後、[SHR管理コンソール] > [管理] > [デプロイメントマネージャー] を起動し、コンテンツパックを最新バージョンにアップグレードします。

SysPerf_SiS_ETLコンテンツパックコンポーネントは廃止されています。SysPerf_SiS_ETLの代わりに、SysPerf_SiS_DBまたはSysPerf_SiS_APIを使用してください。詳細については、『HP Service Health Reporter管理者オンラインヘルプ』を参照してください。

アップグレードが失敗する場合、前のバージョンのバックアップを復元してアップグレードを再実行してください。

移行後の設定

移行後に次のタスクを実行します。

タスク1: Universe Connectionのアクセス権レベルを再び適用します。

SHRコンテンツパックをアップグレードする場合、出荷時に含まれる前のUniverse Connectionが再び作成されます。したがって、各接続レベルでアクセス権を適用する場合は、そのUniverse Connectionに対してアクセス権を再び付与する必要があります。ユーザーアクセスレベルの有効化の詳細については、SAP BusinessObjectsドキュメントを参照してください。

タスク2:SHRが正常に実行していることを確認します。

次のURLを起動し、管理者として管理コンソールにログオンできることを確認します。

http://<SHR_Server_FQDN>:21411

次のURLを起動し、管理者としてInfoViewコンソールにログオンできることを確認します。

http://<SHR_Server_FQDN>:8080

管理者として正常にログオンできる場合、SHRは正常に実行しています。認証エラーが表示される場合は、バックアップデータベースのファイルストアを復元し、アップグレード手順を再び実行する必要があります。詳細については、「[データベースのバックアップとリカバリ](#)」を参照してください。

注: 管理者および収集サービスの再作成

SHRをドメイン内にインストールした場合、『HP Service Health Reporter設定ガイド』の「SHRがドメイン内にインストールされている場合のSHRサービスの設定」で説明されているとおりに次のサービスを再作成します。

- HP PMDB Platform Administratorサービス
- HP PMDB Platform Collection Service

第IV部: 追加の設定

第8章: SHR用のセキュアな接続の設定 (HTTPS)

SHRには、管理コンソールとSAP BusinessObjects InfoViewの2つのコンソールインタフェースがあります。コンソールは、HTTPSネットワークプロトコルを使用したセキュアな環境と、HTTPネットワークプロトコルを使用したセキュアでない環境の両方で実行することが可能です。両方のコンソールのデフォルトのプロトコルはHTTPです。管理コンソールとSAP BusinessObjects InfoViewコンソールにセキュアな環境をセットアップするには、HTTPSネットワークプロトコルを構成する必要があります。

キーストアファイルの作成

セキュアな接続を設定する前に、SHRサーバー証明書とプライベートキーを含むキーストアファイルを作成する必要があります。キーツールを使用してキーストアファイルを作成するには、次のコマンドを実行します。

```
keytool -genkey -keystore keystore.jks -alias mykey
```

注: 他のツールを使用してキーストアファイルを作成することも可能です。

キーストアファイルはパスワードで保護されます。SHRにより、`keystorepath`プロパティおよび`keystorepasswd`プロパティを使用してキーストアの場所およびパスワードの設定が可能です。Windowsシステムでは、キーストアのパスはスラッシュを使用して指定する必要があります。`Keystoretype`プロパティにより、キーストアのタイプを指定できます。サポートされる値はJKSとPKCS12です。キーストア内の証明書のエイリアスは、次の表で示しているように`keyalias`プロパティを使用して指定されます。

プロパティ名	例
Keystorepath	C:/certs/serverkeystore.jks
Keystorepasswd	changeit
Keyalias	shserver
Keystoretype	JKS

セキュアな接続の設定 (HTTPS)

管理コンソールおよびInfoViewコンソール用のセキュアな接続を設定できます。

SHRの管理コンソールの場合

SHRの管理コンソール用のセキュアな接続を設定するには、次の手順を実行します。

タスク1:HP_PMDB_Platform_Administratorサービスの停止

• Windows

HP_PMDB_Platform_Administratorサービスを停止するには、次の手順を実行します。

- [スタート]>[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが開きます。
- [開く]フィールドにservices.mscと入力し、[ENTER]を押します。[サービス]ウィンドウが開きます。
- 右側のペインで、**HP_PMDB_Platform_Administrator**を右クリックし、[停止]をクリックします。

• Linux

次のコマンドを実行します。

```
service HP_PMDB_Platform_Administrator stop
```

タスク2:server.xmlファイルの編集

ヒント: 編集する前に、server.xmlファイルのバックアップを作成します。

- ポート値が21412に設定されているSSLコネクタタグのコメントアウトを解除します。
- 次の場所にあるserver.xmlファイルで次のフィールドを設定します。

• Windows

```
%PMDB_HOME%\adminserver\conf/
```

• Linux

```
$PMDB_HOME/adminserver/conf/
```

フィールド	説明
keystorefile	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
keystorepasswd	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
keystoretype	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
keyAlias	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス。

タスク3:config.prpファイルの編集

ヒント: 編集する前に、config.prp ファイルをバックアップします。

次の場所にあるconfig.prpファイルで次のフィールドを設定します。

Windows

%PMDB_HOME%\data

Linux

\$PMDB_HOME/data

フィールド	値
bo.protocol	https
bo.ssl.enabled.port	8443

注: bo.ssl.enabled.port は、server.xmlファイル内のコネクタタグのポート属性で指定されたポート番号に設定されます。デフォルト値は8443です。

タスク4:HP_PMDB_Platform_Administrator serviceサービスの開始

Windowsの場合:

HP_PMDB_Platform_Administratorサービスを停止するには、次の手順を実行します。

1. [スタート]->[ファイル名を指定して実行]をクリックします[ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスが開きます。
2. [名前]フィールドにservices.mscと入力し、[ENTER]キーを押します。[サービス]ウィンドウが開きます。
3. 右側のペインで、[HP_PMDB_Platform_Administrator]を右クリックし、[開始]をクリックします。

Linuxの場合:

次のコマンドを実行します。

```
service HP_PMDB_Platform_Administrator start
```

タスク5:設定の確認

設定を確認するには、次のURLを使用して管理コンソールにログオンします。

https://<ホスト名>: 21412

ここで、<ホスト名>は、SHRシステムの名前です。

SHRのInfoViewコンソールの場合

SHRのInfoViewコンソール用にHTTPS通信を有効にするには、次の手順を実行します。

注: SHRのカスタムインストールでは、SHR BusinessObjectsがインストールされているシステムで次のタスクを実行します。

タスク1:SAP BusinessObjects Webserverサービスの停止

Windowsの場合:

SAP BusinessObject WebServerサービスを停止するには、次の手順を実行します。

1. [スタート]->[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
2. [名前] フィールドにservices.mscと入力し、[ENTER] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
3. 右側ペインで、**SAP BusinessObject WebServer**を右クリックし、[停止]をクリックします。

Linuxの場合:

1. /opt/HP/BSM/PMDB/BOWebServer/binに移動します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
./shutdown.sh
```

タスク2:server.xmlファイルの編集

ヒント: 編集する前に、server.xmlファイルのバックアップを作成します。

%PMDB_HOME%\BOWebServer\conf (Windowsの場合)または\$PMDB_HOME/BOWebServer/conf (Linuxの場合)にあるserver.xmlファイルを開きます。

次の手順を実行します。

1. ポート値が8443に設定されているSSLコネクタタグのコメントアウトを解除します。
2. ファイル内の次のフィールドを説明で示している値に設定します。

フィールド	説明
keystorefile	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
keystorepasswd	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
keystoretype	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
keyAlias	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス。

タスク3:SAP BusinessObjects WebServerの開始

Windowsの場合:

SAP BusinessObject WebServerサービスを停止するには、次の手順を実行します。

1. [スタート]->[ファイル名を指定して実行]をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
2. [名前] フィールドにservices.mscと入力し、[ENTER] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
3. 右側ペインで、**SAP BusinessObject WebServer**を右クリックし、[停止]をクリックします。

Linuxの場合:

1. /opt/HP/BSM/PMDB/BOWebServer/binに移動します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
./startup.sh
```

タスク4:設定の確認

設定が正常かどうかを確認するには、次の手順を実行します。

- https://<ホスト名>:8443/InfoViewAppにログオンします。
ここで、<ホスト名>は、SHRシステムの名前です。
- https://<ホスト名>:8443/CmcAppに移動します。
ここで、<ホスト名>は、SHRシステムの名前です。

第9章: SHR用のクライアント認証証明書

SHRには、管理コンソールとSAP BusinessObjects InfoViewの2つのコンソールインタフェースがあります。管理コンソールではSHRを管理して監視できるのに対して、SAP BusinessObjects InfoViewコンソールではレポートとダッシュボードを表示できます。どちらのコンソールも、HTTPSネットワークプロトコルを使用したセキュアな環境でも、HTTPネットワークプロトコルを使用した非セキュアな環境でも実行できます。両方のコンソールのデフォルトプロトコルはHTTPです。セキュアな環境を設定するには、管理コンソールおよびSAP BusinessObjects InfoViewコンソールのHTTPS通信を設定する必要があります。

認証と承認

SHRは、認証と承認にSAP BusinessObjectsを使用します。SAP BusinessObjectsユーザーアカウントは、SAP BusinessObjects中央管理コンソールによって管理されます。SHR管理コンソールにアクセスするには、SAP BusinessObjects管理者である必要があります。SHRは、デフォルトではユーザー名/パスワードに基づいた認証メカニズムを使用します。また、管理コンソールの場合は「[「タスク4:証明書に基づいた認証の設定」](#)」の手順に従い、SAP BusinessObjectsビューの場合は「[「SAP BusinessObjects InfoViewの設定」](#)」の手順に従って、クライアント証明書に基づいた認証を使用するようにSHRを設定することもできます。SHRは、証明書を検証することによってユーザーのIDを確認し、SAP BusinessObjectsを使用してユーザーを認証します。

証明書に基づいた認証の前提条件

証明書に基づいた認証を設定する前に、次の前提条件を満たしていることを確認してください。

タスク1:SHRサーバー証明書とプライベートキーが含まれたキーストアファイルの作成

キーストアファイルはパスワードで保護されます。SHRにより、keystorepathプロパティおよびkeystorepasswdプロパティを使用してキーストアの場所およびパスワードの設定が可能です。Keystorepathは、「[Configuring SHR管理コンソールの設定](#)」の「タスク4: 証明書に基づいた認証の設定」、および「[SAP BusinessObjects InfoViewの設定](#)」の「タスク4: 証明書に基づいた設定のセットアップ」のプロパティファイルで指定する必要があります。Keystoretypeプロパティにより、キーストアのタイプの指定が可能です。サポートされる値はJKSとPKCS12です。キーストア内の証明書のエイリアスは、次の表で示しているようにkeyaliasプロパティを使用して指定されます。

プロパティ名	例
Keystorepath	\\certs\serverkeystore.jks (Linux) C:\\certs\\serverkeystore.jks (Windows)
Keystorepasswd	changeit

プロパティ名	例
Keyalias	shserver
Keystoretype	JKS

タスク2: 承認を証明する (CA) 証明書が含まれたキーストアファイルの作成

SHRサーバーによって信頼されるCA証明書が含まれたキーストアファイルを作成する必要があります。このファイルはパスワードで保護されます。SHRを使用して、truststorepathプロパティ、truststorepasswdプロパティ、およびtruststoretypeプロパティを次の表で示している値に設定することで、トラストストアを設定できます。truststorepathは、「[タスク4:証明書に基づいた認証の設定](#)」および「[タスク4:証明書に基づいた設定のセットアップ](#)」のプロパティファイルで指定する必要があります。

プロパティ名	値の例
truststorepath	\certrelated\Trustkeystore (Linux) C:\\certrelated\\Trustkeystore (Windows)
truststorepasswd	changeit
truststoretype	JKS

タスク3:証明書取り消しチェックを有効にする必要があるかどうかを決定

証明書取り消しチェックを有効にするには、com.sun.net.ssl.checkRevocationをtrueに設定する必要があります。SHRは取り消された証明書のチェックについて2つの方法をサポートしています。

- 証明書取り消しリスト (CRL) - CRLには取り消された証明書に関する情報が記載され、CAからダウンロードされます。SHRは、証明書からCRL分布点URLを抽出します。この確認を有効にするには、com.sun.security.enableCRLDPをtrueに設定する必要があります。
- オンライン証明書ステータスプロトコル (OCSP) - OCSPとは、OCSPレスポンドと呼ばれるオンラインサービスを使用して単一の証明書の取り消しをチェックするためのプロトコルです。OCSPプロトコルを使用した取り消しチェックを有効にするには、ocsp.enableをtrueに設定する必要があります。SHRは、証明書からOCSP URLを抽出して証明書を検証します。ローカルOCSPレスポンドサービスを設定する場合、SHRでocsp.responderURLプロパティを使用して設定できます。

証明書の取り消し、CRL、OCSPを有効にする方法の詳細については、「[SHR管理コンソールの設定](#)」の「[タスク4:証明書に基づいた認証の設定](#)」を参照してください。

証明書の取り消し、CRL、OCSPを有効にする方法の詳細については、「[SAP BusinessObjects InfoViewの設定](#)」の「[タスク4:証明書に基づいた設定のセットアップ](#)」を参照してください。

タスク4:SHRサーバーとインターネットの間にプロキシが存在する場合のプロキシサーバーアドレスの決定

プロキシサーバーが存在する場合、CRLをダウンロードするためにSHRサーバーを有効にするように設定する必要があります。プロキシサーバーは次のように設定できます。

http.proxyHost	httpプロキシのホスト名を設定します
http.proxyPort	httpプロキシのポート番号を設定します
https.proxyHost	httpsプロキシのホスト名を設定します
https.proxyPort	httpsプロキシのポート番号を設定します

詳細については、「[「SHR管理コンソールの設定」](#)」の「タスク4: 証明書に基づいた認証の設定」を参照してください。

タスク5: ユーザー名抽出メカニズムの決定

ユーザー名抽出メカニズムは、証明書の形式に依存します。証明書から抽出されたユーザー名は、SAP BusinessObjectsで設定したユーザー名に一致する必要があります。SHRでは、次の2つのメカニズムを使用してユーザー名を抽出できます。

- SubjectDN
- サブジェクトの別名 (SAN)

ユーザー名抽出メカニズムを設定するには、**server.xml**ファイルのfield、entry、type、pattern、およびOIDの各プロパティで変更を行う必要があります。

```
<Realm className="com.hp.bto.bsmr.SHRSecureAuth.auth.SHRRealm" field="SubjectDN" entry="CN" Type="" oid="" pattern="" useSubjectDNonMatchFail="true"/>
```

- SubjectDNからユーザー名を抽出するには、次の値をプロパティに設定する必要があります

プロパティ名	値
field	SubjectDN
entry	CNに設定するとCNをユーザー名として指定します OUに設定するとOUをユーザー名として指定します

entryプロパティでは、SubjectDNにおけるユーザー名としてみなす必要のあるエントリを指定できます。entryパラメータを使用する代わりにパターンを使用して、SubjectDNからユーザー名を抽出することもできます。SubjectDNからユーザー名を抽出するパターンを設定するには、patternパラメータを使用します。たとえば、パターンがEMAILADDRESS=(.+@)として設定され、abc@hp.comがemailaddressフィールドの値である場合、abcがユーザー名として抽出されます。

- サブジェクトの別名 (SAN) からユーザー名を抽出するには、次の手順を実行します。
fieldプロパティの値をSANに設定します。Typeプロパティを使用して、SANユーザー名のrcf822NameまたはotherNameの部分を設定できます。rcf822Nameを設定するには、Typeプロパティの値をrcf822Nameに設定します。otherNameを設定するには、typeプロパティの値をotherNameに設定し、オブジェクト識別子 (OID) をOIDに設定します。

デフォルトでは、SHRはCNからユーザー名を抽出します。

ユーザーがスマートカードのみを使用してログオンできるようにSHRを設定できます。スマートカードログオンを有効にするには、smartcard.enableプロパティをtrueに設定する必要があります

す。

server.xmlファイルの場所は、次の表で示しています。

設定	パス
管理者コンソール	\$PMDB_HOME/adminserver/conf (Linuxの場合) %PMDB_HOME%\adminserver\conf (Windowsの場合)
SAPInfoview BusinessObjects	\$PMDB_HOME/BOWebServer/conf (Linuxの場合) %PMDB_HOME%\BOWebServer\conf (Windowsの場合)

タスク6:証明書のインポートおよびブラウザの設定

- ルートCAによって発行された証明書をSHRサーバーにインポートします。Internet Explorerにある [信頼されたルート証明機関] タブを使用して、Webブラウザにインポートします。詳細については、Internet Explorerヘルプを参照してください。
- プロトコルTLSv1を受け入れるようにWebブラウザを設定します。ここで、v1はバージョンを示しています。

注: 高可用性の場合、両方のサーバーを設定します。

SHRでは、管理コンソールインタフェースおよびSAP BusinessObjects InfoViewAppインタフェース用に証明書に基づいた認証を設定できます。

ユーザー名抽出方法の設定

ユーザー名抽出は、server.xmlファイルを編集することで設定できます。詳細については、「[タスク5: ユーザー名抽出メカニズムの決定](#)」を参照してください。

SHR管理コンソールの設定

続行する前に、SHRのインストール後の設定が正常に完了していることを確認してください。証明書に基づいた認証を行うためにSHR管理コンソールを設定するには、次の手順を実行します。

タスク1:共有シークレットの設定

共有シークレットは、信頼された認証を確立するために使用されます。共有シークレットは、文字形式のみで入力する必要があります。

1. ブラウザーでhttp://<ホスト名>:21411と入力し、SHRの管理コンソールにログオンします。
2. **[管理]** > **[セキュリティ]** > **[BO信頼された認証]** に移動します。

セキュリティ ?

LW-SSO BO信頼された認証


BO信頼された認証の設定

有効

共有シークレット

3. **[有効]** チェックボックスを選択します。
 4. **[共有シークレット]** に入力します。
 5. **[保存]** をクリックします。
- 設定が正常に完了したら、次のメッセージが表示されます。

セキュリティ

 BO信頼された認証構成の保存に成功しました!

BO信頼された認証の設定

有効

共有シークレット

タスク2:HP_PMDB_Platform_Administratorサービスの停止

HP_PMDB_Platform_Administratorサービスを停止するには、次の手順を実行します。

1. **[スタート]** > **[ファイル名を指定して実行]** をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
2. [名前] フィールドにservices.mscと入力し、**[ENTER]** キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
3. 右側のペインで、HP_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、**[停止]** をクリックします。

Linuxの場合

次のコマンドを実行します。

```
service HP_PMDB_Platform_Administrator stop
```

タスク3:config.prpファイルの設定

%PMDB_HOME%\dataフォルダー (Windowsの場合)または\$PMDB_HOME/data (Linuxの場合)にあるconfig.prpファイルで、指定された値を次のフィールドに設定します。

フィールド	値
shr.loginMethod	certbased
shr.auth.classes	com.hp.bto.bsmr.security.auth.BOTrustedAuthenticator

タスク4:証明書に基づいた認証の設定

\$PMDB_HOME/data (Linuxの場合) および%PMDB_HOME%\dataフォルダー (Windowsの場合)にあるadminserverclientauth.prpファイルで次のパラメーターを指定します。次のフィールドを編集し、次の説明に従って値を設定します。

フィールド	説明
truststorepath	トラストストアファイルのフルパス。クライアント証明書を検証するために使用されます。
truststorepasswd	トラストストアにアクセスするためのパスワード。
truststoretype	トラストストアに使用されるキーストアのタイプ。
keystorepath	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
keystorepasswd	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
keystoretype	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
keyAlias	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス
smartcard.enable	スマートカードログオンを有効にする場合はtrueに設定し、スマートカードログオンを無効にする場合はfalseに設定します。
http.proxyHost	HTTPプロキシのホスト名。
http.proxyPort	HTTPプロキシのポート番号。
com.sun.net.ssl.checkRevocation	取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、取り消しを無効にする場合はfalseに設定します。
com.sun.security.enableCRLDP	CRLの取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。
crlFile	CRLファイルパスを入力します。
ocsp.enable	OSCPに基づいた取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。

フィールド	説明
ocsp.responderURL	OCSPレスポナーURLを設定します。

注: CRLに基づいた取り消しをtrueに設定する場合はOSCPに基づいた取り消しをfalseに設定し、OSCPに基づいた取り消しをtrueに設定する場合はCRLに基づいた取り消しをfalseに設定する必要があります。

プロパティ値を設定した後で、次の手順を実行します。

• Linuxの場合

- \$PMDB_HOME/binフォルダーに移動します。
- 次のコマンドを実行します。


```
perl adminserverclientauth.pl -authType clientcert -configFile <設定ファイルの場所>
```

 ここで、<設定ファイルの場所>とはadminserver.prpファイルのフルパスを示しています。
たとえば、\$PMDB_HOME/data/adminserverclientauth.prpです。

• Windowsの場合

- %PMDB_HOME%\binフォルダに移動します。
- 次のコマンドを実行します。


```
perl adminserverclientauth.pl -authType clientcert -configFile <設定ファイルの場所>
```

 ここで、<設定ファイルの場所>とはadminserver.prpファイルのフルパスを示しています。
たとえば、%PMDB_HOME%\data\adminserverclientauth.prpです

タスク5:ユーザー名抽出の設定

SubjectDNフィールドのCNエントリがSHRによってユーザー名として抽出されることを確認してください。「[タスク5: ユーザー名抽出メカニズムの決定](#)」の説明に従って、server.xmlファイルを変更します。

タスク6:HP_PMDB_Platform_Administratorサービスの開始

HP_PMDB_Platform_Administratorサービスを開始するには、次の手順を実行します。

- [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
- [名前] フィールドにservices.mscと入力し、[ENTER] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
- 右側のペインで、HP_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、[開始] をクリックします。

Linuxの場合

```
service HP_PMDB_Platform_Administrator start
```

タスク7:証明書に基づいた認証の確認

- Webブラウザでhttp://<ホスト名>:21411と入力し、SHRの管理コンソールにログオンします。
- [デジタル証明書でログオン] をクリックします。

SAP BusinessObjects InfoViewの設定

共有シークレットをまだ作成していない場合は、「SHR管理コンソールの設定」(93ページ)の「タスク1: 共有シークレットの設定」を参照して作成してください。

注: リモートSAP BusinessObjectsシステムを使用したSHRのカスタムインストールで、<インストールディレクトリ>/PMDB/adminServer/confからSAP BusinessObjectsがインストールされているシステム上の<インストールディレクトリ>/PMDB/BOWebServer/confにSHRTrustedPrinciple.confをコピーします。

タスク1: 証明書に基づいた認証のためにInfoViewコンソールおよびOpen Documentを設定するには、次の手順を実行します。

注: SHRのカスタムインストールでは、SHR BusinessObjectsがインストールされているシステムでこのタスクを実行します。

SAP BusinessObject WebServerサービスを停止します。

• Linuxの場合

- a. /opt/HP/BSM/PMDB/BOWebServer/binに移動します。
- b. 次のコマンドを実行します。

```
./shutdown.sh
```

• Windowsの場合

- a. 管理者としてホストシステムにログオンします。
- b. **[スタート]** > **[ファイル名を指定して実行]** をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
- c. **[開く]** フィールドにservices.mscと入力し、**[ENTER]** キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
- d. **Business Object WebServer**サービスを右クリックし、**[停止]** を選択してサービスを停止します。

タスク2: HP_PMDB_Platform_Administratorサービスの停止

HP_PMDB_Platform_Administratorサービスを停止するには、次の手順を実行します。

1. **[スタート]** > **[ファイル名を指定して実行]** をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
2. **[名前]** フィールドにservices.mscと入力し、**[ENTER]** キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
3. 右側のペインで、HP_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、**[停止]** をクリックします。

Linuxの場合

```
service HP_PMDB_Platform_Administrator stop
```

タスク3:config.prpファイルの編集

%PMDB_HOME%\dataフォルダー (Windowsの場合)または\$PMDB_HOME/data (Linuxの場合)にあるconfig.prpファイルで、指定された値をフィールドに設定します。

フィールド	値
bo.protocol	https

タスク4:証明書に基づいた設定のセットアップ

注: SHRのカスタムインストールでは、SHR BusinessObjectsがインストールされているシステムでこのタスクを実行します。

\$PMDB_HOME/data (Linuxの場合) および%PMDB_HOME%\dataフォルダー (Windowsの場合)にあるB0clientauth.prpファイルの次のフィールドを、下記の説明で指定している値に設定します。

フィールド	説明
truststorepath	truststoreファイルへのフルパス
truststorepasswd	トラストストアにアクセスするためのパスワード
truststoretype	トラストストアに使用されるキーストアのタイプ
keystorepath	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
keystorepasswd	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
keystoretype	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
keyAlias	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス。
smartcard.enable	スマートカードログオンを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。
http.proxyHost	HTTPプロキシのホスト名
http.proxyPort	HTTPプロキシのポート番号
https.proxyHost	HTTPSプロキシのホスト名
https.proxyPort	HTTPSプロキシのポート番号
com.sun.net.ssl.checkRevocation	取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。
com.sun.security.enable-CRLDP	CRLの取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。

フィールド	説明
crlFile	CRLファイルパスを入力します。
ocsp.enable	OSCPに基づいた取り消しを有効にする場合はtrueに設定し、無効にする場合はfalseに設定します。
ocsp.responderURL	OSCPレスポナーURLを設定します。

注: CRLに基づいた取り消しをtrueに設定する場合はOSCPに基づいた取り消しをfalseに設定し、OSCPに基づいた取り消しをtrueに設定する場合はCRLに基づいた取り消しをfalseに設定する必要があります。

プロパティを設定した後で、次の手順を実行します。

• Linuxの場合

- a. \$PMDB_HOME/binフォルダーに移動します。
- b. 次のコマンドを実行します。

```
perl B0clientauth.pl -authType clientcert -configFile <設定ファイルの場所>
```

ここで、<設定ファイルの場所>とはB0clientauth.prpファイルのフルパスを示しています。

たとえば、\$PMDB_HOME/data/B0clientauth.prpです。

• Windowsの場合

- a. %PMDB_HOME%\binフォルダに移動します。
- b. 次のコマンドを実行します。

```
perl B0clientauth.pl -authType clientcert -configFile <設定ファイルの場所>
```

ここで、<設定ファイルの場所>とはB0clientauth.prpファイルのフルパスを示しています。たとえば、%PMDB_HOME%\data\B0clientauth.prpです。

タスク5:SAP BusinessObjects WebServerサービスの開始

注: SHRのカスタムインストールでは、SHR BusinessObjectsがインストールされているシステムでこのタスクを実行します。

• Linuxの場合

- a. /opt/HP/BSM/PMDB/BOWebServer/binフォルダーに移動します。
- b. ./startup.shコマンドを実行します。

• Windowsの場合

- a. 管理者としてホストシステムにログオンします。
- b. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックします。
- c. [名前] フィールドにservices.mscと入力し、[ENTER] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

- d. **SAP BusinessObject WebServer**サービスを右クリックし、**[開始]**を選択してサービスを開始します。

タスク6:HP_PMDB_Platform_Administratorサービスの開始

HP_PMDB_Platform_Administratorサービスを開始するには、次の手順を実行します。

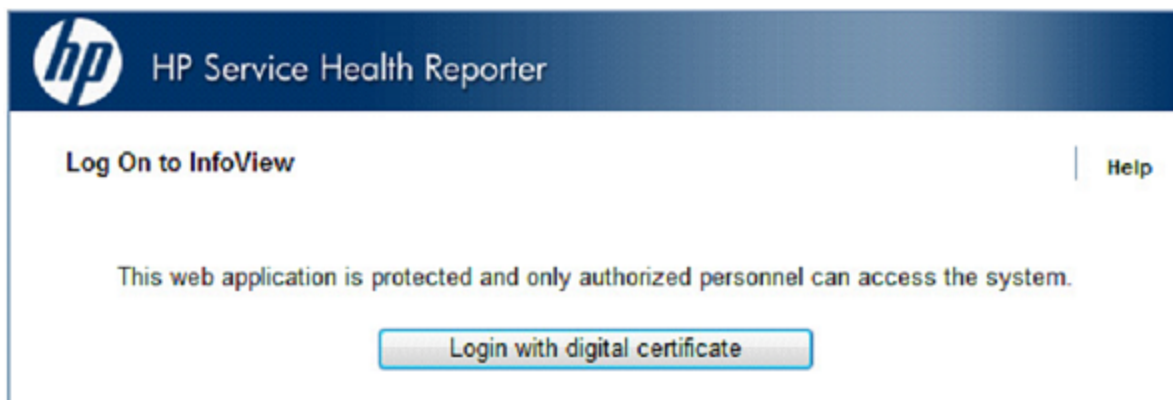
1. **[スタート]** > **[ファイル名を指定して実行]** をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
2. [名前] フィールドにservices.mscと入力し、**[ENTER]** キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
3. 右側のペインで、HP_PMDB_Platform_Administratorを右クリックし、**[開始]** をクリックします。

Linuxの場合

```
service HP_PMDB_Platform_Administrator start
```

タスク7:証明書に基づいた認証の確認

1. Webブラウザでhttp://<ホスト名>:8080/InfoViewAppを入力し、SHRのInfoViewコンソールにログオンします。
2. InfoViewコンソールにログオンします。
3. 次の画面が表示された場合、設定は完了です。



4. これで、デジタル証明書でInfoViewコンソールにログオンできるようになりました。

タスク8:LDAPまたはActive Directoryを介してユーザーを認証するためのInfoViewの有効化

1. SHRシステムから、`%PMDB_HOME%/BOWebServer/webapps/InfoViewApp/WEB-INF/web.xml`にあるweb.xmlファイルを開きます。
2. `<authentication.visible>`パラメーターの値を`<true>`に設定します。
3. ファイルを保存して閉じます。
4. Webアプリケーションサーバーを再起動します。

第10章: データベースのバックアップとリカバリ

SHRを使用して、データベースに不具合が起きた時にデータが失われないように、データベースのバックアップおよびリカバリを行うことができます。実働環境でSHRの使用を開始する前に、データベースを定期的にバックアップすることをお勧めします。

SHRのディザスタリカバリには、SHRデータベースの定期的なバックアップの計画、重要な設定ファイルおよびライセンスファイルのバックアップの作成が含まれます。SHRを使用すると、Sybase IQデータベース、SAP BusinessObjectsデータベース、SAP BusinessObjectsファイルストアのバックアップおよび復元を行うことができ、ディザスタ発生時のデータ損失を防ぐことができます。

SHRには、次のデータベースバックアップオプションがあります。

- **完全バックアップ:** 完全バックアップでは、次のSHRデータベース(データベースファイルおよびトランザクションログを含む)の完全なバックアップをとることができます。
 - Sybase IQ
 - SAP BusinessObjects (SQL Anywhere)
 - 管理データベーステーブル (PostgreSQL)

さらに、SAP BusinessObjectsファイルストアの完全なバックアップを作成できます。

- **増分バックアップ:** 増分バックアップでは、トランザクションログのバックアップを作成できません。この場合、最後の完全バックアップ以降に変更または追加されたファイルのバックアップが作成されます。

ヒント: 完全バックアップを毎週実行することをお勧めします。

重要な考慮事項

- 定期的な間隔で実行するように完全バックアップおよび増分バックアップのタスクをスケジュールする必要があります。
- データベースに不具合が起きた場合には、バックアップ場所からSHRデータベースをリカバリできます。バックアップシステムとプライマリシステムでは、ハードウェア仕様、オペレーティングシステム、SHRバージョン、ファイルパス、トポロジ、インストール後の設定、デプロイされたコンテンツパックが同じである必要があります。
- 設定ファイルの内容を変更している場合(たとえば、CAC)、プライマリのセットアップでパフォーマンスを調整し、それに伴うすべての変更をディザスタリカバリのセットアップで実行します。

注意: SHRには、静的IPアドレスが必要です。永続ライセンスを復元するには、プライマリSHRサーバーと同じIPアドレスおよび相似のホスト名を使用して、SHRディザスタリカバリ環境を

設定する必要があります。SHRの復元では、追加のライセンスは必要ありません。

WindowsでのSHRデータベースのバックアップの作成

Sybase IQデータベースの場合

カスタムインストールシナリオでは、次の手順をプライマリSHRサーバーで実行して、IQデータベースのバックアップを作成します。

ヒント: カスタムインストールのシナリオでSybase IQデータベースをバックアップするには、リモートSybase IQデータベースサーバーのパスまたは場所を指定する必要があります。

タスク1: バックアップスクリプトの編集

SHRには、完全バックアップと増分バックアップ用の2つのバックアップスクリプトがあります。バックアップを開始する前に、要件に応じてこれらのスクリプトを編集します。これらのスクリプトは、%PMDB_HOME%\scripts\Sybaseフォルダーに用意されています。スクリプトは次のとおりです。

- 完全バックアップ用: %PMDB_HOME%\scripts\Sybase\IQ_backup_full.sql
- 増分バックアップ用: %PMDB_HOME%\scripts\Sybase\IQ_backup_incr_since_full.sql

スクリプトを編集するには、次の手順を実行します。

1. %PMDB_HOME%\scripts\Sybaseフォルダーに移動します。
2. メモ帳アプリケーションでIQ_backup_full.sqlを開きます。

.sqlスクリプトの最後のパラメーターで、バックアップファイルの保存先のフォルダー (例: E:\HP-SHR\Backup) を作成します。

注: バックアップファイルの保存先のパスにエスケープシーケンス (/n、/r) を使用しないでください。例: C:/new, C:/readonly.

```
dsi_pmdb_backup 'FULL',NULL,'READWRITE_FILES_ONLY',NULL,NULL,NULL,NULL,NULL,'D','バックアップ先の場所'
```

同様に、増分バックアップの場合は、次のようにバックアップ先の場所を入力します。

```
dsi_pmdb_backup 'INCREMENTAL_SINCE_FULL',NULL,'READWRITE_FILES_ONLY',NULL,NULL,NULL,NULL,NULL,'D','バックアップ先の場所'
```

注: リモートデータベースを使用するSHRインストールでは、バックアップ先の場所はSybaseIQデータベースサーバー上の有効なパスを示します。

3. %PMDB_HOME%\DR\フォルダーから次を実行します。

- Execute_FullBackup_Script.bat (完全バックアップ)
- Execute_IncrSncFullBackup_Script.bat (増分バックアップ)

スクリプトの実行後、曜日と指定場所を接尾辞に使ったファイル名の付いたデータベースバックアップが作成されます。

このスクリプトにより、次のログファイルが生成されます。

- 完全バックアップ - %PMDB_HOME%\tmp\Execute_IQ_backup_full.out
- 増分バックアップ - %PMDB_HOME%\tmp\Execute_backup_incr_since_full.out

タスク2: コピーバックアップスクリプトの編集

SHRには、指定場所にある前回の完全バックアップのバックアップを作成するコピーバックアップスクリプトが用意されています。

コピーバックアップスクリプトを編集するには、完全バックアップ手順の開始の前に、テキストエディターで%PMDB_HOME%\DR\COPY_Backup.batスクリプトを開き、既存の完全バックアップファイルの場所およびコピーしたファイルの保存先の場所を入力します。

```
COPY "既存の完全バックアップファイルの場所" "コピー先の場所" > %PMDB_HOME%\tmp\COPY_Backup.txt 2>&1 /Y /V
```

リモートデータベースを使用したSHRインストールの場合、Sybase IQデータベースがインストールされているシステムでこのスクリプトを実行する必要があります。

スクリプトの例を次に示します。

```
COPY "E:\HP-SHR\Backup\Full*" "E:\HP-SHR\Backup\Old\" > %PMDB_HOME%\tmp\COPY_Backup.txt 2>&1 /Y /V
```

タスク3: バックアップのスケジュール

バックアップスクリプトをスケジュール設定して実行するには、Windowsタスクスケジューラを使用します。完全バックアップは週に1回実行し、増分バックアップは1日1回実行することをお勧めします。

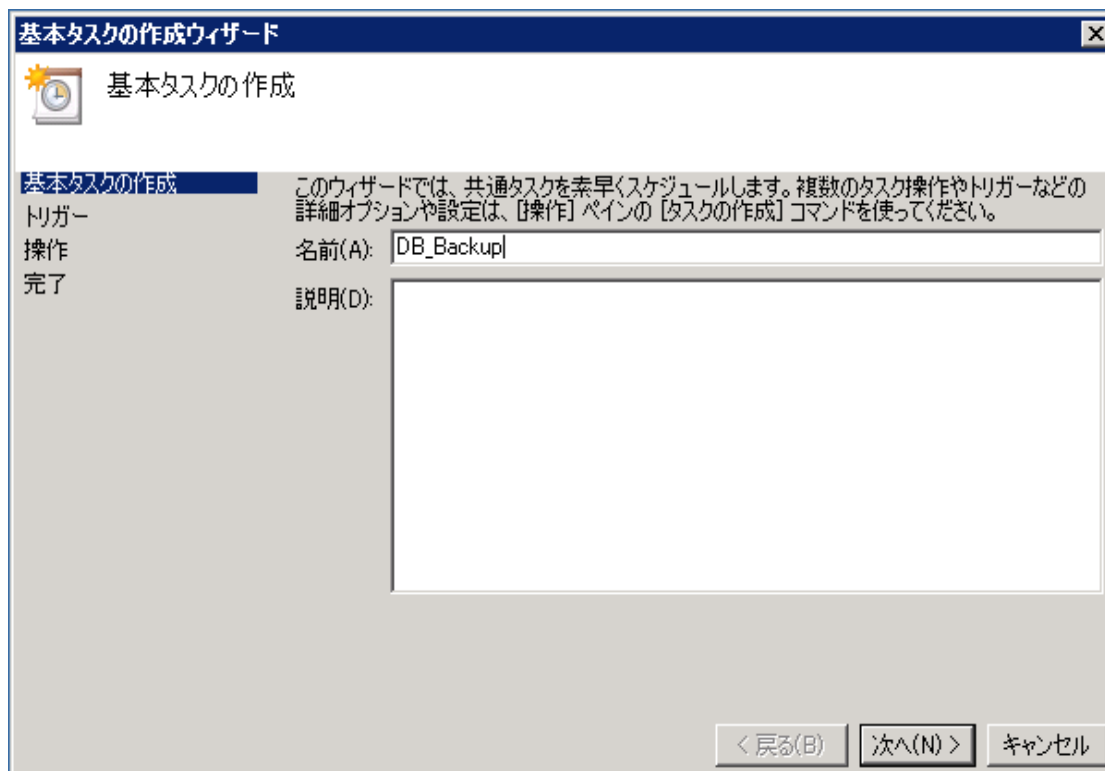
注: Sybase IQがリモートシステムにインストールされている場合は、SHRシステムでこのタスクをスケジュール設定しないでください。Sybase IQデータベースがインストールされているシステムでバックアップアクティビティをスケジュール設定します。

コピーバックアップスクリプトを実行するスケジュール

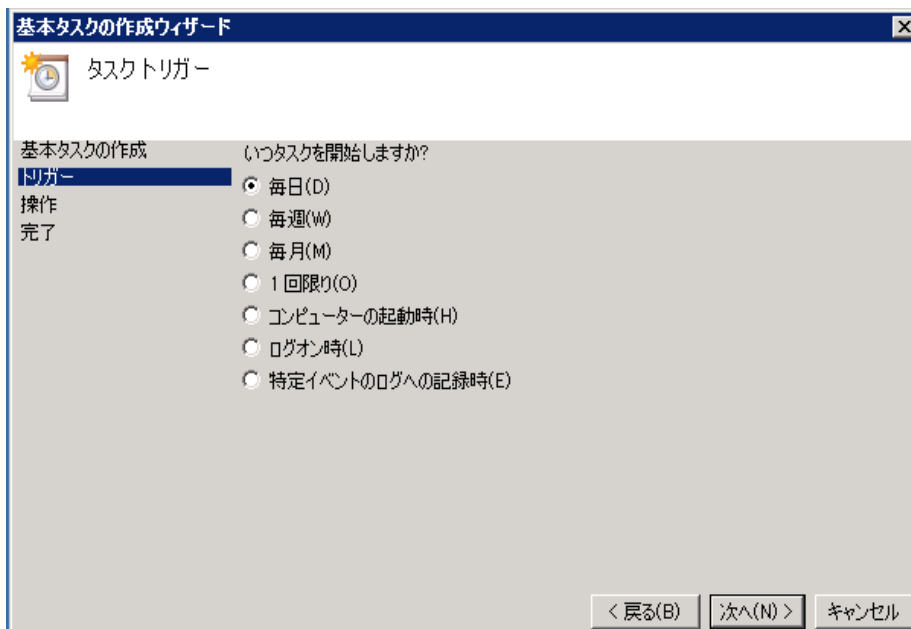
コピーバックアップスクリプトは、完全バックアップのデータベースファイルのコピーを指定場所に作成し、既存の完全バックアップが上書きされないようにします。完全バックアップスクリプトの実行の前に、その都度コピーバックアップスクリプトを実行するようにスケジュールする必要があります。

Windows 2008の場合

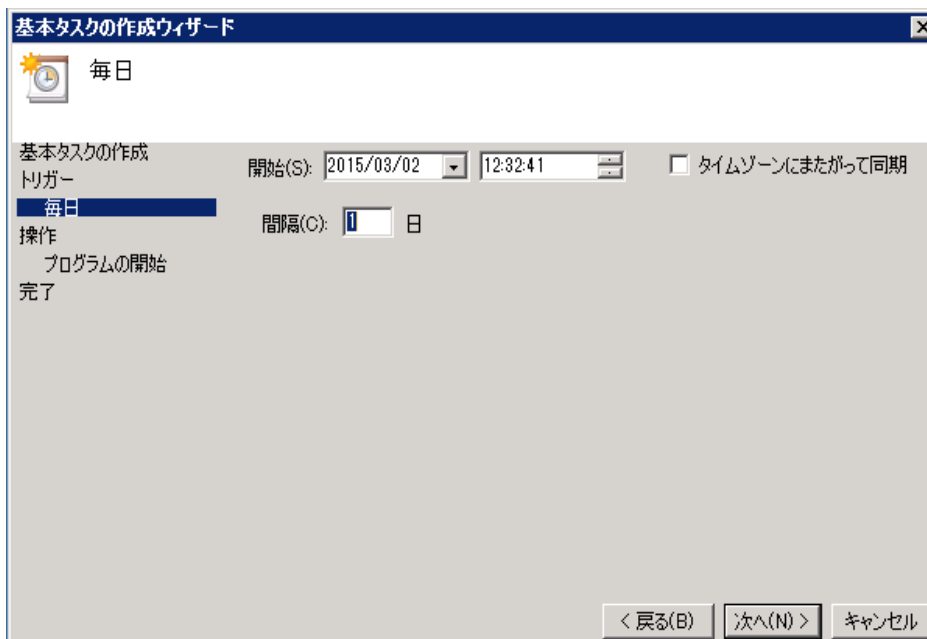
1. **[スタート] > [プログラム] > [管理ツール] > [タスクスケジューラ]**に移動します。タスクスケジューラが開きます。
2. タスクスケジューラウィンドウで、**[基本タスクの作成]**を右クリックします。基本タスクの作成ウィザードが起動します。タスクの名前を入力し、**[次へ]**をクリックします。



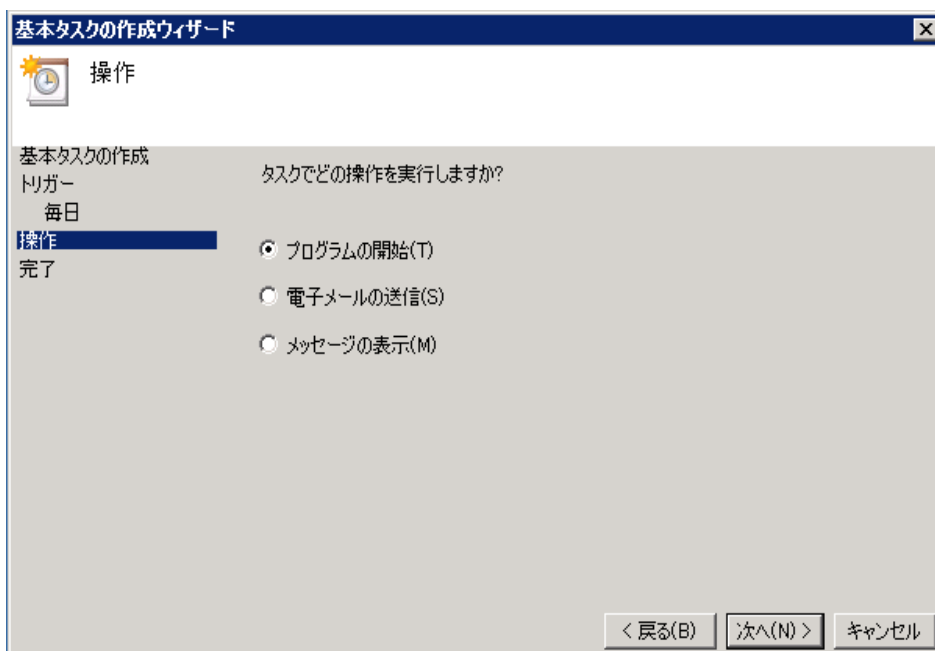
3. **[毎日]**を選択し、**[次へ]**をクリックします。



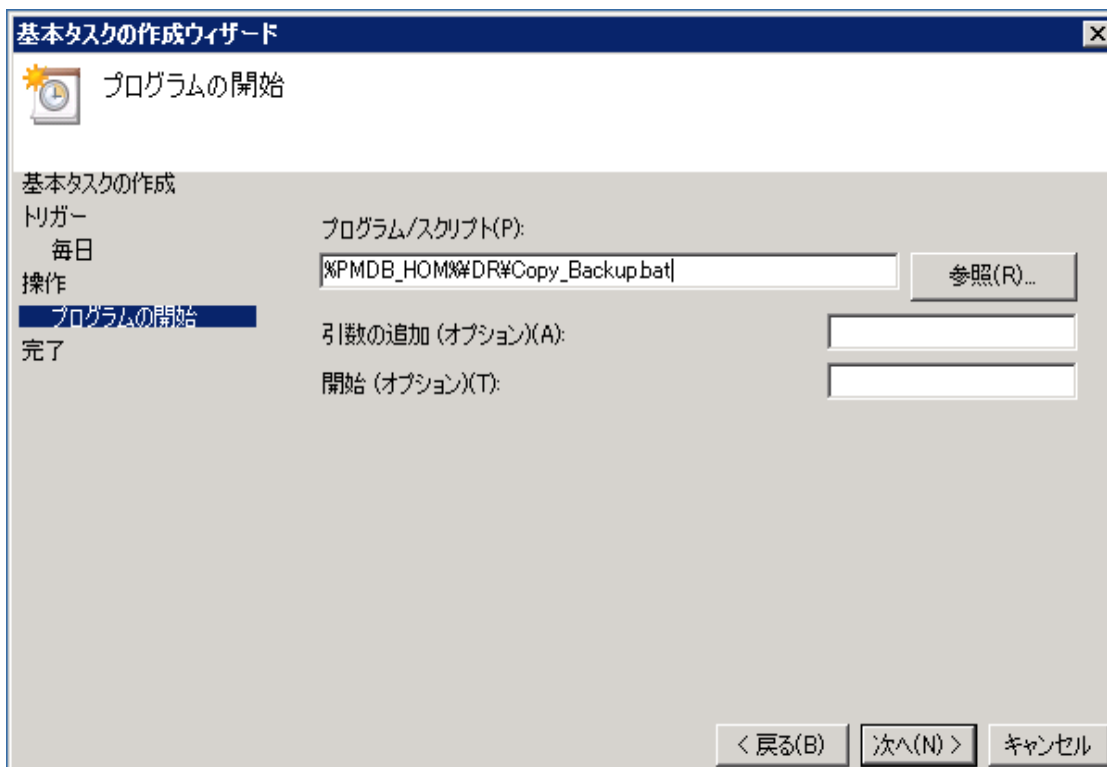
4. 開始時間を選択し、[間隔] テキストボックスに1を入力して、[次へ] をクリックします。



5. [プログラムの開始] を選択し、[次へ] をクリックします。



6. %PMDB_HOME%\DRに移動し、**Copy_Backup.bat**を選択して、[次へ]をクリックします。



7. [完了]をクリックします。タスクスケジューラウィンドウの[アクティブなタスク]で作成したタスクを確認できます。

タスク名	次の実行時刻	トリガー	場所
DB_Backup	2015/03/04 7:44:13	毎日 7:44 に起動	¥
DB_BO_Backup	2015/03/04 7:47:06	毎日 7:47 に起動	¥
DB_Table_Backup	2015/03/04 7:47:42	毎日 7:47 に起動	¥
RegIdleBackup	2015/03/05 0:14:36	10 日に 1 回、0:00 に起動	¥Microsoft¥Windows¥Re

最終更新日時 2015/03/02 11:59:26

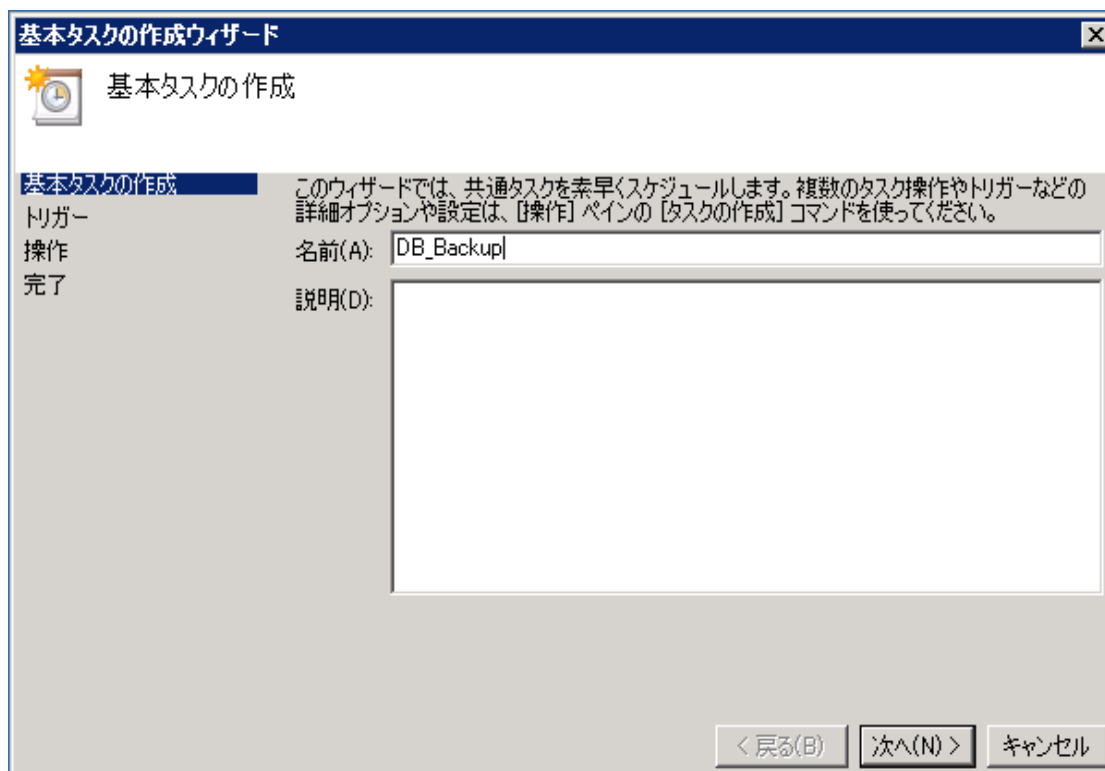
最新の情報に更新

完全バックアップスクリプトを実行するスケジュール

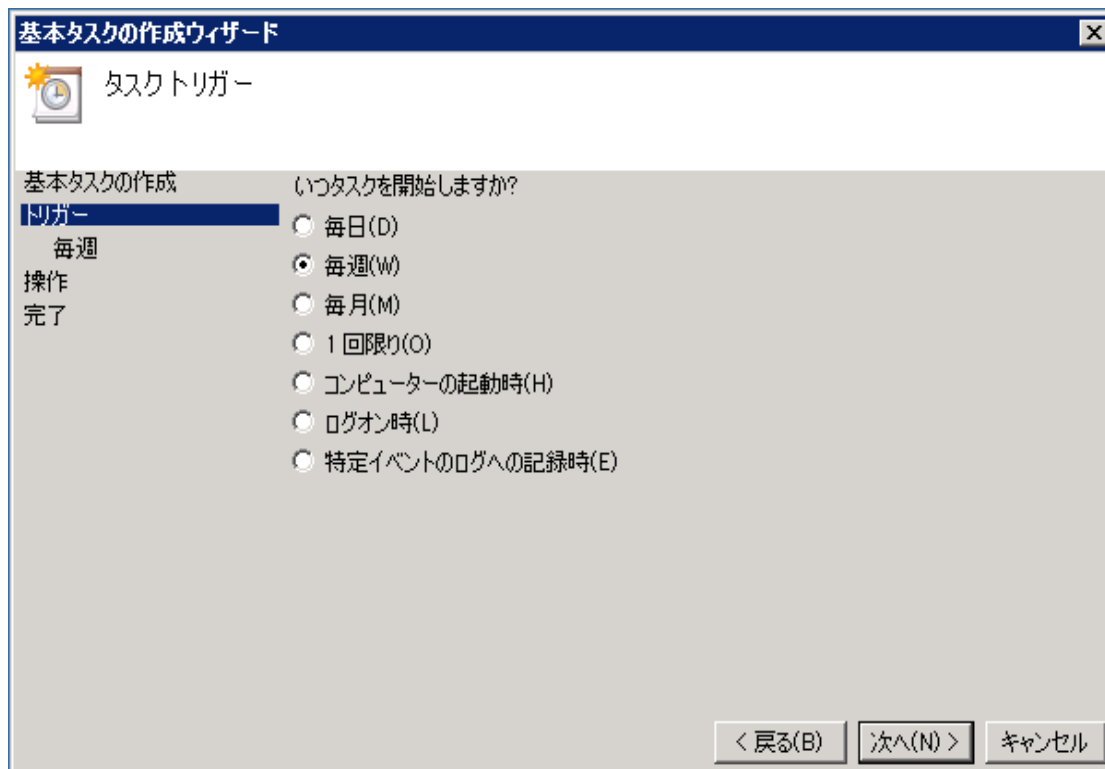
コピーバックアップスクリプトの後に、完全バックアップスクリプトを実行するようにスケジュールする必要があります。

Windows 2008の場合

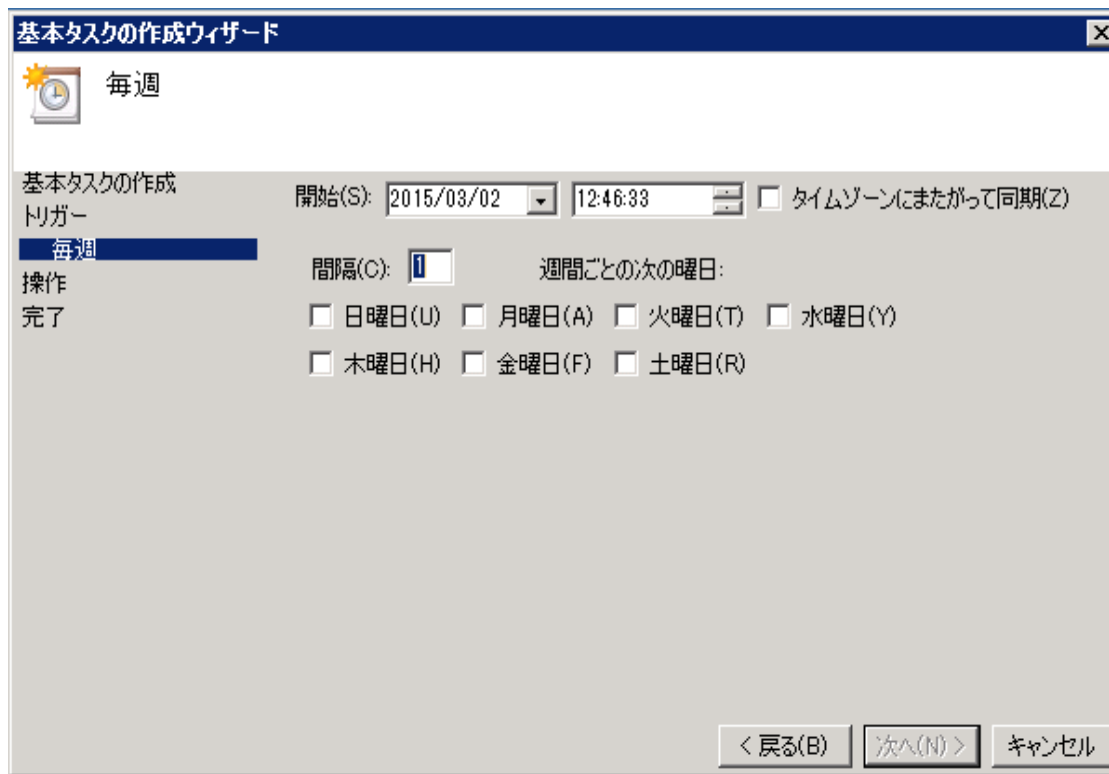
1. **[スタート] > [プログラム] > [管理ツール] > [タスクスケジューラ]**に移動します。タスクスケジューラが開きます。
2. タスクスケジューラウィンドウで、**[基本タスクの作成]**を右クリックします。基本タスクの作成ウィザードが起動します。タスクの名前を入力し、**[次へ]**をクリックします。



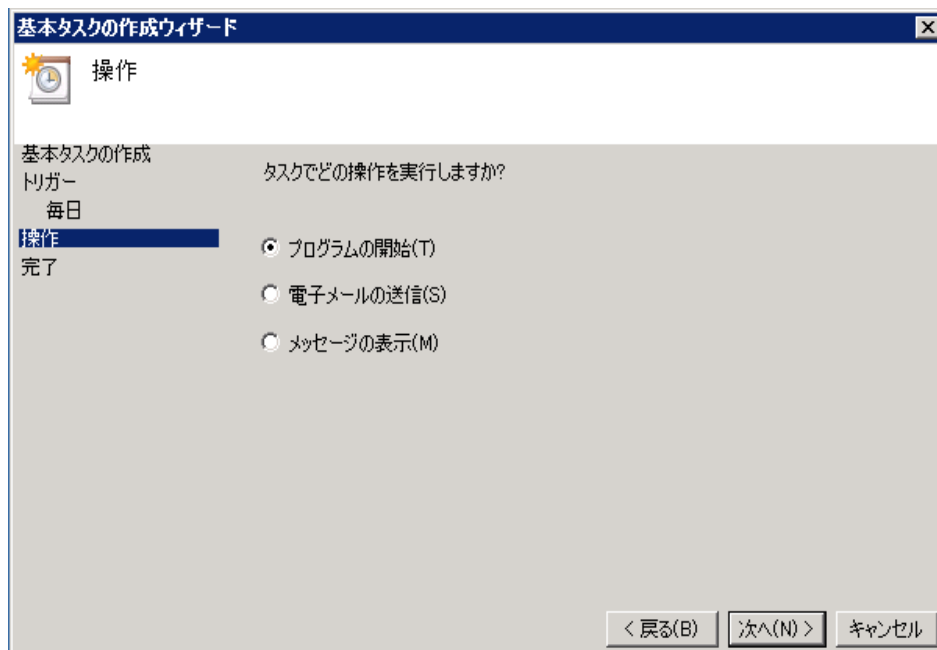
3. [毎週] を選択し、[次へ] をクリックします。



4. 開始時間、曜日を選択し、[間隔] テキストボックスに1を入力して、[次へ] をクリックします。

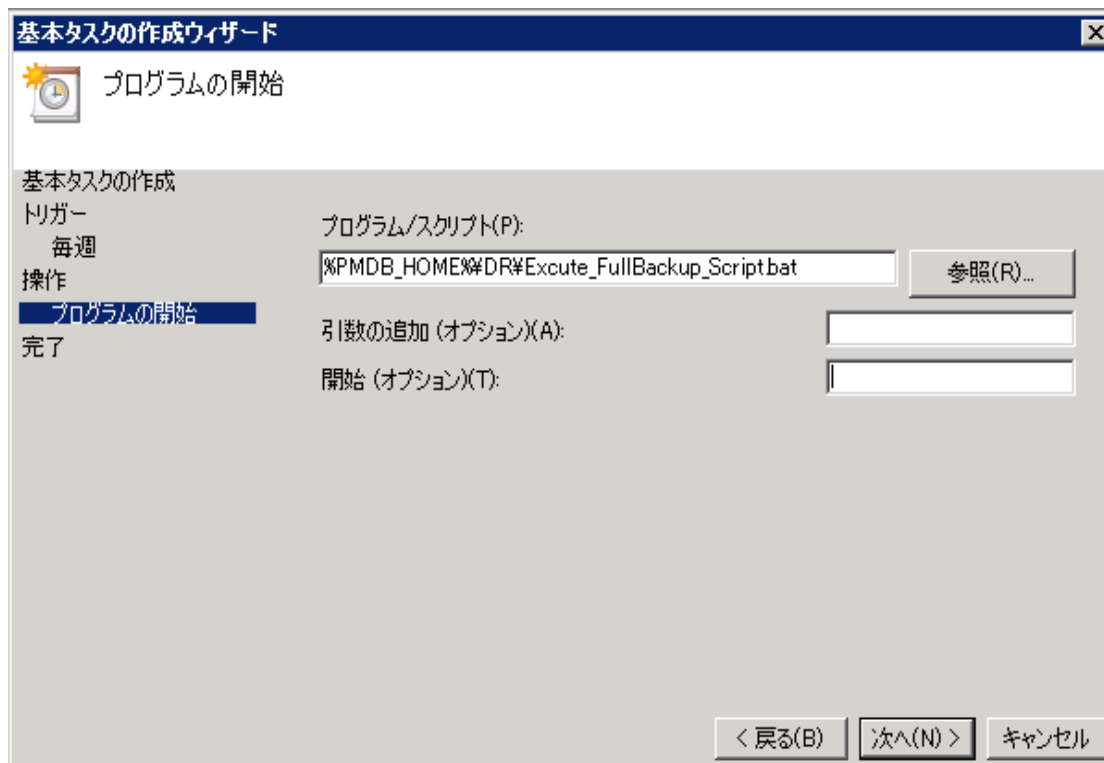


5. [プログラムの開始] を選択し、[次へ] をクリックします。



6. %PMDB_HOME%\DRに移動し、**Execute_FullBackup_Script.bat**を選択して、[次へ] をクリックし

ます。



7. **[完了]** をクリックします。タスクスケジューラウィンドウの **[アクティブなタスク]** で作成したタスクを確認できます。

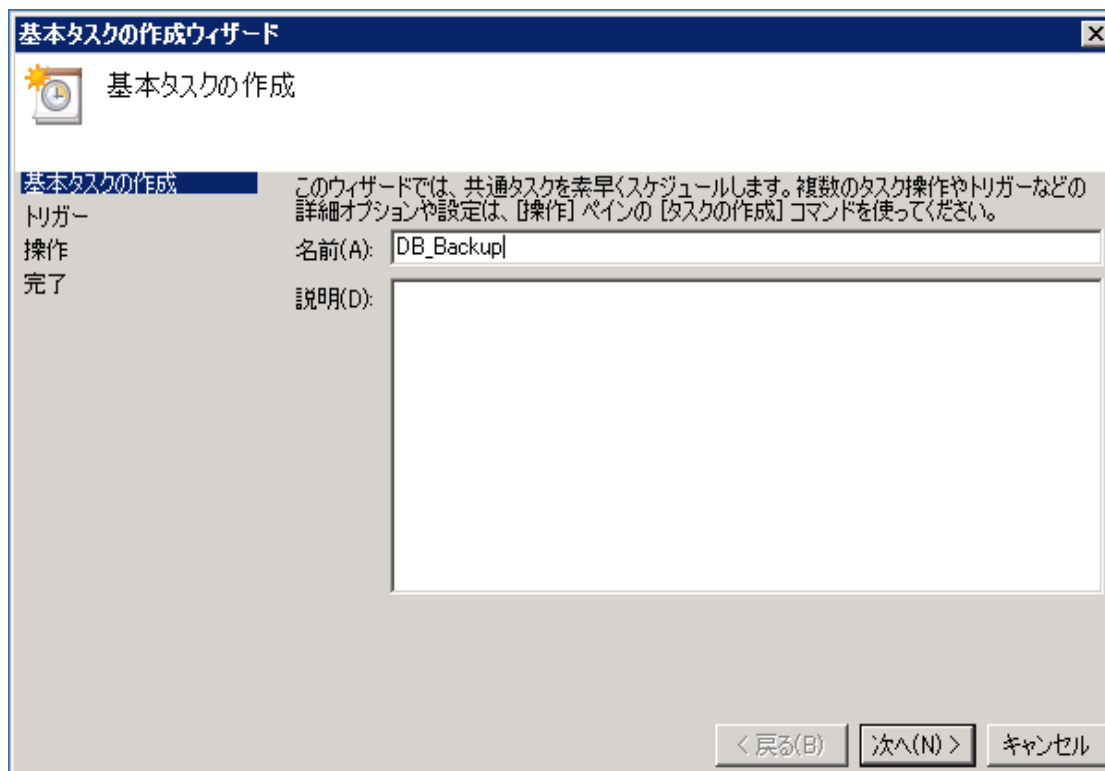


増分バックアップスクリプトを実行するスケジュール

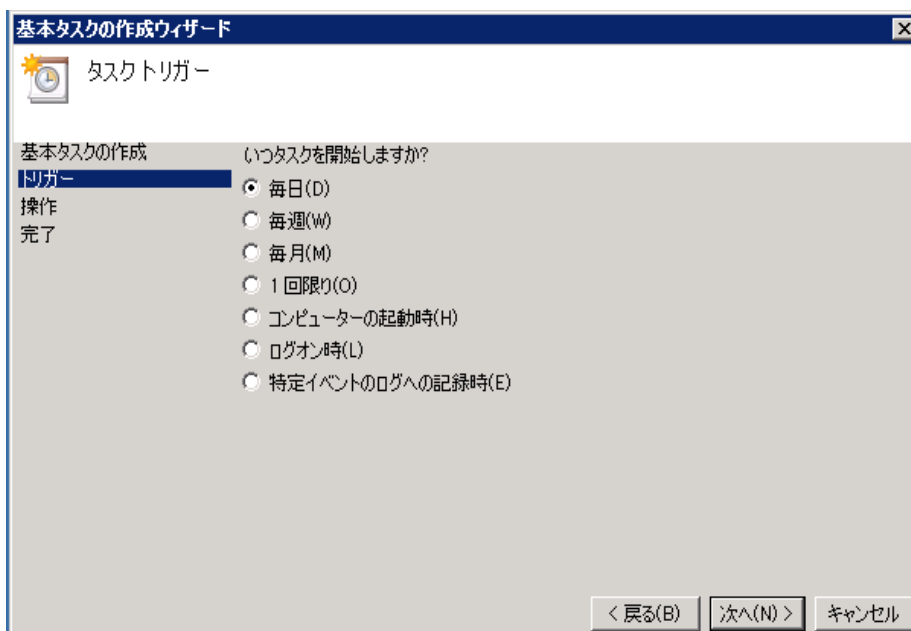
増分バックアップスクリプトは、毎日1回実行するようにスケジュールする必要があります。

Windows 2008の場合

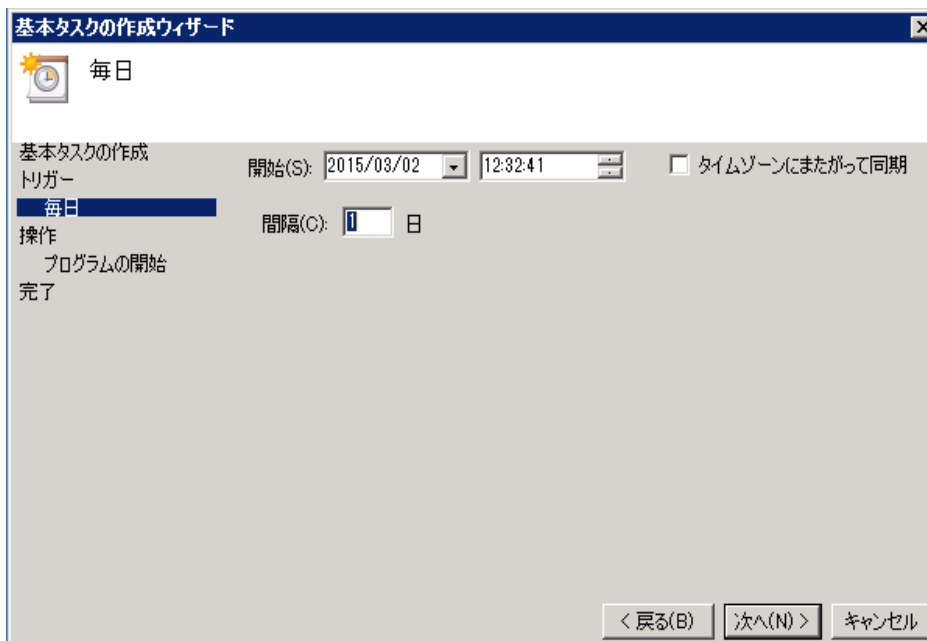
1. **[スタート] > [プログラム] > [管理ツール] > [タスクスケジューラ]**に移動します。タスクスケジューラが開きます。
2. タスクスケジューラウィンドウで、**[基本タスクの作成]**を右クリックします。基本タスクの作成ウィザードが起動します。タスクの名前を入力し、**[次へ]**をクリックします。



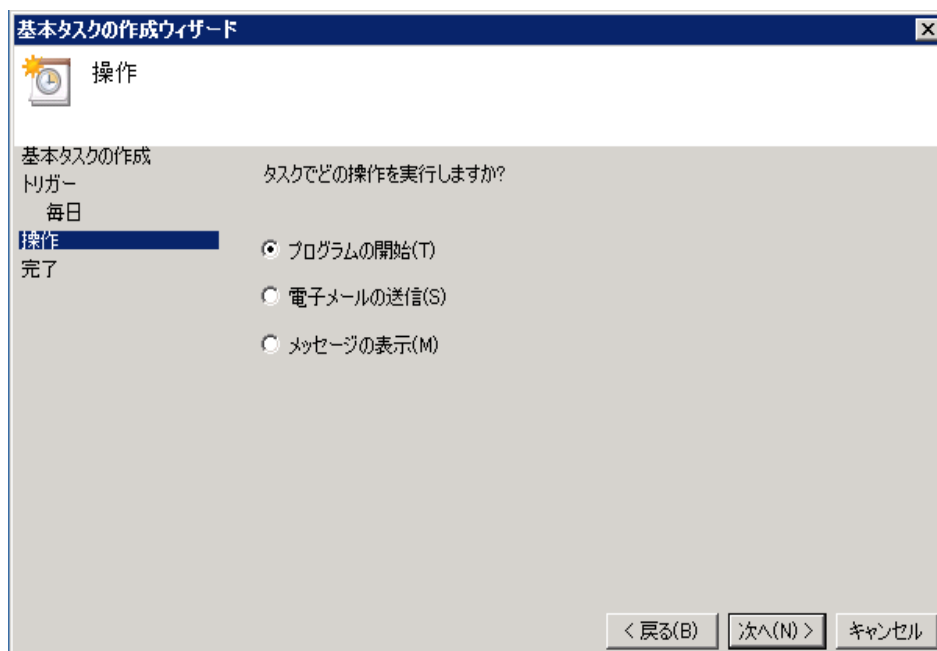
3. **[毎日]**を選択し、**[次へ]**をクリックします。



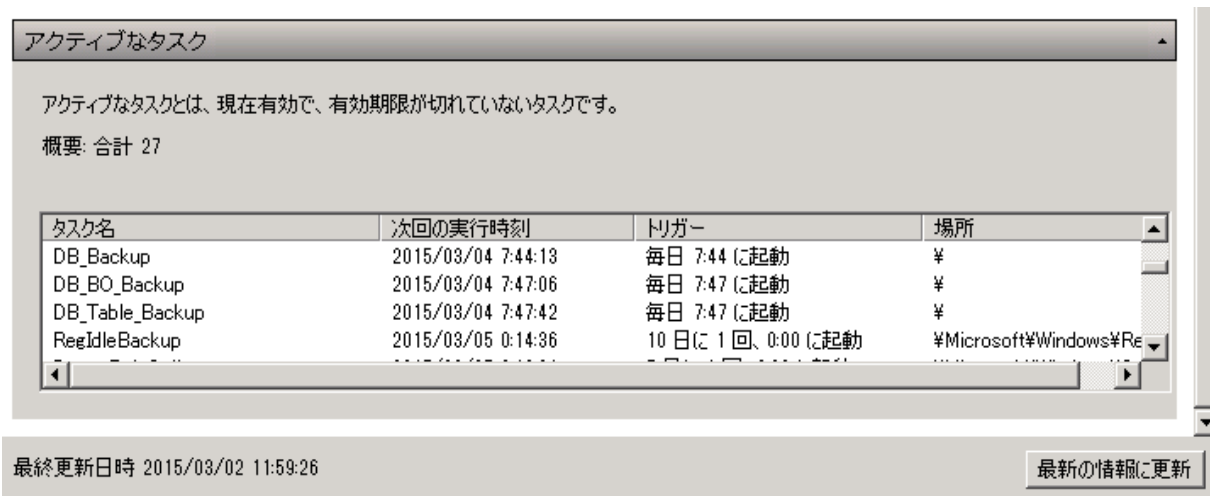
4. 開始時間を選択し、[間隔] テキストボックスに1を入力して、[次へ] をクリックします。



5. [プログラムの開始] を選択し、[次へ] をクリックします。



6. %PMDB_HOME%\DRに移動し、**Execute_IncSncFullBackup_Script.bat**を選択して、[次へ]をクリックします。
7. [完了]をクリックします。タスクスケジューラウィンドウの[アクティブなタスク]で作成したタスクを確認できます。



SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合

カスタムインストールのシナリオでは、SAP BusinessObjectsがインストールされているシステムにログインし、次の手順を実行してバックアップを行います。

%PMDB_HOME%\DR\Execute_BO_FullBackup.bat スクリプトを使用すると、SAP BusinessObjects データベースおよびファイルストアのバックアップを作成できます。このスクリプトでは、ライセンス、設定、CAC およびカスタムファイルのバックアップも作成されます。

1. %PMDB_HOME%\DR フォルダーに移動します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
Execute_BO_FullBackup.bat <バックアップのパス> <SAP_BusinessObjectsがインストールされたドライブ>
```

<バックアップのパス>はバックアップファイルおよびデータの保存先の場所です。

<SAP_BusinessObjectsがインストールされたドライブ>はSAP BusinessObjectsがインストールされたドライブです。

例:%PMDB_HOME%\DR> Execute_BO_FullBackup.bat C:\BO_backup C:\.

BusinessObjects データベースおよびファイルストアのバックアップファイルの例を次に示します。





#SHRDisaster_Backup#Full_SQLAnWr_BackUP.Wed





名前 ▲	更新日時
BOE120.db	2015/02/20
BOE120.log	2015/02/20
BOE120_AUDIT.db	2015/02/20
BOE120_AUDIT.log	2015/02/20
dbbackup_log.log	2015/02/20

#SHRDisaster_BackupFull_BOFileStore_BackUP.Web#BO#Input

名前 ▲	更新日時
a_000	2015/03/02
a_001	2015/03/02
a_002	2015/03/02
a_003	2015/03/02
a_004	2015/03/02
a_006	2015/03/02

ライセンス、設定、CAC、カスタムファイルのバックアップファイルの例を次に示します。

ローカル ディスク (C:) ▾ SHRDisaster_Backup ▾		
共有 ▾ 新しいフォルダー		
名前 ▲	更新日時	種類
 Full_BOFileStore_BackUP.Tuesday	2015/03/03 13:39	ファイル フォルダー
 Full_CAC_BackUP.Tuesday	2015/03/03 13:33	ファイル フォルダー
 Full_Configuration_BackUP.Tuesday	2015/03/03 13:33	ファイル フォルダー
 Full_SQLAnWr_BackUP.Tuesday	2015/03/03 13:34	ファイル フォルダー

ローカル ディスク (C:) ▾ SHRDisaster_Backup ▾		
共有 ▾ 新しいフォルダー		
名前 ▲	更新日時	種類
 Full_BOFileStore_BackUP.Tuesday	2015/03/03 13:39	ファイル フォルダー
 Full_CAC_BackUP.Tuesday	2015/03/03 13:33	ファイル フォルダー
 Full_Configuration_BackUP.Tuesday	2015/03/03 13:33	ファイル フォルダー
 Full_SQLAnWr_BackUP.Tuesday	2015/03/03 13:34	ファイル フォルダー

スクリプトによって、次のログファイルが生成されます。

- BO_Backup_log.log - <boバックアップのパス>\SHRDisaster_Backup\Full_BOFileStore_BackUP.<バックアップが作成された曜日>にあります。

例:<boバックアップのパス>\SHRDisaster_Backup\Full_BOFileStore_BackUP.Wednesday

- dbbackup_log.log - <boバックアップのパス>\SHRDisaster_Backup\Full_SQLAnWr_BackUP.<バックアップが作成された曜日>にあります。

例:<boバックアップのパス>\SHRDisaster_Backup\Full_SQLAnWr_BackUP.Wednesday

- Config_backup_log.log - <boバックアップのパス>\SHRDisaster_Backup\Full_Configuration_BackUP.<バックアップが作成された曜日>にあるライセンスおよび設定ファイルのログファイル。

例:<boバックアップのパス>\SHRDisaster_Backup\Full_Configuration_BackUP.Tuesday

- customgroup_backup_log.log - <boバックアップのパス>\SHRDisaster_Backup\Full_Configuration_BackUP.<バックアップが作成された曜日>にあるすべてのカスタムグループXMLファイルのログファイル

例:<boバックアップのパス>\SHRDisaster_Backup\Full_Configuration_BackUP.Tuesday

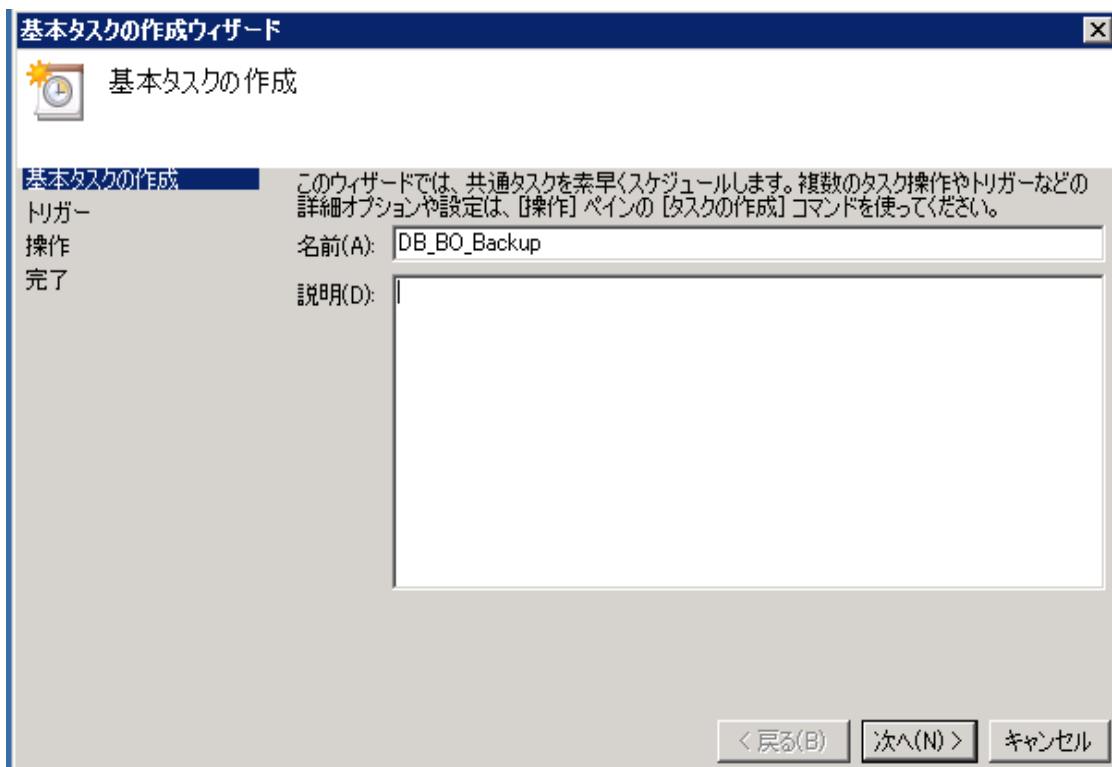
- CAC_backup_log.log - <boバックアップのパス>\SHRDisaster_Backup\Full_CAC_BackUP.<バックアップが作成された曜日>にあるCACファイルのログファイル

例:<boバックアップのパス>\SHRDisaster_Backup\Full_CAC_BackUP.Tuesday

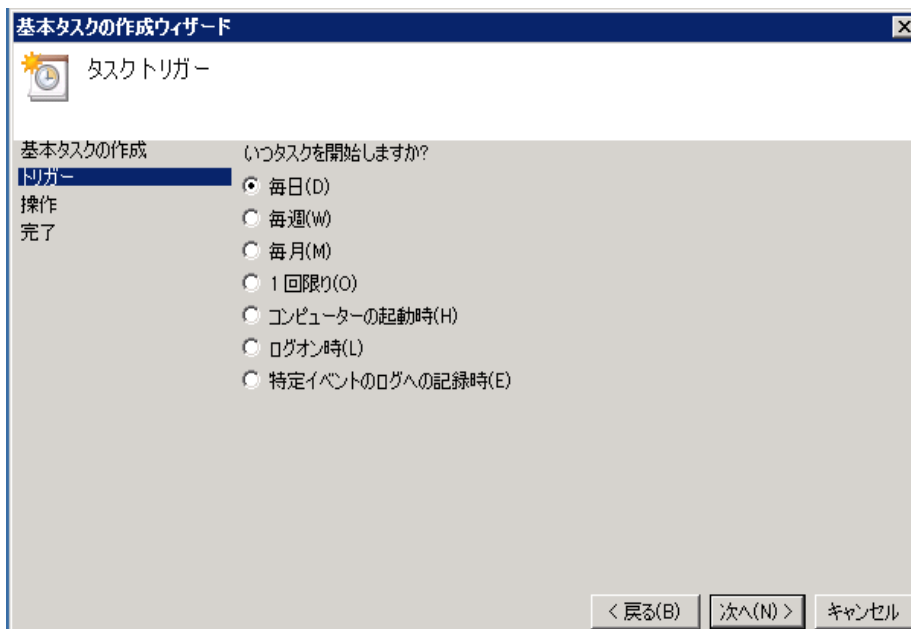
バックアップをスケジュール設定するには、次の手順を実行します。

Windows 2008の場合

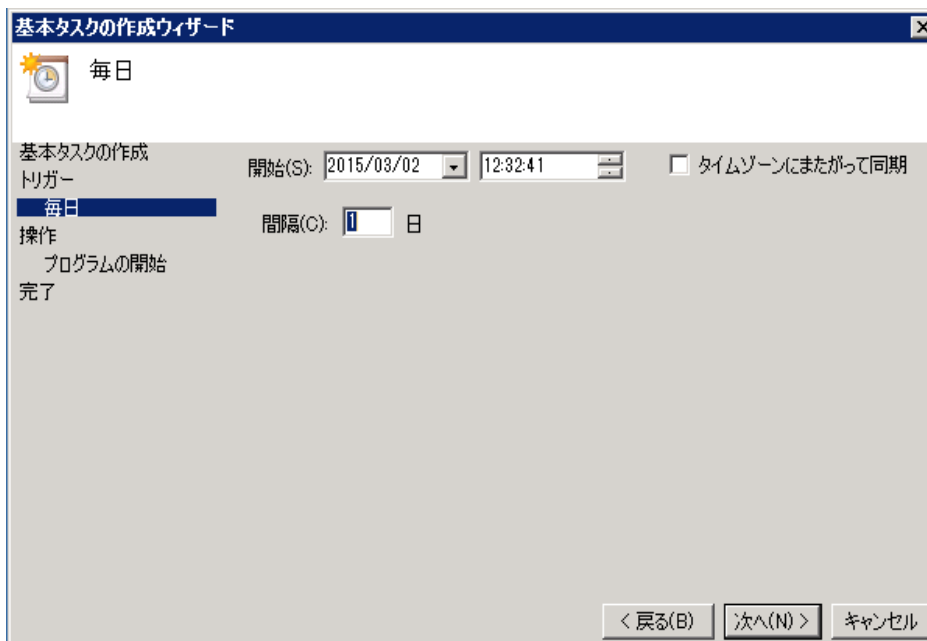
1. **[スタート] > [プログラム] > [管理ツール] > [タスクスケジューラ]**に移動します。タスクスケジューラが開きます。
2. タスクスケジューラウィンドウで、**[基本タスクの作成]**を右クリックします。基本タスクの作成ウィザードが起動します。タスクの名前を入力し、**[次へ]**をクリックします。



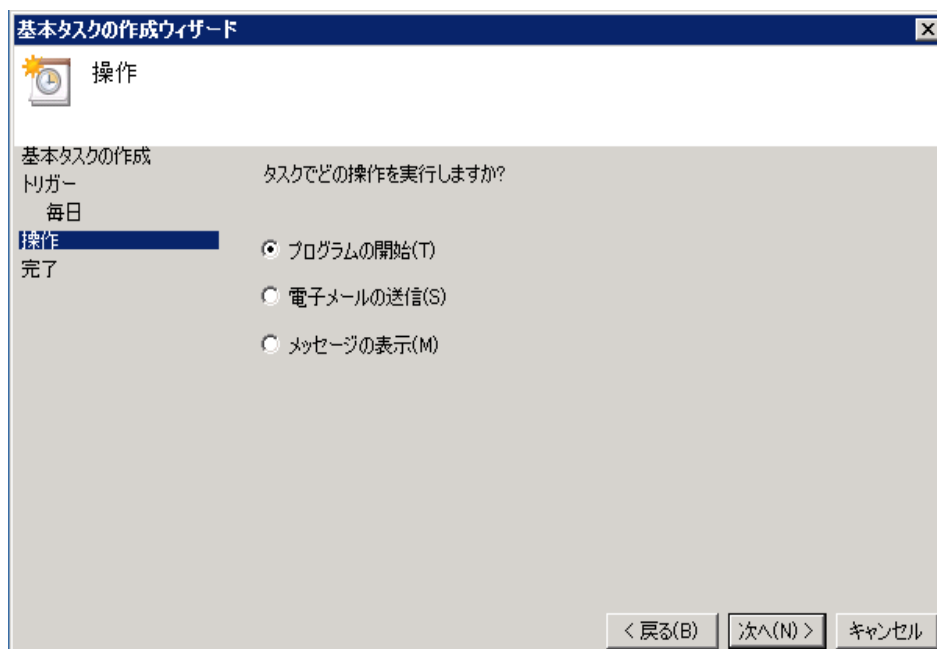
3. **[毎日]**を選択し、**[次へ]**をクリックします。



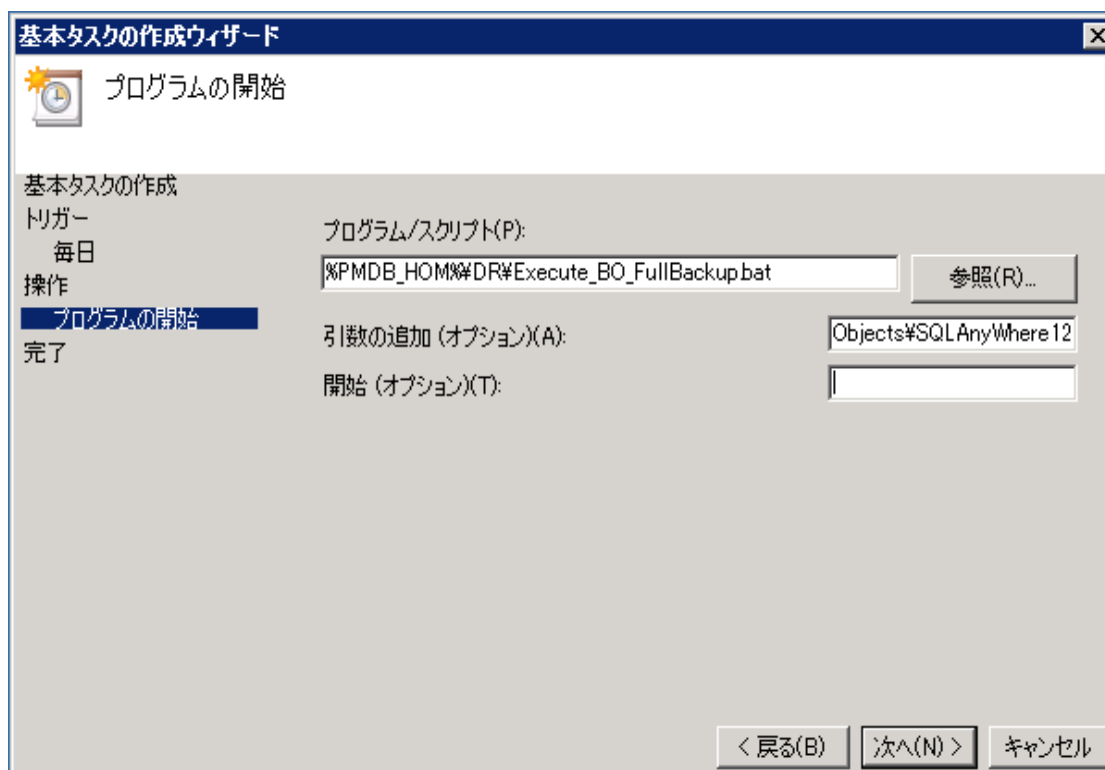
4. 開始時間を選択し、[間隔] テキストボックスに1を入力して、[次へ] をクリックします。



5. [プログラムの開始] を選択し、[次へ] をクリックします。



6. %PMDB_HOME%\DRに移動し、**Execute_BO_FullBackup.bat**を選択して、[次へ]をクリックします。



7. [引数の追加] フィールドで、次の詳細を入力します。

<バックアップのパス> <SAP_BusinessObjectsがインストールされたドライブ>

注: 2つの項目の間にスペースを含めます。

このインスタンスで、

- <バックアップのパス>はバックアップファイルおよびデータの保存先の場所です。
- <SAP_BusinessObjectsがインストールされたドライブ>はSAP BusinessObjectsがインストールされたドライブです。デフォルトは、C:\です。SHRインストール時にSAP BusinessObjects用に別のドライブを選択した場合は、そのドライブを入力します。

例:C:\BO_backup C:\

注: カスタムフォルダーにファイルをバックアップするには、それを実行する前にフォルダーを作成する必要があります。

8. **[完了]** をクリックします。タスクスケジューラウィンドウの**[アクティブなタスク]** で作成したタスクを確認できます。



管理データベーステーブルの場合

カスタムインストールシナリオでは、プライマリSHRサーバーで次の手順を実行して、管理データベースのバックアップを作成します。

タスク1:バックアップスクリプトの編集

SHRには、管理データベーステーブルをバックアップするための%PMDB_HOME%\scripts\MgmtDB\Postgres\backup_aggregate_control.sqlおよび%PMDB_HOME%\DR\DB_tables_backup.batスクリプトが用意されています。バックアップの場所を指定するには、backup_aggregate_control.sqlスクリプトを手動で編集する必要があります。このスクリプトを編集するには、次の手順を実行します。

1. %PMDB_HOME%\scripts\MgmtDB\Postgresフォルダーに移動します。
2. テキストエディターでbackup_aggregate_control.sqlを開きます。
3. 次の行に移動します。

```
\copy dwabc.AGGREGATE_CONTROL TO 'E:\\bo_backup\\backup_AGGREGATE_CONTROL.dat'
```

4. バックアップするデータが存在するディレクトリにE:\\bo_backupを置き換えます。

ヒント: ディレクトリパスを指定するときは、\の代わりに\\を入力します。

5. ファイルを保存します。
6. %PMDB_HOME%\DRからDB_tables_backup.batを実行します。

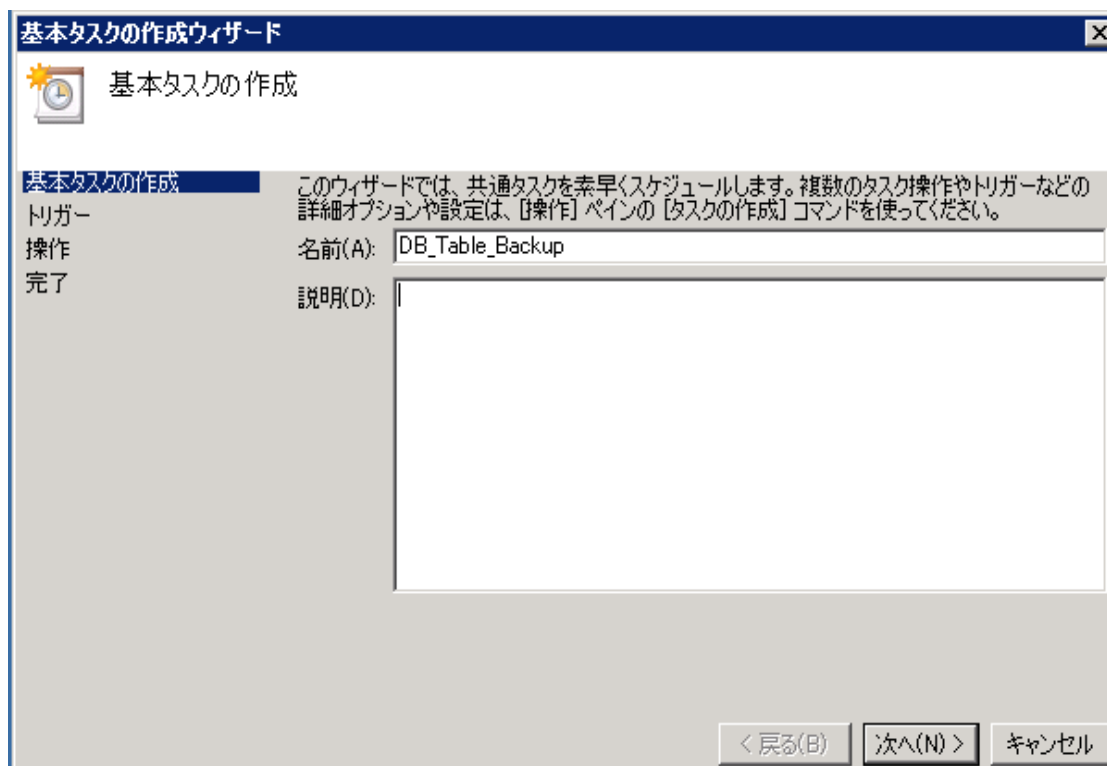
データベースバックアップをbackup.AGGREGATE_CONTROL.datで確認できます。

タスク2:バックアップスクリプト実行のスケジュール

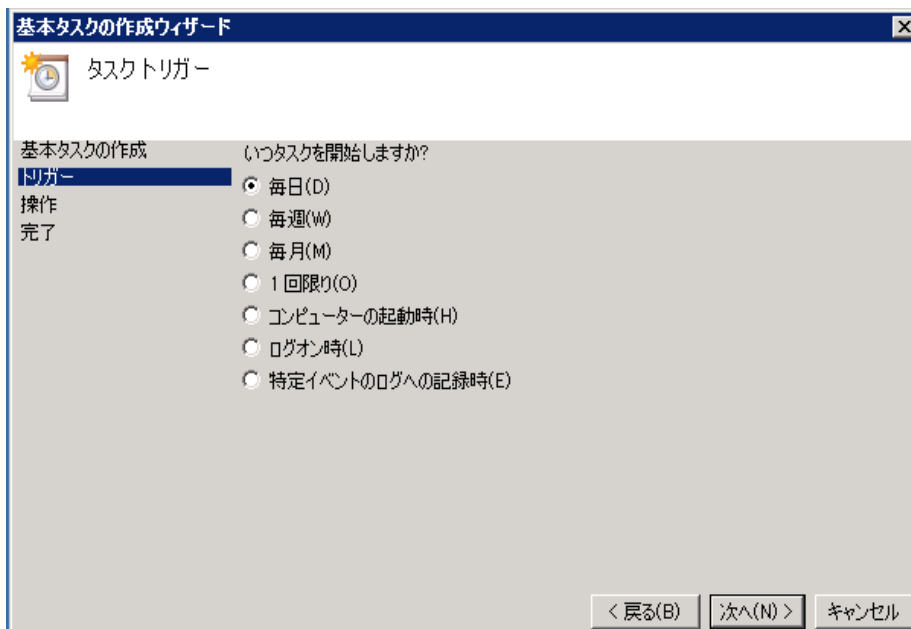
バックアップスクリプトは、毎日1回実行するようにスケジュールする必要があります。

Windows 2008の場合

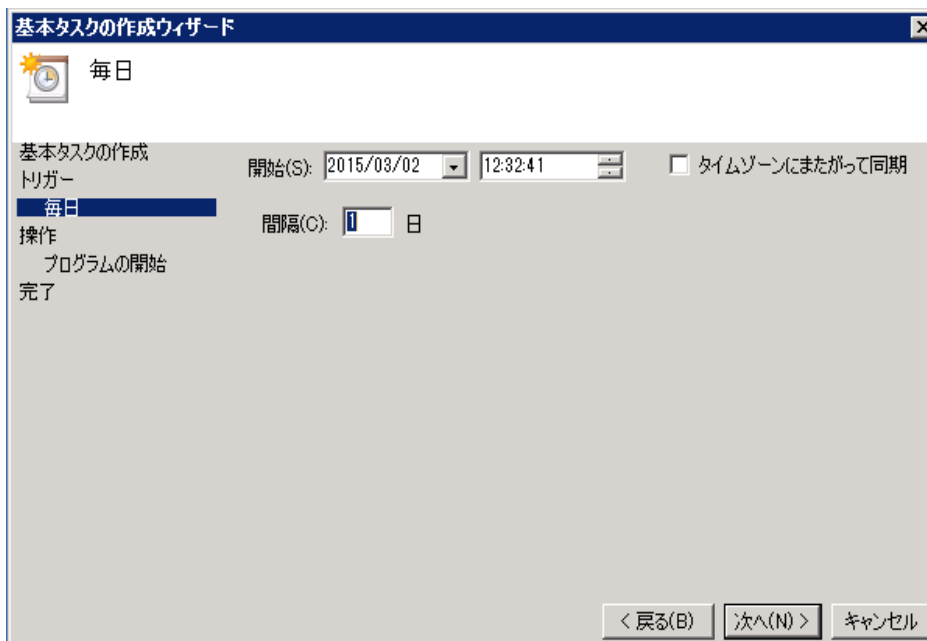
1. [スタート] > [プログラム] > [管理ツール] > [タスクスケジューラ]に移動します。タスクスケジューラが開きます。
2. タスクスケジューラウィンドウで、[基本タスクの作成]を右クリックします。基本タスクの作成ウィザードが起動します。タスクの名前を入力し、[次へ]をクリックします。



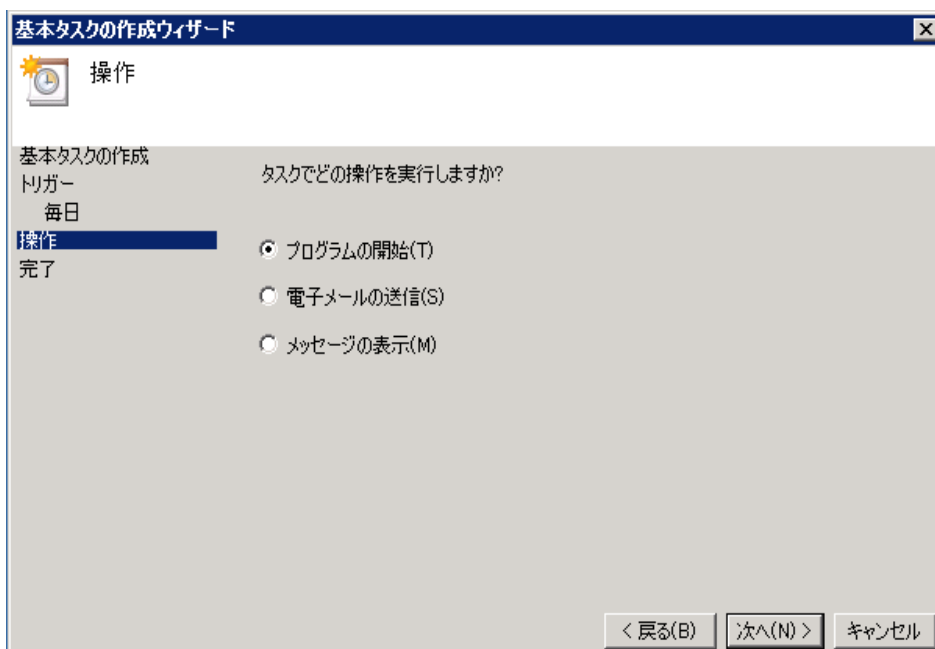
3. [毎日]を選択し、[次へ]をクリックします。



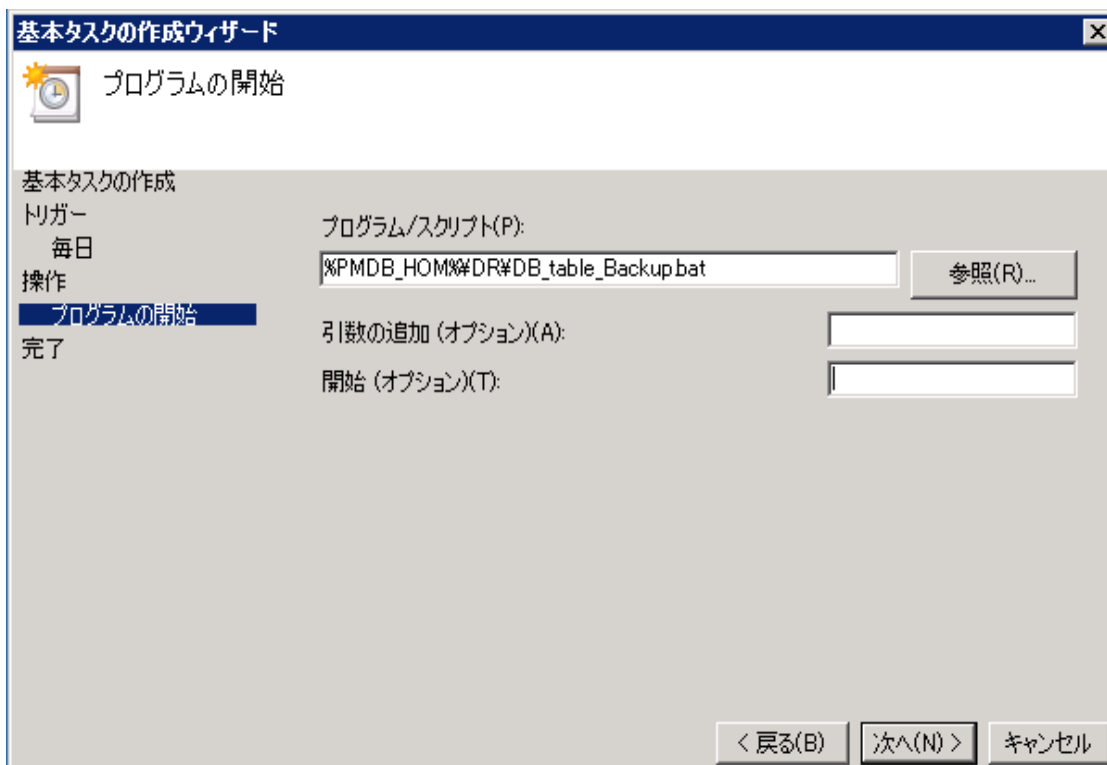
4. 開始時間を選択し、[間隔] フィールドに1を入力して、[次へ] をクリックします。



5. [プログラムの開始] を選択し、[次へ] をクリックします。



6. %PMDB_HOME%\DRに移動し、**DB_tables_Backup.bat**を選択して、**[次へ]**をクリックします。



7. **[完了]**をクリックします。タスクスケジューラウィンドウの**[アクティブなタスク]**で作成したタスクを確認できます。



LinuxでのSHRデータベースのバックアップの作成

Sybase IQデータベースの場合

カスタムインストールで、次の手順をプライマリSHRサーバーで実行して、IQデータベースのバックアップを作成します。

ヒント: リモートSybase IQデータベースのパスまたは場所を指定する必要があります。

タスク1: バックアップスクリプトの編集

SHRには、完全バックアップと増分バックアップ用の2つのバックアップスクリプトがあります。バックアップを開始する前に、要件に応じてこれらのスクリプトを編集します。

これらのスクリプトは、\$PMDB_HOME/scripts/Sybaseディレクトリに用意されています。

スクリプトは次のとおりです。

- 完全バックアップ用: IQ_backup_full.sql
- 増分バックアップ用: IQ_backup_incr_since_full.sql

スクリプトを編集するには、次の手順を実行します。

1. \$PMDB_HOME/scripts/Sybaseディレクトリに移動します。
2. テキストエディターアプリケーションでIQ_backup_full.sqlを開きます。
3. .sqlスクリプトの最後のパラメーターで、バックアップファイルの保存先のディレクトリを作成します。つまり、バックアップ先の場所を実際の場所に置き換えます。

以下に例を示します。

デフォルト文字列	変更後
dsi_pmdb_backup 'FULL',NULL,'READWRITE_FILES_ ONLY',NULL,NULL,NULL,NULL,'D','バックアップ先の場所'	dsi_pmdb_backup 'FULL',NULL,'READWRITE_FILES_ ONLY',NULL,NULL,NULL,NULL,'D','/backup'

4. 同様に、増分バックアップスクリプト (IQ_backup_incr_since_full.sql) の場合は、次のようにバックアップ先の場所を入力します。

以下に例を示します。

デフォルト文字列	変更後
dsi_pmdb_backup 'INCREMENTAL_SINCE_ FULL',NULL,'READWRITE_FILES_ ONLY',NULL,NULL,NULL,NULL,'D','バックアップ先の場所'	dsi_pmdb_backup 'INCREMENTAL_SINCE_FULL',NULL,'READWRITE_FILES_ ONLY',NULL,NULL,NULL,NULL,'D','/backup'

ヒント: リモートSybase IQセットアップの場合は、バックアップ先の場所パラメーターにリモートデータベースサーバーのパスを指定する必要があります。

次のシェルスクリプトを使用して、.sqlスクリプトを実行します。

- Execute_FullBackup_Script.sh (完全バックアップ)
- Execute_IncSncFullBackup_Script.sh (増分バックアップ)

これらのシェルスクリプトは、\$PMDB_HOME/DRディレクトリに用意されています。

これらのスクリプトの実行後、曜日と指定場所を接尾辞に使ったファイル名の付いたデータベースバックアップが作成されます。

例:

Full backup

Full.tuesday.1 Full.tuesday.2

Incr backup

Incr_sncfull.tuesday.1

このスクリプトにより、次のログファイルが生成されます。

- 完全バックアップ - \$PMDB_HOME/tmp/Execute_IQ_backup_full.out
- 増分バックアップ - \$PMDB_HOME/tmp/Execute_backup_incr_since_full.out

タスク2: コピースクリプトの編集

SHRには、指定したディレクトリにデータベースファイルバックアップをコピーするためのスクリプトが用意されています。

このコピースクリプトを編集するには、データベースファイルのバックアップが存在する場所および完全バックアップ手順を開始する前にコピーファイルのコピー先の場所を入力します。このスクリプトは、Sybase IQデータベースがインストールされているシステムで実行する必要があります。

```
cp "既存の完全バックアップファイルの場所" "コピー先の場所" > $PMDB_HOME/tmp/Copy_Backup.txt  
2>&1
```

既存の完全バックアップファイルの場所およびコピー先の場所を実際の場所の詳細に置き換えます。

スクリプトの例:

```
cp "/disk1/HP-SHR/Backup/Full*" "/disk1/HP-SHR/Backup/Old/" > $PMDB_HOME/tmp/Copy_Backup.txt  
2>&1
```

タスク3: バックアップのスケジュール

データベースのバックアップを定期的に行うには、LinuxのCronJobsスケジューラーを使用して、バックアップスクリプトを実行するようにスケジュールする必要があります。完全バックアップは週に1回実行し、増分バックアップは1日1回実行することをお勧めします。

コピーバックアップスクリプトは、完全バックアップのデータベースファイルのコピーを指定場所に作成し、既存のバックアップが上書きされないようにします。完全バックアップスクリプトの実行の前に、その都度コピーバックアップスクリプトを実行するようにスケジュールする必要があります。

Linuxでcronjobスケジューラーを設定するには、次の手順を実行します。

1. crontabファイルを編集するには、Linux Terminalで次のコマンドを入力します。

```
crontab -e
```

2. コピーバックアップスクリプトを毎日実行するスケジュール:

次の行をcrontabファイルに入力します。

```
0 15 *** /opt/HP/BSM/PMDB/DR/Copy_Backup.sh
```

上記の例では、コピーバックアップスクリプトが毎日15:00に実行されます。

3. 完全バックアップスクリプトを週に1回実行するスケジュール:

次の行をcrontabファイルに入力します。

```
0 15 ** * 1 $PMDB_HOME/DR/Execute_FullBackup_Script.sh
```

上記の例では、完全バックアップが週の最初の日の15:00に実行されます。

4. 増分バックアップスクリプトを毎日実行するスケジュール:

次の行をcrontabファイルに入力します。

```
0 15 *** /opt/HP/BSM/PMDB/DR/Execute_IncSncFullBackup_Script.sh
```

上記の例では、増分バックアップスクリプトが毎日15:00に実行されます。

5. エントリを追加した後で、crontabファイルを保存します。

crontabのすべてのログファイルは/var/mail内にあります。

SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合

カスタムインストールのシナリオでは、SAP BusinessObjectsがインストールされているシステムにログインし、次の手順を実行してバックアップを行います。

\$PMDB_HOME/DR/Execute_BO_FullBackup.shスクリプトを使用すると、SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアのバックアップを実行できます。このスクリプトでは、ライセンス、設定、CACおよびカスタムファイルのバックアップも作成されます。

1. \$PMDB_HOME/DRフォルダーに移動します。
2. Execute_BO_FullBackup.sh<バックアップのパス>を実行します。

例:\$PMDB_HOME/DR> Execute_BO_FullBackup.sh/bo_backup.

BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアのバックアップの例を次に示します。

```
[root@I111111111 bo_backup]# cd SHRDisaster_Backup/
[root@I111111111 SHRDisaster_Backup]# ls
Full_BOFileStore_BackUP.Wed Full_SQLAnWr_BackUP.Wed
[root@I111111111 SHRDisaster_Backup]# cd Full_BOFileStore_BackUP.Wed/
[root@I111111111 Full_BOFileStore_BackUP.Wed]# ls
BO_Backup_log.log frsinput frsoutput
[root@I111111111 Full_BOFileStore_BackUP.Wed]# cd frsinput/
[root@I111111111 frsinput]# ls
a_000 a_011 a_021 a_030 a_040 a_049 a_057 a_066 a_075 a_086 a_093 a_100 a_107 a_114 a_127 a_136 a_143 a_159 a_230 a_239 a_248
a_002 a_013 a_022 a_032 a_041 a_050 a_058 a_067 a_077 a_087 a_094 a_101 a_108 a_115 a_130 a_137 a_144 a_160 a_231 a_240 a_249
a_003 a_014 a_023 a_033 a_043 a_051 a_059 a_068 a_079 a_088 a_095 a_102 a_109 a_116 a_131 a_138 a_145 a_219 a_232 a_242 a_251
a_004 a_015 a_025 a_034 a_044 a_052 a_061 a_070 a_081 a_089 a_096 a_103 a_110 a_117 a_132 a_139 a_146 a_225 a_233 a_243 a_252
a_006 a_017 a_026 a_036 a_045 a_054 a_062 a_071 a_082 a_090 a_097 a_104 a_111 a_118 a_133 a_140 a_147 a_226 a_234 a_244 a_253
a_007 a_018 a_028 a_038 a_047 a_055 a_063 a_073 a_083 a_091 a_098 a_105 a_112 a_119 a_134 a_141 a_155 a_227 a_236 a_245 a_254
a_009 a_019 a_029 a_039 a_048 a_056 a_064 a_074 a_084 a_092 a_099 a_106 a_113 a_121 a_135 a_142 a_156 a_228 a_237 a_247 temp
```

```
[root@I111111111 SHRDisaster_Backup]# cd Full_SQLAnWr_BackUP.Wed/
[root@I111111111 Full_SQLAnWr_BackUP.Wed]# ls
dbbackup_log.log IWFVM01234B0E120_AUDIT.db IWFVM01234B0E120_AUDIT.log IWFVM01234B0E120.db IWFVM01234B0E120.log
```

ライセンス、設定、CAC、カスタムファイルのバックアップファイルの例を次に示します。

```
[root@iwfvm05926 SHRDisaster_Backup]# ls
Full_BOFileStore_BackUP.Tuesday Full_CAC_BackUP.Tuesday Full_Configuration_BackUP.Tuesday Full_SQLAnWr_BackUP.Tuesday
[root@iwfvm05926 SHRDisaster_Backup]#
```

スクリプトによって、次のログファイルが生成されます。

- BO_Backup_log.log - <boバックアップのパス>/SHRDisaster_Backup/Full_BOFileStore_BackUP.<バックアップが作成された曜日>にあります。

例:<boバックアップのパス>/SHRDisaster_Backup/Full_BOFileStore_BackUP.Wednesday

- dbbackup_log.log - <boバックアップのパス>/SHRDisaster_Backup/Full_SQLAnWr_BackUP.<バックアップが作成された曜日>にあります。

例:<boバックアップのパス>/SHRDisaster_Backup/Full_SQLAnWr_BackUP.Wednesday

- Config_backup_log.log - <boバックアップのパス>/SHRDisaster_Backup/Full_Configuration_BackUP.<バックアップが作成された曜日>にあるライセンスおよび設定ファイルのログファイル。
例:<boバックアップのパス>/SHRDisaster_Backup/Full_Configuration_BackUP.Tuesday
- customgroup_backup_log.log - <boバックアップのパス>/SHRDisaster_Backup/Full_Configuration_BackUP.<バックアップが作成された曜日>にあるすべてのカスタムグループXMLファイルのログファイル
例:<boバックアップのパス>/SHRDisaster_Backup/Full_Configuration_BackUP.Tuesday
- CAC_Backup_log.log - <boバックアップのパス>/SHRDisaster_Backup/Full_CAC_BackUP.<バックアップが作成された曜日>にあるCACファイルのログファイル
例:<boバックアップのパス>/SHRDisaster_Backup/Full_CAC_BackUP.Tuesday

バックアップをスケジュール設定するには、次の手順を実行します。

1. ルートとしてSHRシステムにログオンします。
2. crontabファイルを編集するには、コマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。
crontab -e
3. crontabファイルに行を追加して、/opt/HP/BSM/PMDB/DR/Execute_BO_FullBackup.shスクリプトを一日一回起動します。

例:

```
0 15 * * 1 /opt/HP/BSM/PMDB/DR/Execute_BO_FullBackup.sh /root/SHR_Backup
```

上記の例では、週の最初の日の15:00時に/opt/HP/BSM/PMDB/DR/Execute_BO_FullBackup.shスクリプトが起動します。データファイルのバックアップは/root/SHR_Backupに保存されます。

4. crontabファイルを保存します。

crontabのすべてのログファイルは/var/mail内にあります。

管理データベーステーブルの場合

カスタムインストールシナリオでは、プライマリSHRサーバーで次の手順を実行して、管理データベースのバックアップを作成します。

DB_Tables_Backup.shスクリプトを使用すると、管理データベーステーブルをバックアップできます。このスクリプトの実行をスケジュール設定する前に、DB_Tables_Backup.shによって使用されるbackup_aggregate_control.sqlスクリプトを変更する必要があります。

タスク1: backup_aggregate_control.sqlスクリプトの編集

1. テキストエディターを使用して、\$PMDB_HOME/scripts/MgmtDB/Postgresディレクトリから backup_aggregate_control.sqlスクリプトを開きます。
2. 次の行を見つけます。
Copy AGGREGATE_CONTROL TO '<バックアップファイルのパス>/backup_AGGREGATE_CONTROL.dat'
3. <バックアップファイルのパス>を管理データベースファイルのバックアップの保存先の場所に

置き換えます。システム上に存在しないディレクトリを指定しないでください。

たとえば、管理データベースファイルを/tmp/dbtablesディレクトリに保存するには、<バックアップファイルのパス>を/tmp/dbtablesに置き換えます。

4. ファイルを保存します。
5. \$PMDB_HOME/DRからDB_tables_backup.shを実行します。

データベースバックアップをbackup.AGGREGATE_CONTROL.datで確認できます。

タスク2:DB_Tables_Backup.shスクリプト実行のスケジュール

1. ルートとしてSHRシステムにログオンします。
2. crontabファイルを編集するには、コマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。
crontab -e
3. crontabファイルに行を追加して、/opt/HP/BSM/PMDB/scripts/DR/DB_tables_backup.shスクリプトを一日一回起動します。

例:

```
0 15 *** /opt/HP/BSM/PMDB/scripts/DR/DB_tables_backup.sh
```

上記の例では、毎日15:00時に/opt/HP/BSM/PMDB/scripts/DR/DB_tables_backup.shスクリプトが起動します。

4. crontabファイルを保存します。

crontabのすべてのログファイルは/var/mail内にあります。

SHRデータベースの復元

データ、のバックアップを復元する前に、メディアを使用して、SHRをシステムにインストールする必要があります。インストールが完了したら、すべてのバックアップデータをシステムのローカルディレクトリに移動する必要があります。

WindowsでのSHRの復元

Sybase IQデータベースの場合

カスタムインストールのシナリオでは、Sybase IQがインストールされているシステムにログインし、次の手順を実行して復元を行います。

1. 次の手順を実行して、HP_PMDB_Platform_Sybaseサービスを停止します。
 - a. [スタート]>[実行]をクリックします。[実行]ダイアログボックスが開きます。
 - b. [開く]フィールドにservices.mscと入力し、[ENTER]キーを押します。[サービス]ウィンドウが開きます。
 - c. 右側のペインで、**HP_PMDB_Platform_Sybase**サービスを右クリックし、[停止]をクリックします。

- d. Windowsタスクマネージャーで、[プロセス]タブを選択し、iqsrv15.exeを見つけて右クリックして、[プロセスの終了]を選択します。
2. .db、.log、および.iqの拡張子の付いたすべてのファイルをデータベースファイルの場所から取り出し、システム上の他の任意の場所に移動します。これらのファイルは、復元プロセスで再作成されます。
3. SybaseIQサーバーを開始します。コマンドプロンプトで、次のコマンドを実行します。
start_iq @%PMDB_HOME%\config\pmdbConfig.cfg
コマンドは、1行に入力します。
4. Sybase IQサーバーに接続するには、次の手順を実行します。
 - a. SHRシステムで、[スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
 - b. [開く] フィールドにdbisqlと入力し、[ENTER] キーを押します。Interactive SQLプログラムの[接続] ダイアログボックスが開きます。
 - c. 次を入力します。
 - [ユーザーID] フィールドにdbaと入力します。
 - [パスワード] フィールドにsqlと入力します。
 - [アクション] で、ドロップダウンから[このコンピューターで実行中のデータベースに接続する] を選択します。
 - [サーバー名] フィールドに、SHR SybaseIQデータベースのインストール先のサーバーの名前を入力します。
 - d. [接続] をクリックします。Interactive SQLウィンドウが開きます。
5. 完全バックアップを復元します。
 - [SQLステートメント] ボックスに、次のようなSQLステートメントを入力します。

ヒント: このサーバー名はpmdbConfig.cfgファイルで見つけることができます。そのファイルを開きます。該当のサーバー名は-nで始まるテキストです。

RESTORE DATABASE <データベースファイルが存在する場所>FROM <バックアップファイルの保存場所>


以下に例を示します。RESTORE DATABASE 'E:\SybaseDB\pmdb.db' FROM 'E:\HP-SHR\backup\Full.Sunday'

- [F9] キーを押すか、[すべてのSQLステートメントを実行する] を選択して、sqlステートメントを実行します。
- データベースファイルが前回のデータベースファイル場所に復元されたことを確認します。

例:pmdb_user_main01.iq, pmdb.db, pmdb.iq, pmdb.iqtmp.

ヒント: Sybaseデータベースを復元するときに次のエラーが表示された場合は、エラーを無視して、復元プロセスを続行します。

「指定したデータベースを開始できません:データベースエイリアスに不正な文字が含まれています。」

- 次の手順を実行して、SybaseIQサーバーを停止します。
 - タスクバーの [通知] に移動し、Sybase IQアイコン  を探します。
 - アイコンを右クリックし、[<サーバー名>をシャットダウン] を選択します。
 - [はい] をクリックします。
 - [サービス] ウィンドウで、**HP_PMDB_Platform_Sybase** サービスを選択し、[開始] をクリックします。
6. 完全バックアップの復元後に、増分バックアップ (存在する場合) を復元します。

増分バックアップファイルが複数個ある場合、最新の増分バックアップを選択して復元します。たとえば、データベースが木曜日に不具合を起こした場合に、完全バックアップがその前の日曜日にとられている場合は、日曜日の完全バックアップファイルを復元してから、前日の水曜日にとられた増分バックアップを復元する必要があります。


- [SQLステートメント] ボックスで増分バックアップを復元するには、次のようなSQLステートメントを入力します。

RESTORE DATABASE<データベースファイルが存在する場所>FROM<増分バックアップファイルの保存場所>

以下に例を示します。RESTORE DATABASE 'E:\SybaseDB\pmdb.db' FROM 'E:\HP-SHR\backup\Incr_sncfull.Wednesday'

- [F9] キーを押すか、[すべてのSQLステートメントを実行する] を選択して、sqlステートメントを実行します。
- データベースファイルが前回のデータベースファイル場所に復元されたことを確認します。

例:pmdb_user_main01.iq, pmdb.db, pmdb.iq, pmdb.iqtmp.

- 次の手順を実行して、SybaseIQサーバーを停止します。
 - タスクバーの [通知] に移動し、Sybase IQアイコン  を探します。
 - アイコンを右クリックし、[<サーバー名>をシャットダウン] を選択します。
 - [はい] をクリックします。
- [サービス] ウィンドウで、**HP_PMDB_Platform_Sybase** サービスを選択し、[開始] をクリックします。

SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合

カスタムインストールのシナリオでは、SAP BusinessObjectsがインストールされているシステムにログインし、次の手順を実行して復元を行います。

SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアを復元するには、次の手順を実行します。

1. SHRシステムにログオンし、SAP BusinessObjects Central Configuration Managerを開きます。
2. Server Intelligence AgentおよびBusinessObjects Webサーバーを停止します。
3. [サービス] ウィンドウで、**BOE120SQLAW**サービスをクリックし、[停止] をクリックします。
4. 既存のファイルストアフォルダーの名前を変更します。このファイルストアのデフォルトの場所は、C:\Program Files (x86)\BusinessObjects\BusinessObjects Enterprise 12.0\FileStoreです。
たとえば、その名前をFileStore_oldに変更できます。
5. 復元スクリプトを実行します。

```
Execute_BO_FullRestore.bat <BO完全バックアップのファイルストアのパス> <BO完全バックアップのSQL AnWrバックアップファイルのパス> <BOドライブ>
```

このインスタンスで、

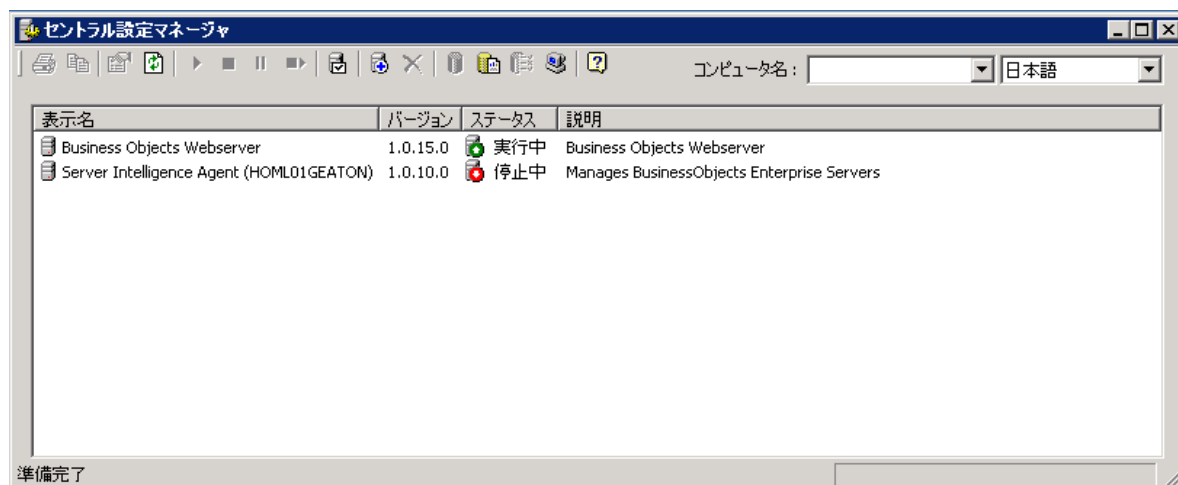
- *FullRestore.bat*は%pmdb_home%\DRにあります。
- <BO完全バックアップのSQL AnWrバックアップファイルのパス>は、SAP BusinessObjectsデータベースディレクトリ (デフォルト:E:\Program Files (x86)\Business Objects\SQLAnywhere12\bin) です。
- <BO完全バックアップのファイルストアのパス> は、SAP BusinessObjectsファイルストアディレクトリ (デフォルト: E:\Program Files (x86)\Business Objects\BusinessObjects Enterprise 12.0\FileStore\BO) です。


例:E:\HP-SHR\PMDB\DR>Execute_BO_FullRestore.bat "E:\BO_backup\SHRDisaster_Backup\Full_BOFileStore_BackUP.Friday" "E:\BO_backup\SHRDisaster_Backup\Full_SQLAnWr_BackUP.Friday" E:
このスクリプトでは、ライセンス、設定、CACおよびカスタムファイルのバックアップも復元されます。

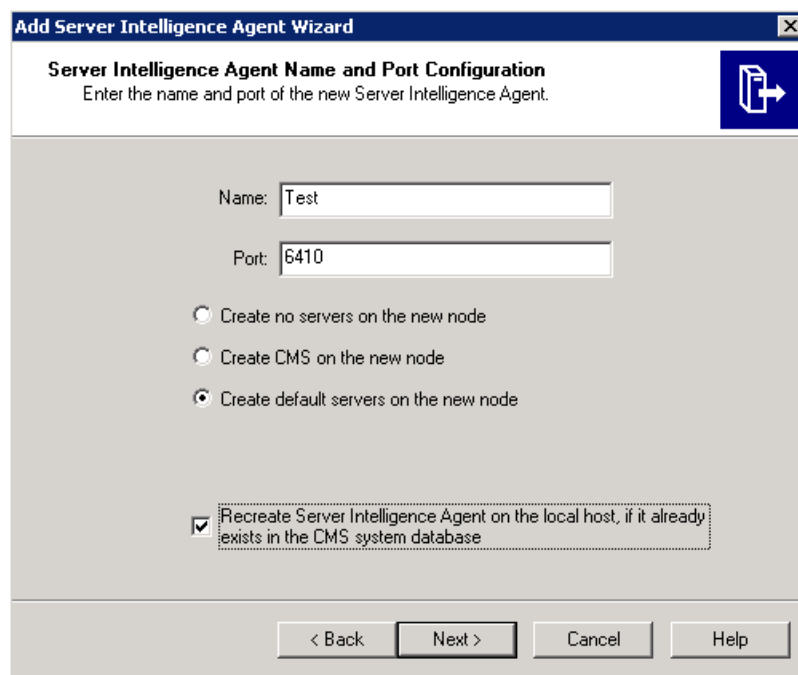
%pmdb_home%\logにあるログファイルを次に示します。

- SQLAnWr_Restore.log
 - BO_Restore.log
 - Config_Restore.log - ライセンス、設定ファイル、カスタムXMLファイルのログファイル。
 - CAC_Restore.log - CACファイルのログ。
6. 元のSAP BusinessObjectsサーバーを削除します。

- a. SQL Anywhereのホームディレクトリに移動します。デフォルトの場所は、<SAP_BusinessObjects>のインストールドライブ\Program Files (x86)\BusinessObjects\SQLAnywhere12\binです。
 - b. dbisqlcファイルをダブルクリックします。[SQL Anywhereに接続] ウィンドウが開きます。
 - c. [SQL Anywhereに接続] ウィンドウで、次の詳細を入力します。
 - ユーザーID:(FQDNではなく) SHRシステムのホスト名を入力します。
 - Password:pmdb_adminと入力します。
 - ドロップダウンから **[開始して、実行中のデータベースに接続する]** を選択します。
 - **[参照]** ボタンをクリックして、**[データベースファイル]**の場所を選択します。デフォルトのデータベースファイルの場所は、C:\Program Files (x86)\Business Objects\SQLAnywhere12\bin\BOE120.dbです。
 - **[データベース名]** フィールドは空白のままにします。
 - サーバー名:BOE120SQLAW_<SHRホスト名>
 - **[最後の切断後にデータベースを停止する]** を選択します。そのほかの設定は変更しないでください。
 - **[OK]** をクリックします。SQL Anywhereコンソールが開きます。
 - d. コマンドペインで、次のクエリーを入力します。
delete from cms_infoobjects6 where parentid=16 or parentid=59;
 - e. **[実行]** をクリックします。削除されたレコード数を示すメッセージが表示されます。
 - f. [SQL Anywhereに接続] ウィンドウを閉じます。
7. 新規Server Intelligent Agentを作成します。
- a. **[スタート]** メニューから、**[プログラム] > [BusinessObjects XI 3.1] > [BusinessObjects Enterprise] > [Central Configuration Manager]** の順にクリックします。[Central Configuration Manager] ウィンドウが開きます。
 - b. **[Central Configuration Manager]** ウィンドウに表示されたServer Intelligence Agentの名前 (括弧内に表示) を書き留めます。



- c. <SAP_BusinessObjectsインストールディレクトリ>\BusinessObjects Enterprise 12.0\win32_x86に移動します。
 デフォルトのSAP BusinessObjectsインストールディレクトリは、C:\Program Files (x86)\BusinessObjects\BusinessObjects Enterprise 12.0です。
- d. **_boe**で始まるすべてのファイルを削除します。
- e. 次のコマンドを実行して、Server Intelligence Agentを削除します。
 sc delete BOE120SIA<名前>
 この場合、<名前>は、[「SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合」\(131ページ\)](#)で書き留めたServer Intelligence Agentの名前です。
 コマンドラインコンソールに次のメッセージが表示されます。
 [SC] DeleteService SUCCESS
- f. **[Central Configuration Manager]** ウィンドウで**[更新]**をクリックし、Server Intelligence Agentが削除されたかどうかを確認します。
- g. **[サービス]** ウィンドウで、**BOE120SQLAW**サービスをクリックし、**[開始]**をクリックします。
- h. **[Central Configuration Manager]** ウィンドウで、BusinessObjects Webserverを右クリックして停止し、**[Server Intelligent Agentの追加]** () をクリックします。Server Intelligence Agentの追加ウィザードが開きます。
- i. Server Intelligence Agentの追加ウィザードで、Server Intelligence Agentの名前を入力し、ポート6410を入力します。**[デフォルトサーバーの作成]** オプションを選択し、**[次の場所にServer Intelligent Agentを再作成する]** チェックボックスをオンにして、**[次へ]** をクリックします。**[新規CMS構成]** ページが開きます。



- j. [新規CMS構成] ページで、[新規CMSポート] テキストボックスに**6400**を入力します。

The screenshot shows a dialog box titled "Add Server Intelligence Agent Wizard" with a sub-header "New CMS Configuration". Below the sub-header is the instruction "Please specify the configuration for the new CMS." and a blue icon with a right-pointing arrow. The main area contains three input fields: "New CMS Port:" with the value "6400", "CMS System Database Data Source Name:" with an empty field and a "Specify..." button, and "Auditing Database Data Source Name:" with a checked checkbox and an empty field and a "Specify..." button. At the bottom are four buttons: "< Back", "Next >", "Cancel", and "Help".

- k. [CMSシステムデータベース...] で **[指定]** をクリックします。[データベースドライバーの作成] ダイアログボックスが開きます。
- l. [データベースドライバーの作成] ダイアログボックスで、**[SQL Anywhere (ODBC)]** を選択し、**[OK]** をクリックします。[データソースの選択] ウィンドウが開きます。
- m. [データソースの選択] ウィンドウで、[マシンのデータソース] に移動し、**BOE120** を選択して、**[OK]** をクリックします。
- n. [SQL Anywhereに接続] ウィンドウで、ユーザーIDとしてSHRシステムのホスト名を入力し、SQL Anywhereデータベースのパスワード(デフォルトのパスワード: pmdb_admin)を入力して、**[OK]** をクリックします。そのほかの設定は変更しないでください。**[パスワードの暗号化]** は選択しないでください。
- o. オプション。監査を有効にします。
- [データベースデータソースの監査..] チェックボックスの下にある **[指定]** をクリックします。[データベースドライバーの作成] ダイアログボックスが開きます。
 - [データベースドライバーの作成] ダイアログボックスで、**[SQL Anywhere (ODBC)]** を選択し、**[OK]** をクリックします。[データソースの選択] ウィンドウが開きます。
 - [データソースの選択] ウィンドウで、[マシンのデータソース] に移動し、**BOE120_Audit** を選択して、**[OK]** をクリックします。
 - [SQL Anywhereに接続] ウィンドウで、ユーザーIDとしてSHRシステムのホスト名を入力し、SQL Anywhereデータベースのパスワード(デフォルトのパスワード: pmdb_admin)を入力して、**[OK]** をクリックします。そのほかの設定は変更しないでください。**[パスワードの暗号化]** は選択しないでください。

注: 管理者(デフォルトユーザー)の場合、パスワードはプライマリセットアップのパスワードと同じである必要があります。

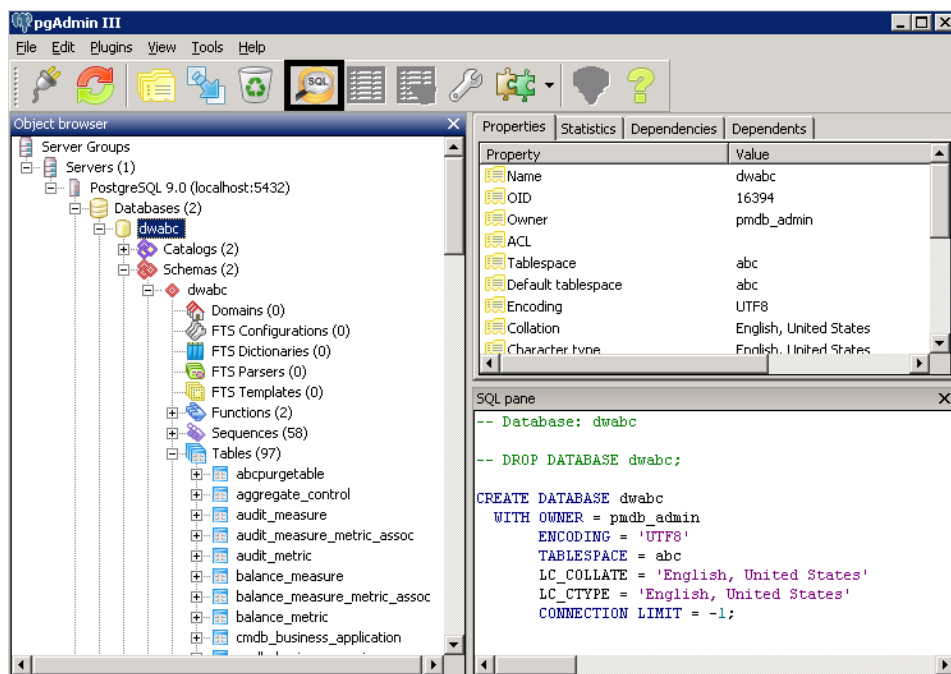
- p. [次へ] をクリックします。
 - q. [次へ] をクリックします。
 - r. [完了] をクリックします。新規Server Intelligence Agentが作成されます。
例: *test* という名前を使用してServer Intelligence Agentを作成した場合、表示名は *Server Intelligence Agent (test)* になります。
 - s. Server Intelligence Agentをダブルクリックし、**[Server Intelligence Agent (test) のプロパティ]** ウィンドウで **[依存関係]** を選択します。
 - t. **[依存関係の追加]** ウィンドウが開きます。リストから **BOE120SQLAW** を選択し、**[追加]** をクリックして、**[OK]** をクリックします。
 - u. Server Intelligence AgentおよびBusinessObjects Webserverを開始します。
8. サービスを開始したら、次の手順を実行します。
- a. Central Management Console (CMC) を起動します。
 - b. 管理者アカウントを使用して、CMCにログインします。
 - c. [サーバー] をクリックします。
 - d. **InputFileRepository**サーバーをダブルクリックします。
 - e. コンテキストメニューで、**[プロパティ]** をクリックします。
 - f. **[一時ディレクトリ]** にパスを入力します。(例: <BOEのインストールディレクトリ>:\Program Files\Business Objects\BusinessObjects Enterprise12.0\FileStore\Input\Temp)
 - g. **[ファイルストアのディレクトリ]** にパスを入力します。(例: <BOEのインストールディレクトリ>:\Program Files\Business Objects\BusinessObjects Enterprise12.0\FileStore\Input)
 - h. **[保存] & [閉じる]** をクリックします。
 - i. **InputFileRepository**サーバーを再起動します。
 - j. **OutputFileRepository**サーバーに対して手順d ~ iを実行します。

管理データベーステーブルの場合

カスタムインストールのシナリオでは、管理データベースがインストールされているシステムにログインし、次の手順を実行して復元を行います。

管理データベーステーブルを復元するには、次の手順を実行します。

1. SHRシステムにログオンします。
2. [スタート] メニューから、**[プログラム] > [PostgreSQL 9.0] > [pgAdmin III]** に移動します。
3. PMDB92_admin@hpというパスワードを指定してデータベースに接続します。sqlアイコンをクリックして、sqlクエリーアナライザーを起動します。



4. データベーステーブルを復元するには、次のクエリーを実行します。

Delete From dwabc.aggregate_control

COPY dwabc.aggregate_control from '<バックアップファイルのパス>\\backup_AGGREGATE_CONTROL.dat'

この場合、<バックアップファイルのパス>は、管理データベーステーブルのバックアップを配置したディレクトリです。

例: COPY dwabc.aggregate_control from 'E://bo_backup//backup_AGGREGATE_CONTROL.dat'

LinuxでのSHRの復元

Sybase IQデータベースの場合

カスタムインストールのシナリオでは、Sybase IQがインストールされているシステムにログインし、次の手順を実行して復元を行います。

注: 復元を実行する前に、ディスクに十分な領域があることを確認してください。

Sybaseデータベースを復元するには、次の手順を実行します。

1. HP_PMDB_Platform_Sybaseサービスを停止します。
 - cd /etc/init.d
 - service HP_PMDB_Platform_Sybase stop

2. 次のコマンドを実行します。 `ps -ef|grep iqsrv15`
コマンド出力で表示されたプロセスIDを書き留めます。
3. `<pid>; kill -9 <pid>`にプロセスIDを入力して、このコマンドを実行します。
4. `.db`、`.log`、および`.iq`の拡張子の付いたすべてのファイルをデータベースの場所から取り出し、システム上の他の任意の場所に移動します。これらのファイルは、復元プロセスで再作成されません。
5. SybaseIQサーバーを開始します。コマンドプロンプトで、次のコマンドを実行します。
`start_iq @/opt/HP/BSM/PMDB/config/pmdbConfig.cfg`
コマンドは、1行に入力します。
6. SybaseIQサーバーに接続します。
`dbisql -nogui -c "uid=dba;pwd=sql;dbn=utility_db;eng=<サーバー名>;commlinks=tcPIP(host=<ホスト名>;port=21424)"`
例:
`dbisql -nogui -c "uid=dba;pwd=sql;dbn=utility_db;eng=abc;commlinks=tcPIP(host=abc.com;port=21424).`
7. 同じパス/ドライブに完全バックアップを復元します。
[SQLステートメント] ボックスに、次のようなSQLステートメントを入力します。
`RESTORE DATABASE<データベースファイルが存在する場所>FROM<バックアップファイルの保存場所>`
以下に例を示します。
`RESTORE DATABASE '/root/SHR_Sybase/pmdb.db' FROM '/root/HPSHR/backup/Full.Sunday'`
ヒント: Sybaseデータベースを復元するときに次のエラーが表示された場合は、エラーを無視して、復元プロセスを続行します。
`「指定したデータベースを開始できません:データベースエイリアスに不正な文字が含まれています。」`
8. 異なるパス/ドライブにデータベースを復元するには、次のコマンドを実行します
`RESTORE DATABASE<データベースファイルが存在する場所> from <バックアップファイルの保存場所>`
`RENAME IQ_SYSTEM_MAIN TO <pmdb.iqへのパス>`
`RENAME IQ_SYSTEM_TEMP TO <pmdb.iqtmpへのパス>`
`RENAME pmdb_user_main TO <pmdb_user_main01.iqへのパス>`
`pmdb.db`へのパスが存在することを確認します。
上記のすべてのコマンドを一緒に実行します。
9. 完全バックアップの復元後に、増分バックアップ(存在する場合)を復元します。
増分バックアップファイルが複数個ある場合、最新の増分バックアップを選択して復元します。

[SQLステートメント] ボックスで同じパス/ドライブに増分バックアップを復元するには、次のようなSQLステートメントを入力します。

```
RESTORE DATABASE<データベースファイルが存在する場所>FROM<増分バックアップファイルの保存場所>
```

```
RENAME IQ_SYSTEM_MAIN TO <pmdb.iqへのパス>
```

```
RENAME IQ_SYSTEM_TEMP TO <pmdb.iqtmpへのパス>
```

```
RENAME pmdb_user_main TO <pmdb_user_main01.iqへのパス>
```

10. Sybaseサービスを停止して開始します。

- service HP_PMDB_Platform_Sybase stop
- service HP_PMDB_Platform_Sybase start

SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合

カスタムインストールのシナリオでは、SAP BusinessObjectsがインストールされているシステムにログインし、次の手順を実行して復元を行います。

SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアを復元するには、次の手順を実行します。

1. SAP BusinessObjectsがインストールされているシステムでSAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアのバックアップをコピーします。このバックアップには、ライセンス、設定、CAC、カスタムファイルのバックアップファイルも含まれています。

2. ルートとしてシステムにログオンします。

3. 次のコマンドを実行して、Webサーバーを停止します。

```
sh /opt/HP/BSM/BO/bobje/tomcatshutdown.sh
```

4. 次のコマンドを実行してSAP BusinessObjects管理者に切り替えます。

```
su - SHRBOADMIN
```

5. 次のコマンドを実行して、すべてのServer Intelligence Agentサーバーを停止します。

```
sh /opt/HP/BSM/BO/bobje/stopservers
```

6. SQL Anywhereサービスを停止します。

```
sh /opt/HP/BSM/BO/bobje/sawstop.sh
```

パスワードを求められたら、SQL Anywhereデータベースのパスワードを指定します。

7. 次のコマンドを実行して、すべてのSQL Anywhereデータベースファイルのバックアップを作成します。

```
cp /opt/HP/BSM/BO/bobje/SQLAW/Bin/*BOE120*<バックアップのパス>
```

この場合、<バックアップのパス>は、既存のSQL Anywhereデータベースファイルをバックアップするディレクトリです。

8. 次のコマンドを実行して、ルートに切り替えます。

```
su root
```

9. SAP BusinessObjectsデータベースファイルのバックアップ(「[SAP BusinessObjectsデータベースおよびファイルストアの場合](#)」(126ページ)で作成したバックアップ)をコピーし、次を実行します。

```
cd /opt/HP/BSM/BO/bobje/SQLAW/Bin
```

```
cp <boバックアップのパス>/SHRDisaster_Backup/Full_SQLAnWr_BackUP.Wednesday/*BOE120*  
yを入力して、既存のファイルを上書きします。
```

10. 次のコマンドを実行して、適切な権限をSAP BusinessObjectsユーザーに付与します。

```
chown SHRBOADMIN:root *BOE120*
```

```
chmod 755 *BOE120*
```

11. ルートではなく、SHRBOADMINユーザーとしてログインします。

```
su - SHRBOADMIN
```

12. SQL Anywhereサービスを開始します。次のコマンドを実行して、SQL Anywhereを開始します。

```
sh $PMDB_HOME/./BO/bobje/sawstartup.sh
```

次のメッセージが表示されます。

```
STARTING SQL AnyWhere12 SERVER
```

```
SQL Anywhere Start Server In Background Utility Version 12.0.1.3457
```

13. 次のコマンドを実行して、新規Server Intelligence Agentを作成します。

```
sh /opt/HP/BSM/BO/bobje/serverconfig.sh
```

コマンドラインコンソールにSAP BusinessObjectsウィザードが開きます。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
What would you like to do?  
1 - Add a Server Intelligence Agent  
2 - Delete a Server Intelligence Agent  
3 - Modify a Server Intelligence Agent  
4 - List all Server Intelligence Agents in the config file  
  
[quit (0)]  
-----  
[4]1
```

14. 1を入力し、[Enter]キーを押します。

```

-----
SAP BusinessObjects

If it already exists in the CMS system database, do you want to recreate the
Server Intelligence Agent on the local host?

Use this option only if this Server Intelligence Agent does not exist on any hosts in the deployment.

[yes (3)/no (2)/back (1)/quit (0)]
-----
[no]3
    
```

15. 3を入力し、**[Enter]** キーを押します。

```

-----
SAP BusinessObjects

Please enter the name of the new Server Intelligence Agent.

[back (1)/quit (0)]
-----
[SHRLR02]SHRM2
    
```

16. エージェントの名前を指定し(ベストプラクティスとして、システムのホスト名をエージェントの名前として入力)、**[Enter]** キーを押します。

```

-----
SAP BusinessObjects

Please enter the port of the new Server Intelligence Agent.

[back (1)/quit (0)]
-----
[ ] 6410
    
```

17. ポート番号として6400を入力し、**[Enter]** キーを押します。

```

-----
SAP BusinessObjects

noservers (Create no servers on the new node)
cms (Create CMS on the new node)
defaultservers (Create default servers on the new node)

[noservers (4) /cms (3) /defaultservers (2) /back (1) /quit (0) ]
-----

[noservers]2
    
```

18. 2(デフォルトのサーバー)を入力し、[Enter]キーを押します。

```

-----
SAP BusinessObjects

Enter the port of the new CMS.

[back (1) /quit (0) ]
-----

[default (6400)]
    
```

19. ポート番号として6400を入力し、[Enter]キーを押します。

```

-----
SAP BusinessObjects

Specify Destination CMS database connection information.

Select the type of database connection from the following:
[Oracle (6) /DB2 (5) /Sybase (4) /MySQL (3) /SQL Anywhere (2) /back (1) /quit (0) ]
-----

[Oracle]2
    
```

20. 2(SQL Anywhere)を入力し、[Enter]キーを押します。

```

-----
SAP BusinessObjects

Specify Destination CMS database connection information.

Enter the ODBC data source name (DSN) for connecting to your SQL Anywhere database.

[back(1)/quit(0)]
-----

[SHRLR02BOE120]
    
```

21. **[Enter]** を押します (デフォルトにより、正しいサーバーが選択されます)。

```

-----
SAP BusinessObjects

Specify Destination CMS database connection information.

Enter the user name for connecting to your SQL Anywhere database.

[back(1)/quit(0)]
-----

[SHR]
    
```

22. **[Enter]** を押します (デフォルトにより、正しいユーザー名が選択されます)。

```

-----
SAP BusinessObjects

Specify Destination CMS database connection information.

Enter the password for connecting to your SQL Anywhere database.

[back(1)/quit(0)]
-----

[]
    
```

23. パスワードを入力し (今後参照するためメモして)、**[Enter]** キーを押します。

```

-----
SAP BusinessObjects

Would you like to enable auditing?

[yes (3)/no (2)/back (1)/quit (0)]
-----

[yes] █
    
```

24. [Yes] を選択し、[Enter] キーを押します。

```

-----
SAP BusinessObjects

Specify auditing database connection information.

Select the type of database connection from the following:
[Oracle (6)/DB2 (5)/Sybase (4)/MySQL (3)/SQL Anywhere (2)/back (1)/quit (0)]
-----

[SQL Anywhere]2 █
    
```

25. 2 (SQL Anywhere) を入力し、[Enter] キーを押します。

```

-----
SAP BusinessObjects

Specify auditing database connection information.

Enter the ODBC data source name (DSN) for connecting to your SQL Anywhere database.

[back (1)/quit (0)]
-----

[SHRLR02BOE120]SHRLR02BOE120_AUDIT █
    
```

26. ODBCデータソース名を入力し、[Enter] キーを押します。
データソース名は次の形式です。

<エージェント名>**BOE120_Audit**

<エージェント名>は、手順14で選択した名前です。

```
-----
SAP BusinessObjects

Specify auditing database connection information.

Enter the user name for connecting to your SQL Anywhere database.

[back(1)/quit(0)]
-----
[SHR] █
```

27. **[Enter]** を押します (デフォルトにより、正しいユーザー名が選択されます)。

```
-----
SAP BusinessObjects

Specify auditing database connection information.

Enter the password for connecting to your SQL Anywhere database.

[back(1)/quit(0)]
-----
[ ] █
```

28. パスワードを入力し (今後参照するためメモして)、**[Enter]** キーを押します。

```
-----
SAP BusinessObjects

Enter the user name to connect to this CMS.

[back(1)/quit(0)]
-----
[Administrator] █
```

29. **[Enter]** を押します。デフォルトにより、正しいユーザー (管理者) が選択されます。

30. パスワードを求められたら、**[Enter]** キーを押します。


```

-----
SAP BusinessObjects

Choose the number of the type of authentication to
use when contacting the CMS

1 - secEnterprise
2 - secLDAP

[back/quit(0)]
-----

[1]

```

31. 1 (secEnterprise) を入力し、[Enter] キーを押します。
32. yesを入力し、[Enter] キーを押します。

```

-----
SAP BusinessObjects

The following information will be used to create the new
Server Intelligence Agent.

CMS Name: SHRLR02
Server Intelligence Agent Name: PRD_SHR
Server Intelligence Agent Port: 6410
Create Default Servers: yes
CMS Port: 6400
CMS Database: SHRLR02BOE120
Audit Database: SHRLR02BOE120_AUDIT

Do you want to create the Server Intelligence Agent?

[yes(3)/no(2)/back(1)/quit(0)]
-----

[yes]
Adding Server Intelligence Agent...
.....
Please press Enter to continue...

```

33. [Enter] を押します。

```
-----  
SAP BusinessObjects  
  
What would you like to do?  
  
1 - Add a Server Intelligence Agent  
2 - Delete a Server Intelligence Agent  
3 - Modify a Server Intelligence Agent  
4 - List all Server Intelligence Agents in the config file  
  
[quit(0)]  
-----  
  
[4]4
```

34. 4を入力し、[Enter]キーを押します。すべてのServer Intelligence Agentを含むリストが表示されます。
35. 0を入力して終了し、[Enter]キーを押します。「Thank you for choosing SAP BusinessObjcets...」というメッセージが表示されます。
36. 次のコマンドを実行して、新しく追加したエージェントを起動します。

```
sh /opt/HP/BSM/BO/bobje/startservers
```

37. 次のコマンドを実行します。

- a. cd /opt/HP/BSM/BO/bobje
- b. ./ccm.sh -updateobjects -cms <SHRホスト名>:6400。

CCMのパスワードがある場合は、次のコマンドを実行します。

```
./ccm.sh -updateobjects - cms SHR_hostname>:6400 -username Administrator -password <管理者のパスワード>
```

```
Creating session manager...  
Logging onto CMS...  
Creating infostore...  
Objects requiring update: 0  
Adding objects...  
CMS Data Source setup finished.
```

管理データベーステーブルの場合

カスタムインストールのシナリオでは、管理データベースがインストールされているシステムにログインし、次の手順を実行して復元を行います。

1. 次のコマンドを実行して、PgAdminIIIを起動します。
 - a. cd \$PMDB_HOME/./Postgres/bin
 - b. ./psql -U pmdb_admin -d dwabc -p 21425
2. インストール後の設定時に設定したものと同一パスワードを指定して、データベースに接続します。
3. sqlクエリーアナライザーを起動します。

4. データベーステーブルを復元するには、次のクエリーを実行します。

```
Delete From aggregate_control
```

```
COPY aggregate_control from '<バックアップのパス>/backup_AGGREGATE_CONTROL.dat';
```

この場合、<バックアップのパス>は、管理データベースファイルのバックアップを配置したディレクトリです。

第V部: 参考文献

付録A: SHRのSiteScopeモニター

次の表に、仮想化メトリックを収集するのに使用されるモニターを一覧表示します。

モニター名	カウンタ	測定名
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\状態	hardware.memorySize
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\状態	summary.hardware.numCpuCores
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\状態	summary.hardware.cpuMhz
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\状態	summary.hardware.numNics
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\sys	uptime.latest[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\mem	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\mem	consumed average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\cpu	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\cpu	ready.summation[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\disk	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\disk	read.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\disk	write.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\net	received.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\net	transmitted.average[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\net	packetsRx.summation[]
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\net	packetsTx.summation[]

モニター名	カウンタ	測定名
	タイム\net	
VMwareパフォーマンス	ホストシステム\リアルタイム\net	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\状態	config.hardware.memoryMB
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\状態	config.cpuAllocation.shares.shares
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\状態	config.hardware.numcpu
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\状態	config.memoryAllocation.reservation
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\状態	config.memoryAllocation.limit
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\状態	config.cpuAllocation.reservation
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\状態	config.cpuAllocation.limit
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\sys	uptime.latest[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	consumed.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	active.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	overhead.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	swpin.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	swapout.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	vmmemctltarget.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	ready.summation[]

モニター名	カウンタ	測定名
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	usagemhz.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	wait.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	ready.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	usage.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	read.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	write.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	received.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	transmitted.average[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	packetsRx.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	packetsTx.summation[]
VMwareパフォーマンス	仮想マシン\リアルタイム\mem	usage.average[]

次の表に、システム管理メトリックの収集に使用されるモニターを一覧表示します。

モニター名	カウンタ	測定名
<i>Windows</i>		
Windowsリソース	メモリー	メモリー\ページ出力/秒
Windowsリソース	メモリー	メモリー\%コミット済み バイト数(使用中)
Windowsリソース	ネットワークインタ	受信パケット数/秒

モニター名	カウンタ	測定名
	フェース	
Windows リソース	ネットワークインタフェース	送信パケット数/秒
Windows リソース	ネットワークインタフェース	受信バイト数/秒
Windows リソース	ネットワークインタフェース	送信バイト数/秒
Windows リソース	ネットワークインタフェース	パケット数/秒
Windows リソース	ネットワークインタフェース	ネットワークインタフェース\合計バイト/秒
Windows リソース	物理ディスク	物理ディスク_合計\ディスクバイト/秒
Windows リソース	物理ディスク	ディスクバイト数/秒
Windows リソース	物理ディスク	ディスク読み取りバイト数/秒
Windows リソース	物理ディスク	ディスク書き込みバイト数/秒
Windows リソース	システム	システム\プロセッサのキュー長
Windows リソース	システム	システム稼働時間
メモリー	N/A	空きMB
メモリー	N/A	使用パーセント
CPU	N/A	使用率
CPU	N/A	cpuの使用率#
<i>Unix</i>		
Unix リソース	ファイルシステム	容量
Unix リソース	ファイルシステム	kbytes
Unix リソース	ファイルシステム	使用%

モニター名	カウンタ	測定名
Unixリソース	ファイルシステム	使用済み
Unixリソース	ファイルシステム	容量
Unixリソース	ファイルシステム	使用済み
Unixリソース	ファイルシステム	%使用済み
Unixリソース	ファイルシステム	(1024-ブロック)-(空き)
Unixリソース	ネットワークインタフェース	パケット
Unixリソース	ネットワーク統計	ネットワーク統計\lpkts
Unixリソース	ネットワーク統計	ネットワーク統計\Opkts
Unixリソース	ネットワークインタフェース	受信バイト数
Unixリソース	ネットワークインタフェース	送信バイト数
Unixリソース	ネットワークインタフェース	ipackets
Unixリソース	ネットワークインタフェース	opackets
Unixリソース	ネットワークインタフェース	rbytes
Unixリソース	ネットワークインタフェース	obytes
Unixリソース	キュー長	キュー長\runq-sz
Unixリソース	キュー統計マシン\状態	キュー統計\runq-sz
Unixリソース	稼働時間	稼働時間\稼働時間

付録B: Xcelsiusのインストール

Xcelsiusレポートは、SAP BusinessObjects Xcelsius Enterpriseツールを使用して作成される対話型のフラッシュベースのレポートです。SHRのXcelsiusフラッシュベースレポートを作成するには、SHRインストールメディアに含まれているXcelsiusアプリケーションをインストールする必要があります。SHRレポートの表示には、Xcelsiusは必要ありません。このため、Xcelsiusのインストールは省略可能です。

注: Microsoft Excelは、基盤としてXcelsiusに必要です。

ハードウェアおよびソフトウェアの要件

Xcelsius 2008 Service Pack 5のハードウェアおよびソフトウェアの要件リストについては、[SAP](#)のドキュメントを参照してください。

Xcelsiusのインストール(オプション)

Xcelsius 2008 Service Pack 5をインストールするためのsetupファイルは、SHRインストールメディアに含まれています。

setup実行可能を入手するには、次の手順を実行します。

1. SHRインストールメディアで、`\packages`フォルダーを参照します。
2. Xcelsius.zipファイルを選択し、任意の場所にコピーし、ファイルを抽出します。
3. 抽出したフォルダーから、`\Xcelsius_2008_SP5`フォルダーを参照し、セットアップ実行可能を実行します。

インストールの詳細については、[SAP](#)から入手できる『SAP BusinessObjects Xcelsius 2008インストールガイド』を参照してください。

ドキュメントに関するフィードバックの送信

このドキュメントについてコメントがある場合は、電子メールで[ドキュメントチーム](#)にご連絡ください。このシステムで電子メールクライアントが設定されている場合は、上にあるリンクをクリックすると、表題の行に以下の情報が付いた状態で電子メールウィンドウが開きます。

設定ガイド (Service Health Reporter 9.40) に関するフィードバック

電子メールにフィードバックを記入して、送信ボタンをクリックしてください。

使用できる電子メールクライアントがない場合は、上記の情報をWebメールクライアントの新しいメッセージにコピーして、フィードバックをdocfeedback@hp.comに送信してください。

お客様からのご意見をお待ちしております。